
喪失の青空 冬

堀田一雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喪失の青空 冬

【Nコード】

N9116C

【作者名】

堀田一雄

【あらすじ】

会計士堀井省二郎が専務を勤める白壁商会の社長、白壁貢が行方不明となった。後には本二冊と一枚の写真が残されたのだが・・・本格的エンターテイメント小説です。

黒い太陽―序（前書き）

単なる面白い小説です。

黒い太陽―序

喪失の青空

プロローグ 透明ビニール

国道四十五号線は起点を仙台として、青森に至る道である。

道は三分の二ほどが三陸海岸と平行して走るため、景色は日本有数を誇るが、なにぶん侵食性海岸である。蛇行に蛇行を重ねるに留まらず、上下の変動がはなはだしい。

その道を宮古から一時間半も北上し、三叉路を右折すると、素晴らしい眺望の鵜の巣断崖に至る。

しかし三叉路を右折せず更に五キロほど北上すると信号機の付いた十字路があり、そこを右折して蛇行を重ね、二十分もすれば、二十年ほど前に開設された三陸鉄道「島の越」の駅である。

しかし、十字路から駅に至る中途、下り勾配の終わりに近い道路の右側に、車一台が通れるかどうかと疑われるほどの未舗装の小道が一本、ガードレールの切れ目から、急勾配で海岸に続いていた。

そこは奥まった入り江になっていて、この辺りには珍しい砂浜が三十メートルほど黒ずんだ絶壁と絶壁の間に広がっていた。

そして砂浜の奥には、板とトタンで作られた漁師小屋が無造作に置かれてあった。

平成十一年二月二十六日、午後十一時十分

半月が中天にかかり、小屋の周りはいやに明るい。

雲はなく冷たい風が強く吹いている。

そして、岩礁に砕ける波の音が激しい。

小屋の中には、四人の男がいた。

三人の男は立っていたが、残る一人はスチール製の簡易ベッドの上

で、仰向きに横たわっていた。
横たわっていた、のではない。

大の字になって、簡易ベッドに縛り付けられていた。

全裸、である。

口には棒が差し渡しであり、両端をタオルで結んだ後、顔面の後ろで固定してある。

全員が激しい息遣いをしているのは格闘が終わった直後であるらしかった。

五坪ほどの小屋の内部は船舶用三百五十ワットのバッテリーランプが上からぶら下がっているだけであるため、その真下だけは手術室のように明るい。室内の隅は暗い。そして、寒い。

立っている男の中に頭が少し禿げ上がった、金縁眼鏡を掛けた男がいて、その男が

「椅子も用意しとくんだったな」

と、荒い息をしながら言う

「次回からはそうしよう」

と、隣の男が、これも荒い息遣いで答えた。そして答えた男はそれを合図のようにして外へ出て行った。

出て行く男は脚が悪いのか、歩く時、少し左脚を引きずるようにしている。

しばらくして戻って来ると、その男の手には八十ccもある黄色いエンジンチェンソーが抱えられていた。そして、そのエンジンチェンソーを床におくと

「ビニールが要ったな・・・」

と、独り言を言うようにして、また外に出て行った。

戸を開ける度に部屋の中へ潮気を含んだ風が吹き込み、渦を巻く。そして風のため固定されていないバッテリーランプが揺れて、男たちの陰影を一層険のあるものにしていった。

波の音が、ひと際大きく響く。

全裸の男の目は、血走っていた。そればかりか棒を差し渡す時の抵

抗を示すのか、左側の口元から首筋にかけて血が流れている。流れ方からして、口元が裂けているのである。

眼鏡の男が板壁に背をもたれさせて言った。

「・・・胸が、痛てえな・・・」

そうすると、それまで全裸の男をじっと見下ろしていた男が

「二ト口は車の中か？」

と言って、眼鏡の男を振り向いた。

その男は、声に特徴があった。

低い。

眼鏡の男は声の低い男と視線を合わせた後、動作で、薬の必要のない事を示した。

声の低い男はまたベッドの男に視線を戻したが、その顔に傷があった。

顎に、右から左にかけて3センチほど、刀傷を思わせる傷跡が盛り上がったように走っている。

波の音が、断続的に大きく響いている。

やがて左脚の悪い男が一辺二メートルほどの透明ビニールをぐちゃぐちゃにして抱え、風に煽られるようにして入って来ると、眼鏡の男がチェンソーを手に取り

「俺がやる」

と、声の低い男に向かって言った。
うなずく。

「よし！」

眼鏡の男は自分に気合をいれるようにして、そう言った。

広い額には汗が浮き、薄くなった頭髮が眉毛の辺りまで、不規則にまとわり付いている。

眼鏡の奥には断固たる決意が宿っているのか、曇り気のない光がキラリとする。

影が、大きく揺れる。

全裸の男は手足を動かそうとしたが、無駄な事と知ったのか血走っ

た目で三人の男の目を代わる代わる睨んで何事か唸っていた。

脂汗に光る顔全体が蒼白になり、追い詰められた男の、切羽詰った必死の形相が見て取れる。

声の低い男が全裸の男の右脚を縛ってあるロープの、ベッド側の結び目だけを解き、思いつき引き張り、別な箇所結びなおした。そうすると脚が今まで以上に大きく開かれる具合になり、大きな腹に隠れるようにしていた陰茎が小刻みに揺れ、縮み上がった睾丸が丸見えになった。

脚の悪い男がどこからか１メートルほどのロープを取り出すと、声の低い男がそれを受け取り、全裸の男の右大腿部の付け根に三重にして結びつけ、揺りこ木状の棒を差し入れた。そして、グイッ、グイッと絞り上げ始めた。

すると、痛いのであろう、全裸の男は野獣の唸り声を思わせるような、凄まじい曇声を発し、のけ反り、後頭部をベッドに何度も叩きつけた。

どうやら右大腿部切断のための、止血のようである。

そこだけが肉がちぎれたかのような、異様な縊れ方をしてしまった。全裸の男は白目を剥き、身体全体で忙し気に息をしている。顔を激しく動かしたため、口元から流れ続けていた血が、顔面左側の耳から頭にかけてベッタリと付着してしまった。

そして二人の男が透明ビニールの両端を持って、全裸の男を覆うようにすると、スイッチを入れたのかチェンソーの金属的な音が波の音と入れ代わって室内に鳴り響いた。

透明ビニールは、返り血を浴びないための用意らしかった。

三人の男たちはお互いの顔を見合わせ、頷きあい、大腿部に視線を移した。

眼鏡の男がベッドに近寄り、チェンソーの先端を大腿部に当てる。

一瞬、透明ビニールに真っ赤な鮮血が飛散し、雫となって流れたが、次から次へと飛んで来る血と肉片のためどす赤く濁っていった。

平成十一年二月二十六日、午後十一時四十分、岩手県宮古市を車で北上すること一時間半余、遠く弁天岬の灯台を望む入り江の、どこにでもあるような漁師小屋での出来事である。

焦燥と呻吟の冬

あるいは、黒い太陽

断章 シェラフ

横浜、磯子区八幡橋の交差点を、国道十六号線に沿って南へ十五分も走れば、JR新杉田の駅に出る。しかし、その中途の左側に「ホテル貴高」と書いた大きな看板があり、その三叉路を右折すると緩やかな坂道が続き、そのつづら折れになった坂道をしばらく登ると、左手一望に横浜の街区が広がる。

眺望のためか、山の一角に五百坪ほどの駐車場とも公園とも付かないような空間があり、車が十台ほど、ある間隔を置いて停まっている。

車は例外なく暖房のためかエンジンを掛けたままになっており、白い排気ガスを出している。

公園は十数本の街路灯が建っており、それぞれの光源の周りは細かい雨のため、暈を宿し、虹を放っていた。

平成十四年一月十四日、日曜日、成人式のため土曜を入れて3連休になっており、今日がその中日、成人式当日である。その為もあつてか、停車している車はそれ自体がひとつの、若やいだ、華やぐような雰囲気を持っているように見え、事実、幾台かの車の外には若いカップルが腕を組んだりして、霧雨の中を歩いていた。

そうした車も三十分もすると何処かへ向かって出て行き、また代わりの車がやって来る。

そんな静かな夜の公園であつたが、北の隅のトイレの向こう側に、もう二時間も動かない濃紺の車があつた。

トヨタ、タウンエース、業務用デリバリーバンである。

夜は十時を告げていた。

心なしか、デリバリーバンの周りは圧縮された焦燥感のようなものが立ち込めており、人が近づかない。車内からは時おり携帯の鳴る音と、電話での会話の声が聞こえる。

と、公園に一台の車が静か滑り込んで来て、トイレを挿んでデリバリーバンの反対側に停まった。車は停まるとそのままライトを消し、エンジンを止める。

深紅のツーシーターベンツである。

そのまま五分十分と経ち、公園を歩いていた一組のカップルが車で立ち去り、人影が絶えると、ツーシーターベンツの扉が開いた。

人が降り立った。

・・・女である・・・若い。

その女が展望台の方へ歩いて行くのを確かめたのか、デリバリーバンの運転席が開き、男が降りて、反対側から展望台の方へ向かった。二人は展望台の横の、ケヤキの木の陰へひっそりと近づき、ひと言ふた言会話を交わしたようであった。そして、男は女から何かセーターのような物を受け取り、誰にも判らない形でまた、ひっそりと別れた。

女は来たときと同じように、大きく迂回して車に戻り、何事もなかったように車を動かした。ツーシーターベンツは公園の入り口まで走っていき、どちらへ向かうか迷うような動きをした後、静かに左方面へ消えていった。

何処かでそれを見届けていたのか、ゆっくり男は現れた。そして車に戻ると水滴の付いた眼鏡を外し、金色に光るその眼鏡をハンカチで拭きながら、助手席にいる男に

「・・・行くか」

と言った。

夜は十時を半ば回っていた。

言われた男は

「そうだな」

と言ってから

「・・・こんな事になるなんて・・・」

と、ため息交じりに呟いた。その声が、低い。

フロント硝子を通して、遠く横浜の街が広がり、いよいよ降り出したのが霧雨が白く、淡く、あるいは紫色の色彩を放って、街全体を沈み込ませ始めている。

「行くぞ」

眼鏡の男が安全シートを掛けてそう言い、エンジンを掛けると、助手席の男が強く頷いた。頷いたその顎に、三センチほどの深い切り傷が斜めに走っていた。

車が動き、走り去ると、その後にはそこだけが長時間の駐車を示すように白く乾いた部分が残されたが、その痕跡も、細雨の中、やがて次第に潤いを帯びて行き、やがて輪郭が消え、全てが闇の奥へと溶けていった。

県道十八号線、通称、修善寺戸田線の北方に、標高四百九十二メートルの真城山がある。その緩やかに続く西側斜面の一角に、どういう訳だかそこだけが平坦になった、百坪くらいの空間があった。

伊豆山中、一月十五日、午前三時。

普通なら漆黒の闇のはずであるが、雪のためか、辺りはボンヤリと明るい。ブナやクヌギが疎らに生えているのが判る。しかし、それにしても、暗い。

「もう少しだ」

低い声がすると、呼応するように

「ああ・・・」

と、もう一人の男が喘ぐように答えて、動作を止めた。そして

「眼鏡が曇って、適わんな」

と言い、スコップを突き刺して眼鏡を外した。

すると、声の低い男はつられたように自分も穴を掘る手を休めて、辺りに降る雪を見ているようであった。そして、その視線はゆつくりと黒一色の空へ移っていく。

「予定より一時間は遅くなっている」

「まあな。雪は計算外だった」

二人はまた気を取り直したのか、スコップを固く握り直し、穴を掘る作業を続けた。

闇の中、雪が降り積もっていく。十分もして

「もういいだろう」

眼鏡の男が肩で息を切らしてそう言つと、さすがに疲れたのか、もう一人の男も

「明かりを点けるか」

と、低く擦れた声を出し、手を止めた。

男は穴から上がると、残土にスコップを突き立て、傍らの懐中電灯を手にした。

明かりが点くと、光の当たった部分だけがクローズアップされ、他の部分が闇になった。

光の輪は、二人が掘った穴に向かう。

「いいだろう」

穴は、縦二メートル、横八十センチ、深さ一メートル弱である。

光の輪は、更にそこから左手に移動する。

光の輪は薄く積もった雪の上を走って行き、三メートルほど先にある銀色のシェラフを捉えた。

シェラフの口のジッパーが開かれていて、人間の顔が仰向きになっており、その上にもやはり雪が薄く積もっている。

三年前の夜、陸中海岸で見かけた脚の悪い男の顔であった。

表情の途切れた顔は、しかし、静かに目を閉じて、泣いているかのような死に顔であった。

序章 その1 理香

安藤理香は壊れた蛙のおもちやを膝に乗せて、時々不意に気づいたようにして、背中 of 紐を引っ張った。蛙は右脚がとんでもない方向に曲がっていて、理香が紐を引っ張ると、弾力を溜めていき、やがて思いっきり自分の頬を蹴った。

タマが壊したんだ。

理香はそんな事を考えている。

「タマ」というのは去年の夏、夫である白壁 貢が渋谷のペットシヨップで買ってきた猫の名前である。

家に連れてきた時、貢は、二人だけのマンション暮らしでは寂しいからな、と言っていた記憶がある。

「タマ」

理香が呼ぶと窓辺のソファアに寝そべっていたタマは、幾分身を震わせてから頭を上げて理香を見た。

「こちらへ来なさい」

タマは無視して、また元の姿勢に戻った。

タマと命名はあるが日本猫ではない。鮮やかなグレーの、アメリカンショートヘヤーの雌猫である。

時計を見ると、四時二十分だった。

雨の中に、陽が翳り始めている。

「ピンポン、ピンポン」

と、インターホンが鳴った。

理香は弾けたように身を起こして、インターホンのある壁際まで走って行き、和枝が写ってるのを確かめてから、施錠を外し

「開いたよ」

と、インターホンに向かって言った。

理香は玄関まで、といっても五メートル程度のことだが、そこまで

小走りに駆けて行き、和枝が来るのを待った。

しばらくするとドアが開き、久松和枝が姿を現した。

和枝は、雫の垂れる傘を理香に手渡しながら、いかにも包容力のありそうな笑顔をして言った。

「急に呼び出して、どうしたのよ」

「待っていたのよ。ね、上がって、ね」

理香は和枝を奥へ誘うと、応接室と書斎を兼ねた部屋へ通し、手前のソファに座った。

華奢で派手な理香とは対照的に、大柄で地味な和枝が窓辺のソファに身を沈めると、タマが怪訝そうな動作をして和枝を見上げ、臭いを嗅ぐ仕種をした。

和枝は体重が七十キロはあるであろうが、あまり鈍重そうには見受けられない。

「何度か電話したけど、やはり会いたかったのよ」

「いったい、どうしたの？ 何が恐いのよ？」

そう和枝が言うには、訳があった。

昨日、一月十四日の午後から七・八回も電話を貰っている。それが、恐いからとにかく来て、というのである。妹の成人式があつて親類なんかが集まつたりしていた為、どうしてもこんな時間になったが、理香は恐い、恐いと言つのである。

夫が一昨日、つまり一月十三日の夜家を出て、そのまま帰って来ない、というのがその理由らしい。

理香がいてくれたコーヒーを飲みながら、和枝は言った。

「どうしたのよ？ いい歳して・・・携帯が繋がらなくて、ご主人が二晩帰って来ないだけでしょ？」

「うーん、そうだけど・・・」

「浮気じゃないの、近頃多いっていうじゃない。今頃どこかの温泉で、よろしくやってんじゃないの？ 連休だしさ」

和枝が冗談めかしく言つと、理香は小首を傾げて言った。

「和枝、違うの、恐いの」

「全く。理香、しっかりしてよ。ご主人が二晩帰って来ないのが、そんなに寂しいの。おのろけみたいね」

「和枝、違うの。冗談ではなく、怖い」

和枝はその時、ようやく理香の暗い目に気がついた。そう、理香はいつものように軽やかではない。

「何かあったの？」

「・・・うつん。何も」

「胸騒ぎがするわけ？」

「・・・しないわ」

理香はタマを膝の上に移し

「何もないし、胸騒ぎもしないわ。怖いだけよ。私、胸騒ぎって知らないけど、これは違うと思うわ」

と、言った。

「怖い、恐いって、そればかりじゃ判らないわ。いったい何が恐いの？」

理香は深々とソファーに身を沈めた。そして上目遣いに和枝を見て、何か訴えそうにしていたかと思うと、身体をガタガタと震わせ始めた。

「理香！」

と、和枝は叫んだ。

理香の急激な変化が和枝を動揺させた。

和枝は理香の横へ行き、その身体を抱きしめた。

「大丈夫。理香、大丈夫よ。落ち着いて。怖いものなんて何もないんだからー」

理香は和枝に抱かれて、ベソをかいた。

「私と白壁の事、あなたは知っているわよね」
と言ったのが、落ち着きを取り戻した理香が、最初に言った言葉だった。

和枝はそれが、籍の問題を含む、理香と白壁との関係の事だと思った。

私ね、と理香は続ける。

「私ね、高校の時から和枝には隠し事なんて、した事なかったわ」

ああ、あの事か、と思いながら和枝は聞いている。あの事とは、高校二年の冬の独りよがり終わった恋愛事件の事である。

「白壁の事だって、何も隠し事なんてしていないの。だって、隠そうにも私、何も知らないんだもの」

知り合ってから三年、一緒に暮らし始めて二年、それでいて何も知らないと言う。

「私、白壁のご両親は勿論、親族の方お会いした事もないし、お話をした事もないのよ。・・・何も、そういう事をいい加減にしていた訳じゃないわ。和枝、私の夢は素敵な旦那さんを見つける事だって、いつも言ってたでしょう」

「うん。理香の夢だからね」

「だけど、その中には結婚式も、ウエディングドレスも、新婚旅行も、みんなセットなって入っていたんだもの・・・みんなに祝福されて結婚するのが私の夢だったのに」

理香はそう言つて寂しそうに微笑み、また目頭にハンカチを当てた。「だけど、それが何故、恐いという事と関係があるの？」

「和枝、あなた、背景のない人間って、知ってる」

「・・・背景？」

「白壁は確かに、白壁商事の社長よ。名義が私のものばかりでも、彼が社長であることは誰でも知っているわ。従業員が13人もいるのよ。でも、白壁貢は、幻だわ」

「まぼろし？」

「そう、金はあつても、他のものは何もないの。このマンションにしたって、私の名義。会社の契約も全て、私の名前」

「ちよつと待つてよ。去年の夏、九州の義母さんから何か貰ったでしょう？」

「ああ、あのお菓子ね。あれだって白壁がそう言っただけよ。・
・そうね、あの頃から白壁が何か変になったの」

「変に？」

「何ていうのかなあ、話をしているも、顔だけこちらを向いている
んだけど、何も聞いていない。そこには、人がいないって感じかな
あ」

「うわのそらって言うわけね」

「違うのよ」

と、理香は言う。

相手に伝えるのに、適当な言葉が見つからない、といったもどかし
さを感じられる。

「そういうんじゃないのよ。暗い、訳の判かんないものを、じつと
見ていて、私は何を言ってもそれを飲み込んでう感じなの。私、
白壁がいなくなって、そのことがはつきり判ったんだわ」

理香は和枝が来た時とは打って変わって、自分の内面を探りながら
話をする、という具合だった。

「本当に去年の夏ごろから、何だか気味が悪くなったのよ。いい、
白壁貢だと彼は名乗っていたけど、本当はそうじゃないのかも知れ
ない。私、あの人と暮らし始めて、最初の頃はそれでもなかったけ
ど、だんだん判り始めた事があるの」

時刻は七時を回っている。

「あの人、私を愛していた訳じゃない。確かに優しい言葉を、いつ
ぱいかけてくれた。けど違う。仕事でもそう、やり手だったわ。
堀井さんの尽力があつたとはいえ、今度のオルフェの件でも凄いと
思った。けど、あの人、仕事に打ち込んでいた訳じゃあない。全
部、どこか違う」

「・・・難しいわ」

和枝はそう言ってからテーブルのコーヒーカップを取り上げ、空で
あるのを思い出し、またテーブルに戻した。

理香は、真っ赤なマニキュアがしてある指を、額に軽く当てて言っ

た。

「だけど、あの人には目的があった。何か、目的があった。それは判る気がする。する事に、何か一貫したものがあった・・・」

「・・・どんな？」

理香は目を閉じて考える様子であつたが、やがて、いやいやをするように首を振り、独り言のように呟いた。

「判らないわ。何も、判らないの・・・判らない事が、こんなにも恐ろしいことだなんて、私、思いもしなかった」

序章　その2　省二郎

堀井省二郎はオープンにパン二切れを入れ、スイッチをひねった後、マホガニーのコーナーボックスから黄色いバスタオルを取り出し、肩に掛け、シャワーを浴びるためにバスルームに向かった。

まだ頭の中の思考が英語で流れる。

歩きながら横目で、ちらつと本棚を見る。万里子から贈られた濃紺色のオーストリッチの財布が、英文で企業財務などと書かれた本の間に置いてある。

堀井省二郎は、今年五月の誕生日を迎えれば二十八歳になる。そろそろ、と省二郎は考えている。

お袋に万里子の事を言わなければ

それを思うと、いつも困惑した母親の顔が浮かぶ。先日も、いつでも昨年の十一月末の事であるが、省二郎が会計士試験に合格した事が判ると、それではと言って省一郎に結婚話を持って来た事がある。

「考えておくよ」

と、あの時は曖昧に答えておいたが、実は結婚しようと思っている女友達が、一人いるのだ。

河合万里子、という娘である。

もつとも、大学時代の友人たちと話をしている限り、自分だけが未

だに女遊びをしているように思える。

勤め先の有本会計事務所が新橋にあり、自分が住んでいるマンションが渋谷にあるという事もあり、夜な夜な飲み歩き、ホテルから事務所へ直行という事も、月に一度や二度ではなかった。

とはいえ、省二郎自身不思議なのが、遊びと仕事が明確に区別できるのである。仕事関係の女性からも、幾度かそんな気ぶりを見せられた事があるが

嫌だな

と、訳もなく思ってしまう。嫌悪感、というもではなく、こういう場合変な言い方だが、仕事に対する潔癖感が表面に出てしまうのである。

昨日、一昨日、そして先一昨日の三連休にしても、遊びの誘いはずいぶんあったのだが、省二郎はCPAというアメリカの会計士資格を夏までに取得しようと、集中勉強していたのである。

日本の公認会計士の資格を取った勢いで、どんなに遅くとも八月までにはアメリカに飛んでCPAの資格まで一挙に取ってしまうおう、それが省二郎の基本戦略である。企業というものを知れば知るほど海外との会計の整合性を自分自身が把握しないと、これからの時代には適応出来ない事が判る。支店は海外という会社が、ほとんどの時代なのである。

そのため、まとまった時間が取れるこの三連休は、どこへも行かずといってもコンビニには二度出かけたが、連絡も全て断って英文の会計テキストと過去の問題集に没頭した。

携帯などあると一つ事に集中など出来ないもので、思い切って金曜の夜に事務所を出る時、机の中にしまっておいた。いつも持ち歩くパソコンも、事務所に置いたままである。テレビも、一切つけなかった。この三日間はコンビニで食料を購入した以外は、とにかく日本語と縁を切った。それくらいの事をしないと、CPAなんかは取得出来ない。

省二郎は携帯もパソコンも、テレビまでもがない生活を、久しぶり

で味わった。味わったが、終わった後も頭の中の思考が、日本語になかなか切り替わらないのには閉口した。

そんな彼が、この娘はと真剣に考えている相手が万里子だった。

河合万里子、二十三歳になったばかりの大学の後輩で、付き合いは四年に及んでいる。

去年の暮れから正月にかけて、十日間、オーストラリアの海へ二人で遊びに行った時、万里子は青く広がる海原を見渡せるカレンドホテルの一室で

「私の事、きちんとして欲しいな」

と、省二郎にせがんだ。

その時、この秋には、と答えたのだ。

春でも良かったのだが、CPAの資格を取ってからにしたかった。

それに、実務を執っている白壁商会とオルフェの契約を済ませれば、白壁商会は完全に軌道に乗る。それもこの春が山場なので、それが終わってからにしたかった。

それまでには、高崎に住むという万里子の両親にも承諾を取り、彼自身の母親にも引き合わせる事が出来るであろうと思っていた。

ミルクティーとベーコンエッグ、それにパン二切れが、省二郎の今朝の食事メニューだった。

三ヶ月ほど前まではパンが三切れだったのだが、体重が110キロを越えた時点で、ダイエットをする事にしたのだ。

身長百八十八センチの割合で考えれば若干オーバー気味程度なのだが、学生時代とは違って、今は肉の付くところが違うのか、一旦体重が増すと生半な事では体重が減ってくれない。

新聞を読み終えてスーツに身を包んだ頃には、八時近かった。

連休の間ひどく愚図ついた天気も、今朝方になって雨雲が飛び去り、今はさっぱりした青空を見せている。

正月気分の余韻が残っていた街も、この連休によってすっかり本来

の活気を取り戻していた。

育ちの良さを表すような少し下ぶくれの、ふつくらとした顔を空に向け、大きな息を吸い込んで、省二郎は勤め先である有本会計事務所へ向かった。

有本会計事務所は、税務事務所としては規模の比較的大きな方だった。

有本所長以下三人の税理士を抱え、他にアシスタント役の事務員が二人、税理士見習いが一人、そして省二郎である。

省二郎は昨年の会計士試験に合格してから、周りのみんなが自分を特別視しているのを、充分すぎるほど意識している。

所長である有本精一の甥という事で、当初から特別視されてはいたが、今回の視線は全く質の違うものであった。

大学時代はアイスホッケー部に所属して選手としての活躍に熱中し、そのために単位が足らず一年留年した。その後大学院の修士課程を履修して二年が過ぎた。ただ、専攻していたのが土木科の橋梁だったので、折からの公共事業縮小の嵐に遭遇し、就職がややこしかった。そんな時、精一叔父に拾われてアルバイトに入所したのだが、あれから丸三年経しか経たないのに、歳若い省二郎がいつの間にか事務所の中心的人物になってしまった。

就職は悩んだ。身体を使うような土木が好きなのだが、それが経理とは・・・緊急避難的に思っていたのだが、この方面での才能も省二郎にはあったのであろう、名指しでお願いしたいというクライアントが少なくなかった。

いずれにしろ有本会計事務所が、税務中心の事務所から企業会計全般を診るコンサルタント事務所に方向を持っていくのかどうか、それは省二郎の動き次第という状況であった。

省二郎が事務所に入ると、沢田博子が見てニッコリと挨拶をし

た。

沢田博子は二人いるアシスタントの、年配者、といっても三十二歳だが、の方である。仕事は精一叔父と省二郎のアシスタント、となっているが、誰が決めたわけでもない。

ニッコリ笑った沢田博子は、省二郎が席に着くなり斜め前の席から「白壁商事の奥さんから、二度も電話が入ってますよ」と、言った。

「奥さんて、理香さんかい？」

「ええ、出社次第電話が欲しいそうです」

省二郎は紙コップに入ったコーヒーを一口飲んで、時計を見た。まだ九時前だった。

次にパソコンのスイッチを入れ、引き出しを開け、久しぶりに携帯を取り出し、スイッチをONにするとメールがやたら入っているが、ほとんど理香のものだった。後は万里子のものが二通と、兄から一通。

全てにざあっと目を通してから、パソコンのメールにも目を通す。

白壁に関係するものは何もない。

省二郎は自分の机の上の電話機を見て、ボタンを押した。

はい、と言う返事を聞くと、受話器を取り上げ

「もしもし。堀井ですが、電話を頂いたそうで・・・」

と、言う

「堀井さん？」

理香のハスキーな声がした。

「あのう・・・主人ご存知ないかしら？」

「はっ？ ご存知って、どうかしたんですか？」

と、反対に聞き返すと、理香は言った。

「主人、十三日の夜から帰らないのよ」

「帰らない？」

「家にいないから、今日は会社に出社するのかなあって思って来たんだけど・・・私、心配なもんだから、八時前から会社に来てるの

よ。だけど、来ないし・・・」

どういう事なの、と、理香に詳しい話を聞くと、理香が言うには、十三日の午後七時ごろに何も言わず外出し、すぐ帰る素振りでジャケットを引っ掛けて出かけたが、そのままだと言う。

理香の口真似をするなら

「まるつきり、それつきりなの」

という事になる。

誰かに会いに行ったとも思えないし、何処かに所用があつたとも思えない。十三日の夜、テレビニュースを見ていて、その途中、何も言わず出て行った、と言う。

「あなたに連絡したかったんだけど、三鷹が家族で温泉スキーに行っちゃてるし、あなたの携帯もずっと繋がらないでしょう」

と、こんな時にも拘わらず理香は明かるい調子で言った。

理香は、省二郎の実家である三鷹の、兄嫁の姉になるのだった。

兄嫁の姉といっても、省二郎より一つ年下の二十六歳、昭和五十一年生まれでまだ子供はいなかった。

「だから私、今日、会社に主人が来ないのなら、きっと何か主人の身に、きつと何か起きたんじゃないかと・・・私、どうしていいのか・・・」

と言って、今までの明るさが嘘のように、不意に涙ぐんでいるようだった。

ハスキーな声でいつも明るく、お調子者の印象が強かっただけに、

省二郎はドギマギして言った。

「ご心配は良く判りました。私も心当たりを当たってみますから、それからにしましょう。とにかく、社長が帰って来るまで会社において下さい。携帯はオープンにしているので、いつでも連絡下さい」

省二郎は、沢田博子が持つて来た書類を片手に、白壁との出会いを思い出していた。

省二郎が白壁商会を知ったのは、一昨年の九月で、当時新婚だった兄嫁のその姉である理香と、三鷹の実家で会った時

「夫が事業をしているけれど、経理の事があまり判らないから・・・

」

と言われ、その後、事務所に訪ねて来た白壁から正式に依頼されてからの事だった。

もつとも、姻戚関係に絡まれて閉口している同僚も多少は見ている事もあり、本当は断りたかったのだが、有本会計事務所自体が姻戚関係という事になるため、断り切れなかったというのが実情に近かった。

それに、白壁貢の屈託のない笑顔を見ている内に、警戒心が薄らいだ事も多分にあった。

白壁商会は、美容院へ美容器具や化粧品などの卸し業務をしている、三年半ほど前に設立された会社だった。いや、正しくは会社ではなく、個人商店であつた。

経理を引き受けてから、白壁商会のいろんな事を知つた。

不思議な部分のある会社だった。

所在地は世田谷の駒沢大学校舎の近くで、オリンピック公園に面していた。従業員は現在、当時より六人増えて十三人であるが、その規模は同業他社と比べて中規模の下、といったところである。

普通、売り上げの面から見てもこの規模になれば法人化しなくては、税務上の様ざまな特典を与えられず、不便である。それに、営業面でも問題が発生する。

当然、社員の社会保険など福祉関係も停滞している。

唯一救いがあるとすれば、銀行をふくめた公的機関からの借り入れの必要がない事である。

白壁はお金を持っていた。

個人資産まではタッチしなかったが、必要になると白壁は数千万円単位の現金を持つてくる。

しかし不思議な部分とは、実はそんな事ではない。

それは、車一台に至るまですべて理香の名義になっている、という事である。正式な書類は全て安藤理香の名の元に押印してある。

その点を白壁に尋ねると、自分の住民票は大阪に置いたままなので理香のを使用している、と言う。

「理由はこれといって、格別ないよ」

と、笑いながら言い、至急こちらに本籍も移し、理香を正式に籍に入れようと思っている、というような事を言った。

省二郎は初めの頃こそそういう不明朗な、体の芯にチクチクする、いわば動物的な肌触りの悪い事柄を暗い翳のように感じたが、半年もして確定申告を作成する頃には慣れてしまっていた。

白壁商会の事務をしている理香とも仕事の都合上、度たびプライベートな話をする機会があり、理香の開放的というより、アツケラカシとしたところにも好意以上のものを感じた。

「省二郎さん、白壁と飲みに行った時にでも、催促しといてね」

と、そんな具合に籍の事も頼まれたりして、それが省二郎には快く思われたりした。しかし、理香とは二・三度飲みに行ったが、白壁と行く事はなく、代わりに二人きりの時、会社の法人化に絡めてその事を持ち出すと

「申し訳ないね。会社は会社でこんな出鱈目な形態に上、家庭の問題にまで君を煩わせて」。いや何、もう近々郷里へ顔を見せに行こうと思っているから、そのついでといつては何だが、大阪の方にも寄って住民票などもこちらに移すようにするよ」

と、如何にも手軽に、気さくに言ったりした。そして

「会社の運営などについても、堀井君は堀井君なりに考えることもあるだろう」

なに、遠慮はいらない。みんなにどしどし指示してやってくれ」

などとも言ったりした。

白壁貢の物腰は理香ほどではないにしろ、割と軽く、会社の事について経営者とは思えない程あっさりしていた。

左脚が悪いらしくすこしビツコを引く白壁が何かの折に伏し目勝ちに「利益なんか、どうでも良いんだよ」

と言った言葉が、未だに鮮明に思い出せるほどだ。といって、業績が悪いわけではない。

扱い品目と狙った市場が良かったのか、そんな野放図な経営形態にも拘わらず借入金ゼロの会社はずいぶん利益を上げていた。

そんなこんなで一年もしない間にいつしか省次郎は専務のような立場に立ってしまい、今では白壁商会に机まで置くだけでなく、月々過分な手当まで貰うようになってしまっている。

会計を志す者としてはあまり褒められた話ではなかったが、姻戚関係という義に隠されて、省二郎自身の内で正当化されてしまっていたのだ。

また、面白くもあつた。

その白壁が、行方知れずだという。

しばらく考えて、省二郎は株式会社オルフェに電話を入れた。

「有本会計の堀井ですが、田尻部長おみえですか？」

受付けた女性から田尻部長に通じたらしく、回線を二度ほど切り替える音がしてから田尻部長が出た。

「お早う。こんな朝早くから、急用かい？」

「お忙しいところ、恐縮です」

と、省二郎は当たり障りのない事を二・三話してから

「シャルルの件で、白壁はそちらに伺っておりませんか？」

と、尋ねた。

「シャルルの契約なら、内の社長の都合もあつて来週の木曜日になつていたんじゃないか？ 確か、二十五日だと思つていただけ」

「それは判っているんですが、白壁が何ですか、そちらに伺つてパ
ンフレットをもう少し貰いたいようなことを言っていましたので・
・そちらへ伺つたのかと思ひまして・・・」

まさか、行方知れずだと言うわけにもいかない。

「ちょっと待ってくれよ」

田尻部長はそう言つて、誰かと話をしている様子だった。

「みんなに聞いたんだけど、来ていないね」

はなはだ要領を得ない対応をしてから、ゆつくりと受話器を置いた。来週の木曜日、白壁商事はイタリアの美容器具メーカーと、極東における専売契約を結んでいるオルフェとの間で、関東地区の特約店契約を結ぶ手はずになっているのだった。

狙いは、近頃急速に需要が増し始めている、年配者向けエステティック形式の美容院への売込みであるが、他の美容器具卸会社からも既に充分な引き合いが来ている。

オルフェが有本会計事務所の得意先である事から、終始、省二郎が話をリードして、大手との競争に打ち勝つ形で獲得したのである。

デポジット形式の前渡金二千万円を含めて、そのための資金五千万円は白壁が用意したのだった。

その五千万円の現金は、今、省二郎が借りている渋谷の銀行の貸金庫に置いてある。

省二郎が知っている範囲で言えば、白壁が行きそうな所はオルフェくらいしか考えられなかった。

昼まで待ってみよう。それからだ・・・

昼を過ぎても、白壁の所在は不明のままだった。

省二郎は沢田博子に仕事の指示を出してからマンションに戻り、この四月に始めて車検を受けるトヨタソアラを駆って、白壁商会へ向かった。

白壁商会は二階建てビルを一棟ごと借り切つて営業している。一階は配送と倉庫に使用し、二階は応接室と会議室、そして事務所である。

その薄陽の射す応接室で、理香は小さくなってダークグリーンのソファアーに腰を下ろしていた。

理香は、端然として、どこか絵画の少女を思わせる雰囲気を漂わせ、省二郎を見ると

「どうなったのかしら？」

と肩で息をした。

「理香さん、言にくい事なんだけど、こうなっては仕方ない、交通事故という事が一番考えられるからね。やはり、警察に相談してみよう」

「ええ、友達もそれが一番良いって言うし」

そう言つて理香は、どんぐり目をパチクリとさせた。

警察に連絡を入れたが、都内にはそれに該当する件はないという返事しか返つて来なかった。

「一度消防署の方へ問い合わせたらどうです？ 救急車が走つても事件性がなければこちらに連絡はありませんからね。それでも分かんなくて心配な場合は、そうですね、どうしてもという事なら一度こちらへ来て下さい。来る時には写真があると良いですね・・・私ですか、私は交通課の畑と言います。私でなくとも、誰でも良いですからね」

消防署に問い合わせをすると、警察とほとんど同じで、やはり該当する患者さんないという。

省二郎と理香は一旦三軒茶屋の里香のマンションへ行き、白壁の写真を携えて真新しい渋谷署の畑を訪ねた。

畑はその場で写真などをスキャナーし、手配などを行った。そして「今のところ該当する方は見当たりませんのでなんとも確答できませんが、分かり次第連絡しましょう」と言った。

それだけだった。

電話の時と違つて、幾分冷淡になつたと思う。理由は省二郎にも理香にも判っている。それは、現住所は良いにしても、本籍も住民票の置き場所も里香が知らず

「九州の大分とか言っていましたか・・・」

と言った事から、白壁と理香が内縁関係である事を畑が知り

「あなたは白壁理香さんじゃなくて、安藤理香さんなんですね」

と言って、搜索願いの用紙を確かめ、なあんだ、といった態度を見せ
「兄弟の所とか、親の所にいるんじゃないの？」

と、不審を持たれた事による。

街は急速にその表情を変えようとしていた。

薄明の中、ネオンが瞬き始め、道行く車はスモールランプを点灯し
始めている。

省二郎は帰りの道すがら、車の中で理香に白壁の身元の点を確認かめ
てみた。

「知らないのよ、彼ってそういう事何も言わないんだものー 省
二郎さんから見れば、私がチャランポランに見えるでしょうけど、
私、人並みに、ううん、人並み以上にそういう事って気になる性質
なの。その事で彼を問い詰めた事も一度や二度ではないわ」
と言って脚を組み直し、暗くなった車内の中で薄いピンクのコート
に顔を隠し、泣いた。

「僕たちの取り越し苦労かも知れないし、何といってもまだ4日
目だからね。

それこそ警察の言うように郷里に帰っているんじゃないかな。もう
少し様子を見てみようよ。その間、僕も毎日会社に顔を出すように
するからさ」

省二郎はそう言って、理香をマンションまで送り、別れ際に

「ご主人の荷物を探してみたら、何か判るんじゃないかな」

と言うと

「ええ、その心算よ。主人の持ち物に無断で触る決心が付かなかっ
たけど、今日一日で決めたわ。帰ったら、二人で徹底的に探してみ
る心算り」

と言った。

「二人？」

「ええ、一昨日からお友達に来て貰っているの。恐いから」
そう言つて、淋しく笑つた。そして、前を見詰めていて

「省二郎さん、わたし、恐いの・・・」

と、怯えた表情を垣間見せた。

理香は、何かを隠しているんじゃないのか？

省二郎はそんな事も思つた。

序章 その4 持ち物

その後も事態の進展はなく、二日三日と時間だけが流れた。

省二郎は税金の申告の締切日が近づいている事もあって、仕事が山積みの状態にも拘らず、所長に私用の許可をもらい、渋谷署に行った翌日から、午前中は申告書とパソコンを持って白壁商会へ出社していた。

省二郎が直接出向かなくても、日々の会社の運営はそれほど難しいものではなく、基本的には前日受けた注文を翌日に配達するという訳だから、当座の間なら里香の指示だけでも充分運営は可能だった。しかし、省二郎には一つの悩みがあつた。

渋谷の貸金庫に置いてある五千万円のお金の事である。

白壁は昨年十二月中旬に、その五千万円のお金を省二郎に渡す時、こつ言つたのだ。

「堀井君、このお金は里香の知らないお金なんだ。今、この金のことを里香に話したくないんだよ。隠し通すとか、そんな気は毛頭ないし、そんな事出来ない話だしね。来年、君にも里香にも僕のお金の事はハッキリさせようと思つているから、それまで内密にしておいてくれ」

省二郎はその時、白壁の個人資産が思つたより豊富であり、白壁はその隠してある資産を理香に話すのに、タイミングをみているのだな、と思つた。そういえばあの時の、いつになく暗い、重い気配と、

それでいてふつと気を抜くような、遠くを見ているような、それらの入り混じった、異様といえは異様な、そんな雰囲気を含、省二郎は身震いして思い出す。

そうか、白壁のあの名状しがたい闇のようなものを、里香は恐いと言っているのか

省二郎の思考は、様ざまに乱れ飛んだ。

こんな事なら、もっともつと身元を調査するんだった。しかし誰がこんな馬鹿な事を想定しながら生きているというんだ。怒りに近い感情が湧く省二郎だった。

本人がいなくなつて、どこの誰だったのか判らない、という事も世の中にはあるだろう。特殊な例だとは思わない。けれど、省二郎は思う。

けれど、月商四千万円、年商五億円という会社の社長が、どこの誰だったか判らない、という事があるのだろうか？

省二郎は会社というものに対して、たとえそれが個人であろうと法人であろうと、また経理に偏っていたとしてもプロとしての見識を持っているのだが、この業界で月間四千万円をこなす会社の社長が、たとえ表見代表人として理香を立てているとはいえ、どこの誰か判らない、という事は考えられない。

社会を知らない高校生なら、あるいは大学生でも、誰かを代表に立てて自分が裏で糸を操る、という事が本気で出来ると思つかも知れないが、それは実業界という現実社会では無理である。

一ヶ月、あるいは二ヶ月はそれで周囲を騙す事が出来るであろうが、限度は半年であろう。

現金決済という決定的な主導権を持っていたとしても、事はそう簡単ではない。現金なら何でも売ってくれるとか、何でも買えるとか、家庭の延長じやあるまいし実業界では通用しない。

手形を駆使したり、暴力団が介在しても絶対一年は保たない。考えられる範囲内で保つ場合があるとするなら、ひとつだけ。

それは、白壁が言うように「利益なんかどうでもいい」場合だけだ。

省二郎は沈思することが多くなった。

金曜日までは何の変化もなかった。

警察からも連絡はない。

携帯は相変わらず電源が切れたままだ。

いよいよ白壁の身に不測の事態が起きたに相違なく、焦燥感が募った。

相変わらず理香は

「家には手紙の類すらないし、白壁の身元を示す、なーんにもないわ」

と言って、悄然としていた。

しかし、金曜日の夜遅く、理香からメールが入った。

「証拠、発見。あした朝、会社で」

明日は土曜日であるが、関東地方の美容院は火曜日を定休日として
いる店が多いので、白壁商会もそれに倣って火曜日が定休日になっ
ている。

そんなわけで、土曜の朝、省二郎がいつものように白壁商会へ顔を
出すと

「・・・省二郎さん」

と、理香は言って、応接室へ手招きをした。

省二郎がソファアに座ると

「これ」

と言って、二冊の本と一枚の写真をテーブルの上に置いた。

「これ、机から出てきたの」

「机から・・・？」

理香が言うには、昨夜、和枝という友人と二人で再度、机を探した
という。先日省二郎と別れた時探そうとしたのだが、鍵が掛かって
いたので、その時はそれをこじ開けたという。しかし、その時は何
もなかった。

その後も、気休めのように何度か引き出しなんかは探したという。

けれど昨日はその、こじ開けた時にゆがんでしまった机の引き出しを、和枝と言う友人が力任せに引きずり出してみた。

引き出しには何もなかったが、机と引き出しの空間に大型封筒が隠すようにして置いてあり、中に入っていたのがこれだという。

省二郎が手に取ってみると、本二冊は詩集と写真集だった。

詩集は新しいのか紙の匂いがする。題名は「あおぞら」となっており、著者は苗字はなくなっているか、印刷での著者名ではなく手書きで最後のページに「ゆう子」書いてある。

写真集は表題が「雲」となっており、副題が「四国の山」としてある。写真家は高木 浩次である。

「それを見れば、白壁の身元というか、秘密も少しは判るわ」

と、理香は白くて細い首を大きく伸ばし、後ろへ倒れこむようにして言った。

次に、省二郎は写真を手にした。

近頃急速に普及し始めているデジタルではなく、ポケットカメラで撮った物なのか、光沢のあるサービサイズの写真は粒子が粗く、スナップにしても輪郭が明瞭ではない。

写真の右下に撮影日がプリントされており1995、09、07となっている。七年前だ。

見るとどこかの会社の慰安会なのか、十四・五人の男性たちと四人ほどの女性たちが巍巍とした黒岩の群れを背景にして並んでいる。

後列の右から三番目に、白壁が立っている。立って、幸せそうにこちらを見て微笑んでいる。

「その裏をご覧になつて。電話番号がかいてあるわ」

裏返してみると、電話番号が三つ書いてある。固定電話の番号だった。

一つは都内なのか、033で始まっているが、もう一つは0467、もうひとつが0585で始まっている。

理香は、調べたら鎌倉の局と岐阜の局だった、と言う。

「掛けてみたの？」

和枝が掛けたと言う。

「だって何だか怖くって・・・」

都内の電話も鎌倉の電話も方も呼び出し音は鳴るが誰も出ない、そして岐阜の電話は使用されていないと言う。

省二郎が写真と二冊の本を代わる代わる見比べていると、扉をノックする音がして

「失礼します」

と、隣の事務室から事務員が姿を見せた。そして理香に来客を告げると、里香は省二郎に眼で合図をして、渋い顔をして出て行った。しばらくするとお茶をお盆に乗せて帰って来て、

「ごめんなさい」

と言った。

「何だい？」

「保険なのよ」

「保険？」

「白壁がね、会社を法人化するから、その時団体保険に加入するって言ったらしいの。二月だか三月だとかで、それを今から手続きして欲しいってー」

その事なら、省二郎が知らない訳ではない。

知らないというより、法人化した時に保険に入って、免税の特典を活かすよう働きかけたのは省二郎である。

保険の手続きまで間近に迫っていた。というのに、どうした事なのだろう。何故、失踪したのだろう。何処へ・・・
通りを隔ててオリンピック公園の樹が見える。風がないので、そよともしない。

鳩が大きく旋回している。

熱いお茶を啜るようにして飲んでから、省二郎は言った。

「この写真く鬼押出し」>と思うけど、理香さんは覚えなの？」

「全然！ 昨日和枝からく鬼押出し」>って聞いて、私、初めてそれが長野県にあるって知ったんだもの。それに、白壁は写っているけ

ど、他の人たち・・・私まるつきり知らない人たちよ」

「・・・そう」

「それより、その写真集を見て」

「この、雲ってやつかい」

「ええ、その本の裏表紙の裏をごろんになって」

そう言つて里香はギュツと唇を結んだ。

省二郎が言われた箇所を開いて、見ると

二人の愛を記念して

1996年10月14日

白壁 貢

明子

と、女性の達筆な字で書いてある。ただ、白壁貢と書いたのは本人らしく、字面が違っている。

省二郎は、何をどう語つていいのか窮した。理香の顔を見ると、うつすらと目が潤んでいる。

「白壁が詩集を読むなんて、思いもしなかったわ。まして、明子なんて、私どうしたらいいの・・・」

と、理香は言いながら弱々しく微笑み

「この一週間、泣きずめね」

と言つて、無理に目をパチパチさせた。

「理香さん、僕はもう新橋の方へ行くけど、今夜マンションへ行つても良いかい。僕も僕なりに彼の持ち物を探してみたいんだ。違う人が見れば、また何か別の事でも判るかも知れないしね」

「ええどうぞ。私の方からお願いするわ。今頼れるのは省二郎さんだけだから」

理香はそう言つて、目頭を軽く押さえた。

鮮やかなスカーレット色のマニユキアと、閃光を繰り返す大粒のイエローサファイアが自分を囚えて、何処か遠くへ駆り立てて行くか

のような、奇妙な錯覚を省二郎は感じた。
不吉な感覚だった。

省二郎は理香との約束を大幅に遅れて、彼女のマンションに着いた時には九時近かった。

理香は焦げ茶色のワンピースに、白いカーディガンを羽織って省二郎を出迎え、友達がいるから、と断った。

「友達？」

「怖いから、月曜日から来て頂いているの。高校の時からのお友達」
そう言つて、大柄な女性を省二郎に紹介した。

久松和枝、と名乗ったその女性は、ショートカットに切った髪を片手に添えて挨拶し

「お邪魔にならないように致しますから・・・」
と言つて、ダイニングキッチン椅子に座った。

マンションは八畳の和室、それに八畳と十二畳の洋間、その他に十畳と十二畳の居間とダイニングキッチンが繋がった部屋という間取りになっている。

八畳の洋間が、書斎と応接室を兼ねた部屋になっていて、省二郎も二・三度その部屋で白壁と話をした事がある。その部屋へ、省二郎は案内された。

「主人の物といつても、殆ど衣類ですかどー」

省二郎は頷きながら腰を下ろした。

理香が昼間、白壁商会に持って来ていた本二冊と一枚の写真が、テーブルの上に並べてある。

和枝がコーヒーをいれて持って来て、二人の前に置いてから

「煙草はお吸いになります？」

と、聞いた。

省二郎が煙草は吸わない、と伝えると、和枝は猫を抱いて出て行った。

それを確かめてから、省二郎は理香に

「ここまで来ると僕もなり振り構ってられないから、失礼な事を聞かなくちゃならない。・・・気を悪くしないで欲しい」

と事務的に告げて、手帳を取り出した。

その真新しい黒革の手帳には

1 白壁と理香との出会い

その時期と場所、その理由

十三日、あるいは十四日、十二日の白壁の行動

2 銀行などの預貯金、及び不動産などの資産関係

3 白壁が見ていた、最後のニュース番組の内容

4 昨年十二月初旬から中旬にかけて

新しく会った人物 行った場所 変わった言動

5 白壁の持ち物で

減った物 増えた物

6 運転免許証に関して

時々運転していたというが・・・

7 手紙、通信

古くてもいいから、何か無いのか

8 携帯とパソコン

メールの確認 履歴

9 旅行、出張

この一年、行った場所 同行した人

と、九項目にわたって記載されていた。

それが、今の段階で、省二郎が理香に訊き出せる全てであるといえた。

省二郎は理香に、各項目を丹念に尋ねた。時には問い糾すような具合になって、理香に恨みがましい視線を浴びたが、省二郎はきわめて事務的に対応した。

理香は、白壁との出会いについて

「三年と五ヶ月前だわ」と言った。

すなわち、平成十年九月、里香の勤務先であるロイヤルリバーヂという業務用化粧品メーカーの新宿支店に、白壁が取引以来のために来社し、知り合ったという。

一緒に住むようになったのは、翌年の六月だったと言う。

「私、のぼせちゃって」

と、里香は笑った。

「だって、あんな風でしょう。母性本能っていうのかな、放っておけなくって　式も挙げないでって、実家は大変だったのよ。父がアパートまで来て」

「アパート？」

「初めは常盤台の名東荘っていうアパートだったの。このマンションを買ったのは、私が押しかけてから一ヶ月ほどしてからね」

里香は驚いた、と言った。会社の立派さと住居の薄汚さの落差に

「私、驚いたわ。だけど」

「だけど、もっと驚いたという。」

「だって、一ヶ月もしないのに、こんな凄いマンション買ったちゃうんですものー」

省二郎はアパートの住所を手帳に控え、質問を重ねた。

「十三日の日も、その前の日も別段変わったことなど無かったと思うわ」

「彼の言動だけじゃなくて、里香さんの身の回りの事でも何でもいいから、変わった事はなかったかい？」

「ない、という。」

省二郎は資産関係に質問を変えた。

「私名義の貯金が千八百万円。それも白壁が、何か特別な出費の時使うようにって渡してくれた物だから、彼の物と言えはそうなんだけどね。私個人のものなんて、四百万円もないわ。後は会社のだけ

よ。だって、私、彼の通帳なんて知らないもの」

会社のお金というのは、省二郎が指示をして定期口座に入れ、会社の法人化に備えて預金担保で動かしている会社としてのお金のこと、口座には三千万円入金になっている。その名義は、白壁商会代表、安藤理香になっている。

それと、売掛け残が六千万円ほど。

他はこのマンションだけだという。

「現金で買ったの。五千万以上したのよ」

「理香さんの名義になっているね？」

「ええ、白壁がそうしようって言ったの・・・私その頃、白壁のこ
と余り知らなくて」

「だけど、知り合って一年ほどで八千万円を里香さんに呉れたと同じ事だもんね。何か、引つかかるんだ。税金なんかどう処理したの？」

「うーん。白壁がね、私を代表にするから、そのようにするんだって言ってたけど・・・税金だとか、余り私に聞かないでよ。省二郎さんがプロでしょう」

省二郎の質問は、次に移る。

「彼はNHKのニュースを見ていて、急に外へ出て行ったんだね？」

「そうだけど・・・」

正確ではないと言う。

「私、寝室で寝てたのよ。気が付いて起きたら七時近かったでしょう」

居間へ行くと白壁が彼女を見て、チャンネルを代えたのだと言う。

「それから、十分もしたら出て行ったのね。出て行った時にはニュースをやっていたから、そう言っているけど、本当に見ていたのは違うものじゃないのかな？」

そして思いついたように、理香は戸を開けて久松和枝に、十三日の新聞を持ってきて欲しいと頼んだ。

和枝が持つて来た新聞のテレビ欄の、六時から七時までの番組をじつと見ていた理香が

「これだと思うわ」

と言つて指をさすところには、教育番組で

二十歳の主張

となつていて、六時からの一時間番組である。

省二郎はそれを控えてから、今度は出て行つた時のニュース番組を聞いた。

「さあ、色いろやつてるものね。一番の話題は荒川区の住都公団から出てきたコンクリート詰め女性変死体の事件だけど・・・埼玉で二人組みの強盗事件があつたつて、そんな事も言つてたんじゃないかなあ」

それも省二郎は手帳に書き止める。

省二郎の質問は次に移る。

「去年の十二月、初めから中頃にかけて、彼は、金銭的な事で人に会つとか、何か気になるような事を言つたことがない？」

省二郎そう言いながら、渋谷の貸金庫にある五千万円のお金の事が脳裏を掠める。

「十二月？」

理香は長い間考え込んでいたが、やがて反対に

「十二月に何かあつた訳？」

と、問い返した。

「仕事に関する事でね、少し腑に落ちない事があるんだ」

「さあ」

理香は、全く心当たりがないと言う。

「次に」

と、省二郎は、白壁の持ち物について質問をした。

増えている物はないと思うが、減っている物は

「セーターね」

と言う。

「セーター？」

預かり物の黒いサマーセーターだという。

「白壁がね、去年の夏にお得意様から預かって来たのよ」

美容院が得意先になるため、時々植物とか動物とか不良在庫としか思えない帽子など、女性でないと理解しづらいようなおかしい物を預かる事があると言い、その時も黒い女物のセーターを預かって来て箱に入れてあったのだが、それが無いと言う。

「預かり物だから、気になっていたのよ。それも、家に持って来て引き出しの中に入れてあったから・・・」

最初に見たのが最後、つまり一回しか見ていないのだが、去年の十月だと言う。白壁の持ち物を調べていて気が付いたのだと言う。だから、返したのかも知れないが、とにかく判る範囲ではそれが無い事は確かだと言う。

省二郎は続けた。

「運転免許証を彼は持っていたでしょう？」

「持っていたわ。一度違反をして捕まったもの」

「だけ、中を見た事はないと言う。」

省二郎は手帳に理香の言う要点を書き込みながら、次に、と言った。

「次に、手紙なんかの郵便物はどうなっているの？」

「手紙でしょう。この間から色いろ探すけど、ないのよ。考

えたんだけど、私、彼宛の手紙なんて一度も見事ないわ」

そして首をすくめ

「私、白壁の事、何も知らないみたい」

「と言って舌をちよつと出した。」

「ダイレクトメールのような物は？」

「それはこちらから出すほうよ。白壁ったらそういう事が好きなのよね」

それは省二郎にも判る。業界紙などへの広告代も多すぎると、省二

郎自身が注意を促したくらいである。

「そりゃあ、来る物も多いわよ。会社にはたくさん来るわ。でもあれは私の名前だし、それに、ほとんど美容院関係の……」

とそこまで言って、不意に表情を変え

「あっ」

と、省二郎の顔を見た。

「そうだ。アパートにいた時、成田の分譲住宅のパンフレットがたくさんあった。何とか台……」

しばらく考えて

「えつとね。タツミガオカよ、巽ヶ丘。冗談でここを言うかって言つてたから……あれ、何だったんでしょ？」

省二郎は携帯の事を尋ねた。

「二台持ってたと思う」

それが理香の意見だった。

いつも使っている物とは別に、もう一台を鞆に入れていつも持っていたんじゃないかな、と言う。

「メールの確認をしているのを見た事があるから、間違いないと思うわ」

番号は知らないと言う。

そして、パソコンは家にはないと言った。

「事務所のは先日調べたでしょう？」

確かに調べた。白壁のパソコンはセキュリティが掛かっていないので、誰でもその気になれば見える状態だった。無防備というか、秘密のような事が何もないシンプルな、仕事関係だけの内容で、個人に関する情報は一切なかった。

「旅行とか出張とかは？」

「旅行？」

そう言って理香は、複雑な顔をした。

「どこにも行つた事がないの。もう、白壁つたら、新婚旅行はハワイに行こうって用意してたのに、急に止めちゃって・・・あれ以来、何処かへ連れてってよって言っても笑うだけでー」

「急に止めた？」

理香が言うには、一緒に住んだ当初は、結婚式なんかも話題になった事があると言い

「マンションだけ買つて、後は何だか終わっちゃたって感じ」

だと言う。

「いつ？」

「九十九年の七月よ」

省二郎は視点を変えて訊いてみた。

「彼が一人で行つた所は？」

「去年の夏、九州へ行つたわよ。省二郎さんも知っているでしょう？」

確かに、盆休みに郷里に帰つて来たとかで、お土産のお菓子をもらった記憶がある。

「お母さんからだと言って、お菓子を頂いたわ。あれは確か、大分の椎茸を使ったお菓子だったわね。・・・あの頃からよ、白壁がすごく無口になつて・・・」

「ああ、気味が悪いって言つてた事だね」

「ええ・・・でも、あのお菓子だって東京で売っているんでしょね」

理香は本当に淋しそうにしょげ返つて、額の髪を掻き揚げた。

省二郎は理香の語る要点を手帳に書き止めてから、白壁の持ち物を見せてもらった。

省二郎は、まずスーツのネームを調べてみた。

どれを見ても白壁、となつている中に、一着だけネームの無いのがあり、刺繍が剥がされた後がある。

浅井、とわずかに痕跡が読み取れる。

理香にそれを示すと

「お友達のじゃない。アパートも浅井さんっていうお友達のを借りていたもの」

会った事はないと言う。

他のセーターや類やスラックス等には、これといった物はない。

「下着も調べてみる？」

理香が首をすくめながら言った。

省二郎は次に書庫に納められている本を調べた。

本は雑多な種類で、これといって系統だって読んだという形跡は見当たらない。

小説は少なく、古典落語とかペンギンの生態とか、新書類が多そうの中に、美術全集だけが全巻揃っている。

「これ全部主人の、私のなんて三冊もないと思うわ。私、週刊誌しか読まないから」

「一緒になる前からのもあるんですね？」

「ええ、アパートにいた時は本が積んであったんだけど、二・三十冊じゃなかったかしら？・・・だけど、私本なんて読まないもの」

省二郎はそれから里香と和枝に、本の間の狭雑物を探してくれるよう頼み、自分は本の表紙。裏表紙、あるいはその裏といった具合に、何か書き込まれているようなものを探した。

何もなかった。

時計を見ると、十二時近い。

その後も探したが、やはり何も見つからなかった。

省二郎の思惑は外れた。

しばらくして三人でお茶を飲んで雑談をし、テーブルの上に置いてある例の、本二冊と写真を借りて行くと承をもらって、省二郎は自分のマンションに帰った。

マンションに帰り着くと、既に二十一日の午前一時を回っていた。省二郎は風呂の給湯器の蛇口を回し、タイマーをかけてから、スーツ姿のままセミダブルベッドに横になった。

眠れそうもないな

内ポケットから手帳を取り出し、眺めてみると色んな事が書き込まれている。

浅井、名東荘、セーター、成田の分譲地、高校生の主張、二人組みの強盗、コンクリート詰め変死体・・・

明子とは、白壁の妻の名か？

省二郎が物思い思いに耽っていると、タイマーが鳴った。

風呂で体を洗ってから、水割りを作り、ベッドの枕元に置いて少し飲んだ。そして、改めて例の、本二冊と写真を手にとった。

最初に「雲」副題「四国の山」という写真集を、1ページずつ見た。山岳写真集と名付けてもいいような、山を背景にした雲が、様々な時間帯を狙って撮ってある。

次に真新しい本である、詩集「あおぞら」を開いてみた。

巻頭を飾る詩は、青空を見ている、と言う書き出しで始まっていた。

青空

青空を見ている

あなたの悲しさが わたしには分かる

傷を負う という意味が

わたしと同じように あなたにも分かっていたように

けれど自分にさえ 許されることのないあなたは

闇に向かう以外

他に何が 残されていたのだろう

あれから五年の歳月が流れたのか・・・

ひざを抱えている

あなたの淋しさが　わたしには分かる

口を閉ざす　という意味が

わたしと同じように　あなたにも分かっていたように

なのに　伝えたいと願うわたしには

涙を流す以外

・・・

というような事が、書いてある。

省二郎は拾い読みをして、頭が痛くなるのを感じる。

省二郎は写真集は良いとしても、こういう感情を謳ったものが生来苦手である。

堀井の家系にしても、五年前に死んだ父親が化学会社の研究員、三鷹の兄が電力会社の原子力技師と、圧倒的に理系である。省二郎の愛読書と言えるものにしても、数学会がおおむね年四回発行している「数学」である。

本を閉じたかったが、そうもいかず、著者や発行元を探した。著者と思われるものは自筆で「ゆう子」としてあるだけで、後は何もない。どうも自費で愛蔵版を作った中の一冊らしかった。

署名に後に「2001年、5月」と書いてあるところを見ると、五年の歳月が流れた、とは1996年になるが

何があつたのだらう？

本を閉じ、水割りを一息で飲み干し、スナップ写真を手に取った。確かにそこには、笑顔でこちらを見ている白壁が写っている。

どこへ行ってしまったんだらう？

翌、日曜日は、自宅で仕事をした。

実際の打ち込みなんかは沢田博子が行ってくれるのだが、その点検と、全体の整合性やその会社社会の狙い、節税なのか借入れなのか、あるいは配当なのか、そういう点は省二郎でなければ判らない。そのさじ加減に神経をすり減らすのが、この仕事であった。

仕事をしながら、電話が気になって仕方がない。三つの電話番号のうち、活きている二つの電話番号に朝から電話をしているのだが、都内の電話も誰も出ない。残りの電話、これは理香の言うように鎌倉局番だったが、これにも何度電話をしても誰も出ないのである。今日、何の進展もなければ、明日には貸金庫の五千万円の事を里香に打ち明けて、善後策を取ろうと思っている。時刻は三時を回った。

窓の外にはビルとビルとの間を山手線が走り、デパートの中段にある大型画面から春の化粧品のコマーシャルが流れている。省二郎は机の上の電話を手にして万里子に連絡を入れた。

万里子は怒っていた。

「いやよ、私、今からじゃお友達も誘えないじゃない」

実は今日、夕方五時に赤坂の喫茶店で落ち合い、そのまま夕食を食べに行く事になっているのだ。

「申し訳ない。仕事なんだ」

「お仕事が忙しいのは判るわ。だけど、どうしても会いたいので・・・」

「

「明日じゃ駄目かい？」

「わたし」

と、万里子は言った。

「私、どうしても省二郎さんにお話があるの」

省二郎は、ああ、と思い出している。

二日前の夜中、マンションにいる時万里子から電話があつて「会いたい」

と言っ。

省二郎は確定申告と白壁商会の事で頭も身体も精一杯であつたため、省二郎の方から日曜日の夕方を指定したのだ。

「じゃあ、マンションの方でいいかい？食べるものはないけど・・・」

「

「いいわ、行く時、食事の用意を買つて行きましょうか？」

「ありがとう、助かるよ」

「じゃあ、何か買つて行きます。いつものように豆腐のお味噌汁とご飯のメニューでいい？」

「うん、じゃあ電話を切るよ」

受話器を置いてしばらく考え、もう一度受話器を取り上げ鎌倉へ電話を入れた。

これで駄目なら、いよいよ理香に五千万円のことを話し、警察に勤める友人に協力を求めなければならない。

呼び出し音が聞こえるが、今までと同様、相手は出ない。これが最後なんだが、と思うのだが、相手がいないのではどうしようもない切ろう、とすると、相手が受話器を取り上げる音がした。

「もしもし・・・もしもし・・・」

返事がない。

「もしもし、私、堀井と申しますが・・・」

省二郎はその時、不意に、背筋に冷たい凍てつくものを感じた。目に見えない相手は、ゆっくりとした、低い声で言った。

「・・・私は、西岡だが・・・」

地獄からの声だった。

第1章 見つめ合う二人

第1章 その1 西岡

井原警部は、自分の直属の部下である吉田刑事が好きになれなかつ

た。自分が指示した事と、微妙に違った形で捜査を進める。その微妙さが、鼻についてならない。

微妙さは、その生き方というか、人生への態度の差が表れたものであり、判りながらする行為というものだから、口で言って直るといふような性質のものではない。

それが、社会における犯罪という出来事に対する認識の差異となつて表面化し、具体的には被疑者への接し方、あるいは調書の取り方や表現方法となつて井原を不快にさせるのだった。

吉田刑事には社会的な視点が欠けていると、井原は思う。

確かに吉田刑事は本年とつて五十二歳と、自分より八歳年上であり、捜査畑も長く、ひとつの目標に向かつての執念は脱帽する場合もまある。

しかしそれは、あくまでひとつの目標が定められた場合であつて、それは結果として先入観に支配される事をも意味するのであると、井原は思っている。

今日は昨年十一月初旬に起きた、連続強盗強姦事件を先週金曜日に送検し、ここ二・三日事件らしい事件もないので早く帰ろうと思つている。

次女のまさみの大学受験も迫っており、たまには早く帰つて神経の尖っている妻の多加美の話し相手になつて、ゆっくりしようと思つている。

それが、三時頃から始めた書類などの整理が以外に手間取り、終わった時にはもう六時になつてしまつていた。

井原は窓の外に広がる雑踏を、放心したように眺めた。

大都會の夜の光彩の中を、車のライトが点滅し、ガードの上を列車が走っている。歩道を行き交う無量の人々。彼方に見える首都高速の橋脚が、そのシルエットを浮かび上がらせて、沈々としている。

ポケットからマイルドセブンを一本取り出して口に咥え、百円ライ

ターで火を点ける仕草をした。ここで吸うわけにはいかない。六年前に庁舎が新築されてから、世間の禁煙ブームに押される形で庁内に喫煙所が設けられ、そこ以外では吸ってはいけない事になった。口に咥えるだけで満足し、一日が終わった充足感が身体に広がる。井原が帰ろうとして、煙草とライターを引き出しにしまい込んだ時、右奥のドアがギツと開き、ダークグレーのスーツに身を包んだ一人の男が入って来た。

男は辺りを見回し、カウンターからは遠かったが、一番暇そうにしている様子の井原に向かって頭を下げた。

井原は男と目が合った事を後悔したが、諦めて、男に対応するためカウンターに向かった。警部と言う立場なので、窓口対応などはほとんどした事がないが、回りを見ても自分しかないようであったし、他の刑事が面白そうに見ている事も、少し影響した。

男は目つきが暗いというか、井原のような職業人から見れば何をしでかすか判らないような曖昧さを湛えており、声が低かった。顎にかなり目立つ形で深そうな切り傷がある。

「殺人はこちらで扱っていると聞きしましたが・・・」

と、男は立ったまま言った。

「そうです。しかしその前に、そちらの椅子にお座り下さい」

井原はそう言っただけでカウンターに続く相談者窓口用のカウンターを指でさし、自分もそちらへ移動した。

「殺人という事です、その前にあなたの名前と住所をお願いします」

井原は、殺人と聞いて身構えたが、何気なさを装い、きわめて事務的な口調で尋ねた。その方が相手が喋る、という事を知っているのだ。

男は、住所を岩手県宮古市佐原×××と言い、名は

「西岡為三と言います」

と言った。

「その宮古の方が、わざわざ東京まで出て来たというわけですか？」
西岡はテーブルの上に名刺を置いて

「宮古というのは住民票が置いてある、という意味で、今は実際には住んでいません。仕事を東京の方でやっている関係で、鎌倉に住んでいます」

と、一語一語ゆっくりと言った。

井原は淡々と西岡の言うことをメモリながら、手元に置かれた名刺を手に取った。

名刺には

株式会社 ニシオカ 代表取締役 西岡為三

となっており、会社の住所は、東京都千代田区内神田三××× レッドストーンビル三一六号室となっている。

西岡は、友人の会社社長、白壁貢が同社の経理を一手にしている堀井省二郎に殺されたと思われる、と語った。

「どうしてそう思われる訳ですか？」

「私と西岡君とは・・・」

と、西岡はそれが癖なのか、ゆっくりと、まるで相手を説得するかのように話す。

西岡が言うには、二人は七年前まで関西の方で一緒に仕事をしていたのだが、その後お互い東京に出て来て、あまり会う事もなく、別々に会社を立ち上げて現在に至っている、という事だった。

「しかし去年の十二月初め、久しぶりに彼から連絡があり五千万円を借りたいと言うのです」

「五千万円とは大金ですねー」

「ええ、その理由と言うのが、経理を預けてある堀井省二郎という男が、新たにオルフェという会社とに間で特約店契約を結びたがっている、というものでした」

オルフェとは、という井原に質問に西岡は白壁商会とオルフェとの仕事関係を話してから

「私は反対しました。営業の事が判るはずもない経理畑の人間の言

うがままにしている白壁君に、強く注意をしたんです。しかし、たつての彼の頼みでしたので、現金で五千万円を彼に都合したのです」

「……」

「その彼が、この十三日の夜から消えてしまったんです」

「十三日の夜というと、連休の頭の日だなあ、土曜日だ」

「そうなんです。そして内妻の理香さんが言うには、七時を少し過ぎていたらいいんですがそれっ切り消息がないんです」

「事故という事はないんでしょうか？」

「理香さんはその点も充分確かめたそうです。刑事さん、私は独自に堀井の回りを調べたのですが、例のオルフェとの契約もまだなされていません。そればかりじゃありません、私は本当に驚いているのですが、里香さんは五千万円の事など知らないと言うのです。そんなお金はどこにもないと言うのですよ」

「と、いう事は、その堀井省二郎なる人物が五千万円を横領したと・
・」

「決まっています。そうとしか考えられないではないですか」

「と言って、西岡は井原の顔をじつと見た。そして」

「堀井は五千万円を横領したばかりか、白壁君を殺害し、その後は白壁商会を乗っ取ろうと画策しているのです」

「……」

「いいですか、会計事務所といえば今が一年で一番忙しい時だといえます。それが、堀井は本来の自分の仕事もせず、毎日白壁商会へ顔を出しています。それが何を意味するか、判りますか？」

「……」

「理香さんや会社の動きを監視しているに決まっています。そうは思いませんか？」

「まあ、しかし、殺されたとは穏やかではありませんが、何か確かな証拠でもあるんですか？」

「それはありません」

と、西岡は断定的に言い

「しかし、私が間違っているとは思えません」

だから明日にでも堀井と会って確かめる、と言う。

「会つのはご自由です。しかし、どう言っていていいか・・・要するに、このような場合、西岡さんが確信を持てば持つほど会わない方がいいと言えます。私としては色んな関係者の方から詳しい話を聞いて、その上で最終的に堀井さんという方からお話を聞く、という形で進めたいわけですがね」

西岡為三は、それでも自分は堀井を許せない気持ちでいっぱいである、と言い、捜査の邪魔になるような事はせず、何食わぬ顔で明日は堀井に会う、と言う。

井原が、早速警察としても内定に入るが、その前に白壁貢の内妻、安藤理香に会いたいというと

「今日、一緒に来たかったです、彼女の都合がつかったのです。ですから、彼女と連絡が付き次第どうするか決めて、こちらに連絡をする事にします」

西岡はそう言つて、井原の名前と連絡先を聞いた。井原は西岡の携帯番号を控え、代わりに自分の名刺の裏に直通電話の番号を書いて渡し、混乱するので当分の間は自分だけを窓口にするようにと言つた。

そうして、西岡は帰つて行つた。

井原はスッキリしなかった。

普通、知人が殺されたというだけでも、何を差し置いてもその為に飛び回る。それが、安藤理香は妻ではなく内縁関係だとはいうものの、所用があつて来られないという。

井原は妙に疲れていた。

西岡為三という、瞳を動かすことなく、低い声で一言一言語る人物に、見かけと同じ油断のならないものを感じて身構えていたせいかも知れなかった。

時計を見ると七時を回っている。今日も家に着くのは八時過ぎになりそうだった。

さて、井原に会った後、渋谷署を出た男の動きを追ってみよう。

男は署を出るとそのまま携帯を耳に当て、誰かとなにやら話しながらJR渋谷駅の構内を通り抜け、道玄坂に出て左に曲がりコインパーキングに入った。そして携帯を切り、そこに駐車してある一台の車に近寄り、助手席に乗り込む。

隣の運転席には一人の男がいて、眼鏡が光っていた。そうして二人で何かを長い間話し込んでいた。一時間ほどすると、その男はまた車を出て駐車場の陰へ行き携帯を取り出した。どこかへ電話している。やがて相手が出たのか、男はもしもと言った。

「もしもし、安藤理香さんのお宅でしょうか？」

男は、確かにそう言った。

第1章 その2 英二

井原が西新井の駅を降りて、自宅に向かっている頃のことである。

夜八時過ぎに夕食をしていると、静かに電話は鳴った。

後々、佐橋刑事にそのときの状況を聞かれる度、理香は

「電話は、静かに鳴りました」

と、その印象を語っているが、見方によってはそれほど理香の心に沁みこんで麻痺させてしまうような電話の内容であったといえる。

電話の第一声は

「安藤さんのお宅でしょうか？」

と言う、低い声で始まった。

用件を問う理香に

「私は白壁君の友人で、西岡といいます。ご主人の事で至急、今からお会いしたい」

と、その西岡と名乗る男は言い、渋る理香に白壁失踪とそれ以後の展開を考える時、誘導線になったとは思えない内容を、ひとつひ

とつ話したのだ。

理香の不安とは、それを信じて良いのかどうか、という不安ではない。その不安はすぐ無くなった。そうではなく、内容が理香の意表を衝き、今まで当然と思っていた事を根底から覆す内容なのである。西岡は明日、渋谷署の井原警部を二人で訪ねましよう、と言う。そして、それまではあなたを監視している堀井に絶対連絡を取ってはいけません、と言ひ

「私が言っているものではありません。警部の言伝です。ですから明日、警部と一緒に来るように言っているんです」
と言うのである。

まさか？

沈黙を守る理香に、その男は言う。

「白壁君の実家への連絡は終わっていますか？」

「えっ」

と理香が小声で驚きの声を上げると、その動揺を見透かしたように続けた。

「もしまだなら、住所と電話番号を教えてください、あなたから今すぐ連絡をして下さい」

そして、白壁の実家だという住所と電話番号を言い

「二十分もしたらまた電話をしますから、それまでに九州の方へは連絡をしておいて下さい。今からそちらへ向かいますが、あなたに知ってもらわなければならない事がまだ沢山あるんですよ」

理香の驚きはその辺りから始まった。まさかこんな形で、どう探しても手掛かりすら掴めなかった白壁の身元が判ると思ひもしなかった。

嘘かも知れない

理香と和枝は五分ほどためらった挙句、恐る恐る言われた電話番号のボタンを押した。すると

「はい、白壁でございます」

と、若い女の声で言うではないか。理香はどぎまぎしながら言った。

「・・・あのう、貢さんはそちらにおいででしょうか？・・・あつ私、東京の安藤と申しますが・・・」

すると、相手が変わって

「はあ、何ですかいのう？」

と、年老いた女性の声に代わった。理香が同じように、東京の安藤だと言うと

「あたしや貢の母じゃがのう、貢に何かありましたかいのう？」

と言う。

「・・・いいえ、貢さんがそちらに行っていないかと思ひまして・・・」

「貢が？・・・さあなあ、英二がな今組合にいつちゆうで、あたしや詳しゆう判らん。嫁にでも聞いてみようで・・・」

話をしていると、英二というのは貢の弟らしく、電話の向こうで時々子供を叱っているのが先ほど電話に出た「嫁」という事になるらしかつた。

「貢んやつなあ、去年帰ってきよつてなあ、それっ切り便りのなかよ」

理香は話をしながら自分の精神が均衡を崩し、ぼろぼろと欠けていくような感触を味わっていた。西岡から電話があつて、まだ十分も経っていないのだ。

母親は英二が帰ってきたら電話をさせると言つて、電話番号を理香に聞き

「じゃあ、おやすみ」

と言つて電話を切ろうとした。

理香は自分でも驚くような素早さで

「お母さん」

と、呼び止めた。

「あの、ありがとうございました。去年、お土産いただいたー」

「ああ、なんか土産がほしか言うけん組合でこつて来たんよ」

理香の動揺は頂点に達していた。

電話を切ってから和枝と相談をしたが、余りに急な事で思案がまとまらない。省二郎さんに電話をした方が良いのか、先ほどの男を待った方が良いのか

どうしよう？

そうこうする内に、又、電話が鳴った。

西岡さんだ！

呼び出し音が肺腑をえぐる

決断しなきゃ

と思っていると、和枝が電話のディスプレイを見て、大分だわと言った。そしてそのまま電話に出て、理香に

「英二さんだつて」

と言った。

ほつとしながら受話器を受け取ると

「あんたが理香さんね」

と、英二の第一声が耳に入った。

「兄貴がえろう世話になっているち、言いよつたが、あんたね？」

英二はぶっきらぼうで飾り気が無く、遠慮の無い話し方をした。

「兄貴があんたさんと結婚するつち言いよつたが、どないなつたんかいの？　そんなときや東京見物じやと飾ったこと言いよつたが」

理香はどうして良いのか、頭の中が全くの空白状態になってしまった。しかし、詰まりながら、思い切つて聞いてみた。というか、呟いた。

「・・・でも、明子さんが・・・」

「おう、おう、明子しゃんなあ。あん娘もどげなつたとやる？

しかあ、もう籍やら入つたらんやろ？　逃げてから六年にも七年にもなるしのう」

話の一つひとつが、理香にとっては今までの謎を解いていくように思えた。何だそんな事だったのか、と思える気がした。新たな謎がどんどん増えているとは、思いもしなかった。

結局、十時過ぎには、理香は応接室で西岡と対面していた。

西岡の語る話の内容は、理香を、驚きから恐れへと変えていくものだった。

西岡はゆつくりと語った。

「堀井は白壁君を殺したんです」

嘘だわ

「今のまま行けば、今度はあなたの番でしょう」

まさか

「堀井君は五千万円を着服している」

間違いだわ

「明後日には二千万万円の保証金が必要ことを、あなたは知っていますか？」

知っているわよ

「その手当てはどうなっています？」

知らないわ

「明日、とにかく井原警部に会って、事情を話しましょう」

それは良いけど

「それまでは堀井に会っても、何食わぬ顔でいて下さい。証拠を隠すかも知れないし、一人殺しているとなると、何をするか判りませんからね」

そんな事、出来るかしら？

理香はどうして良いか判らず、呟いた。

「・・・でも、省二郎さんはそんな人じゃあないと思う・・・」

弱々しい理香の反論に、瞳を見詰めて西岡は、あなた、と言う。

「あなた、命が惜しくないの？」

「・・・」

「殺されるかも知れないのよ」

「・・・」

標的にされている省二郎の知らないところで、照準は確実に絞られ

つつあった。

第1章 その3 スポイド

堀井省二郎は、今年になってからプライベートことばかりで悩んでいる自分の事を思うと、何だか厭になつてしまつていた。

白壁の失踪の件が片付きかけたと思ったら、今度は万里子が妊娠したというのだ。

一昨日の日曜の夜、万里子の手料理でご飯に味噌汁、それにハンバーグというメニューで食事をしている時

「わたし、子供が出来たようなのー」

と言つて、省二郎を驚かせたのだ。

その事で万里子は幾度も自分に会いたがつていたのか、と納得したが、納得で済む問題ではなかった。

しかし、翌日の朝には省二郎は決心していた。

確定申告が終わつた後の、三月には式を挙げよう

それまでの二ヶ月間に、自分の母に万里子を紹介したり、万里子の両親に承諾をもらつたりしなければならぬ。面倒で億劫だが、万里子のためにも、生まれてくる子供のためにもしなければならぬ。とにかく今日、火曜日の夜には白壁とも連絡が付くというし、何だかこの頃の理由の判らない、気塞がりな状態ももう終わるだろう。

そう思つて、昨日夜、日付さえ入れなければ午前中にオーダーすると夕方には出来上がるという、松坂屋のテナントの宝飾店で、婚約指輪を万里子のために買った。三十二万円の余り大きいダイヤが散りばめられたブルーサファイアだ。

時計を見ると五時半だつた。

アシスタントの沢田博子が、顧客別に確定申告の用紙を確認しながら、有本会計事務所と書かれたグレーの封筒に入れている。

ここしばらく彼女の機嫌が悪いのは、仕事に追われて帰宅が遅くなっているのが理由ではなく、省二郎自身に責任がある。

所長から許可をもらっているからといって、この時期、一週間も午後にならないと出社しない省二郎を不快に思っているからなのだ。そればかりではない。省二郎には珍しく、指示する事が的を得ず、重複したりする事が多いのである。

実は今日も、渋谷セルリアンタワーで、先日の電話の相手である西岡という人物に会うため、もう事務所を出ないと間に合わないのだった。

先日、西岡に今の状態を色いろと話した。初めて白壁を知っている人間に出会って、ほっとした事もあって、問われるままに色いろな事を話した。その後も西岡は不明な点があると、時々電話をして来ては省二郎から色んな事を聞きだした。

西岡は白壁と思ったよりも親しいらしく、五千万円を省二郎が持っている事まで知っていて、それは自分が貸したものだと言った。

そして今日がその待ち合わせの日なのだ。

省二郎は沢田博子の機嫌が悪い事に気が付かない振りをして、所用があるからと断り、目印である有本会計事務所の大型封筒を片手に昨年完成したばかりのセルリアンタワーの東急ホテルロビーに向かった。

ホテルに着いたのは、約束の六時半より少し早かった。

ロビーで座る所を探していると、黒っぽいコートを小脇に抱えた男が人ごみの中から省二郎を見定め、ゆっくりと立ち上がった。

喫茶フロアーに座ると、男はカフェオーレを注文し

「私が西岡です」

と言って、省二郎と名刺を交換した。

省二郎は西岡と名乗る男が電話で想像していたのとは違い、どこにでもいるような中年の男なのに驚いた。実は声からして、暴力団の関係者かも知れないと思って少しは警戒していたのだが、目の前に座った男は二流銀行の支店長というのが一番ぴったりのイメージを

持った男なのだ。

ただ広い胸幅と、顎に大きな傷がある事が印象的だった。

省二郎は尋ねた。

「早速ですが、白壁さんは奥さんと一緒にいるという事ですが？」

「そうです。明子さんと一緒に九州にいます」

「九州・・・？」

「ええ、彼の実家が大部分の日田近くの山村なのですが、そちらで明子さんと別れるとか別れないとか、複雑な話をしているようですよ。私たち第三者にはなかなか内容が判らない。だからこうして心配しているわけです」

「しかし、今日で十一日目です。何らかの連絡があっても良いと思うのですが・・・」

濃紺の制服を着たウエイトレスが、省二郎の前にコーヒーを置き、西岡の前にカフェオーレを置いて立ち去った。

省二郎は続ける。

「仕事の事でも明後日大きな契約があつて、私としてはずいぶん困っています」

「聞いています。オルフェとかの契約でしょう。白壁君は有本さんに任せるから、どんどん進めてくれと言っておりましたよ」

「・・・西岡さんを責める訳ではありませんが・・・しかし、私になり直接連絡くらいしてくれても・・・」

西岡は省二郎の言葉を聞くと、口に運んでいたカフェオーレを一口飲んでテーブルに戻し、言った。

「白壁君はこちらで安藤理香さんと住んでおられる。そうですね」

「ええ、そうです」

省二郎はそう言いながら、借りた本と写真を返した時の、今朝の理香のよそよそしい態度を思い出した。和枝も一緒にいたのに、何だか、省二郎から逃げようとする気配だったが・・・

「聞くところによると、今度は会社を法人化するとかー」

「まあ・・・」

「結局、白壁君は明子さんとの事を清算して、理香さんと正式な夫婦になりたかった。それには今回のように会社の法人化といったような、何らかのきっかけが欲しかったのではないのでしょうか？」
そう言つてカフェオーレを飲んでから、また続けた。

「良いきつかけだと思つて白壁君は実家に帰つたのですが、別れ話がつれてしまった、という訳です」

西岡は顔を綻ばせた。

「すると、今日、白壁さんはここへは来ないのですね？」

「先日も言つたように、今夜彼と連絡が付くだけです。ですから、その時にはあなたも早く帰るよう、強く言つてやつて下さい」
しかし、と省二郎は思う。

この違和感はどうした事だろう

「西岡さん」

省二郎は意を決したように、ストレートに言つた。

「西岡さん、例えそれが理由であつたとしても、何故、理香さんにも私にも、一本の電話も入らないのでしょうか？ 言いづらいなら、メールをくれても良いはずだ。くだいようですが、今日で十一日目です。私は白壁さんの身に、何か不測の事態が起きたように思えるんです」

それを聞くと、西岡はさも不思議そうな顔をして言う。

「男と女の問題は、切羽詰つたら常識の世界で考えてはいけません。堀井さんにも、ましてや理香さんにさえ彼は明子さんの事を内密にしていた訳でしょう。」

それは、その問題が、彼にとってはそれだけ複雑で、抜き差しならない問題であるわけです」

「・・・」

「白壁君は電話一つ掛けられないほど悩んでいるのです」

しかし、と省二郎の理性は思う。いかなる理由であれ、十一日間の不在は異常である――

「とにかく、九時半にならないと連絡が取れません。あと二時間ほ

どあります。ま、それまで、その辺りで食事でもしていきましょう」
そう言つて西岡が、癖なのかあらぬ所に投げていた視線を省二郎に
戻し、上目遣いに覗き見た時、省二郎は不意に

この男をどこかで見た事がある

そう思った。

セルリアンタワーは予約客でいっぱいの為、タワーを出て、近くの
天麩羅屋「おか」の大きな暖簾をくぐった時は、七時半だった。

客が立て込んでいた為、二人はカウンターの一番奥、つまりこの店
の大将の前に座りビールを飲んだ。

注文した天麩羅の盛り合わせが来ると、西岡は

「酒にしますか」

と省二郎に言い、返事も待たずに

「熱燗、二本」

と、珍しく大きな声で言った。

西岡はいける口らしく、コップでグイグイッと飲み、省二郎にも
勧めた。

省二郎も同じようなペースで飲んだ。

飲み始めたら二升飲んでもなお余りある省二郎とすれば、苦手なお
猪口でなくて助かったくらいである。

酒豪といえる省二郎は、半年ほど前も三鷹で親族の集まりがあつた
時、二時間もしない間に一升瓶を空にしてしまい、理香を驚かせた
事がある。

西岡も平然として飲んでいる。

お互い差し障りのない話を交わして飲んでいると、九時近くなつて
客が少なくなり始めたのか、目の前の親父が

「お客さん、テレビかけても良いかね？」

と聞いた。

「テレビ？」

そんなもの、どこにもない。

すると親父がカウンターの下から、年代物のポータブルテレビを取り出し、カウンターの横に置いて、へへっと苦笑いをした。

テレビが省二郎たちの斜め前にあることになる。

スイッチを入れると、九時直前のニュースが流れた。

今日の朝から繰り返し話題になっている、雪印の牛肉偽装事件を伝えていたが、親父の興味はその後すぐに始まった「黄河特集」にあった。

「いやね、うちの奴が中国へ行ってから、俺まで興味持ちちゃてさ」親父が言うには、自分の妻が五年前に中国へ行ってから、その方面で活動し始め、今では自分まで活動に参加しているので今日のテレビを見るのが勉強なのだと言う。

省二郎はちよつと興味を持った。万里子が

「わたし、新婚旅行はシルクロードに行きたかったな」

と、一昨日の夕食の時、言っていたからだ。

妊娠したため、もう行けなくなってしまった新婚旅行を、万里子に代わって見ても良いと思った。

親父と省二郎が、水量が少ない黄河を映しているテレビを見て話をしていると、西岡が

「殺伐とした風景だ」

と、唐突に言った。

親父が、それは緑が少ないせいであり、自分が活動しているのは、実はその為の植樹運動なんだと自慢そうに言った。

そうすると西岡は、ああそうか、といった風に頷き

「砂漠や土漠の緑化技術は、日本が一番進んでいるからね」

と、独り言のようにして言った。

あと十分もしたら九時半である。

省二郎は時間を確かめ、トイレに立った。

省二郎がトイレに消えると、西岡は上着の内ポケットに手を入れ、鱧皮の印鑑ケースを取り出して膝の上に置いた。

ぱちり、と開けると、中には印鑑ではなくスポイドが入っており、

紫に濁った液体が詰まっていた。

第1章 その4 スコップ

省二郎は自分がどこにいるのか、判らなかった。

何時なんだろうと、習慣的に思った。夢うつつの状態は、しかし長くは続かなかった。

車の中でシートを倒し、寝ている自分に気づいて愕然とした。

アイドリングをしている車はヒーターが利きすぎて、鼻の奥から頭の芯までかさかさで痛かった。

「・・・?!」

車から外へ飛び出し、回りを見ると松林の中である。朝陽が松林を通して、切れ切れに射し込んでいる。

何処なんだ？ どうしたんだ？・・・

背後にゴルフ練習場のネットが大きく見える。

時計を見ると、九時少し前である。

携帯を入れているいつものセカンドバッグが無い。

省二郎は横の車を見て自分のソアラである事を確かめてから車に乗り込み、十五メートルほど離れている道路に出て、右にハンドルを取り、一気に進んだ。

一方通行に道を反対に走っている。

ゴルフ練習場の事務所の前にケーキ屋があり、公衆電話がある。店はまだ開いていないが、店頭をエプロンをした女性が箒で掃いていた。その女性に

「ここは何処です？」

と尋ねると

「仙川だけど、つつじヶ丘に近い・・・あなた目が真っ赤よ」

と、省二郎の身体を心配した言い方をした。

「・・・仙川？」

省二郎は府中へ行く時に通る、甲州街道の右に広がっているゴルフ練習場の鮮やかなグリーンのネットを思い出し、自分の現在地を確認した。

とにかく会社へ電話を入れようとして、財布を探したが、無い。セカンドバッグも仕事の鞆も、何もない。ただ助手席に、部屋の鍵が転がっている。

「・・・？」

省二郎は渋谷のマンションへ猛スピードで車を走らせた。走らせながら色いろ考える。

玉川通りは相変わらず混んでいる。

何故あんなに酔ったんだ？ しかも、朝起きたら仙川の車の中。くるま？

昨日は車をマンションに置いて来たはずだ。それが、何故？・・・何故？

という事は、昨夜あれからマンションに戻ってソアラを持ち出した、という事になるが・・・馬鹿な！

省二郎は、あの一見ボンヤリと、遠くを見ているような西岡の顔を思い出していた。

あの男に、何かされたんだ

その点は確かだと思ったが、何をされたのか、それは判らなかった。マンションに着いて、駐車場に車を放り込んで部屋へ駆け戻った。凍えるような冷たいシャワーを浴び、鏡で自分の顔を見てみた。

顔は猜疑心と不安で激しく歪み、なるほど、女性が言っていたように目が真っ赤に充血している。

昨夜、西岡と天麩羅屋で飲んでいて、九時半になった時、西岡が「白壁君からもう電話が入るでしょう。どこか静かな所へ行きましょうか？」

と言った。

その頃からだった。急に酔いの自覚が省二郎を襲ってきて、抵抗する気力がなくなり、言うがままにタクシーに乗ったところで記憶が

途切れる。

気が付いたらこの有様だ。

あれはタクシーだったのか？

省二郎はそれでも会社で電話を入れ、午前中は事務所へ行けない事を告げ、冷やかな沢田博子の声を耳に残して電話を切った。

電話を切りながら室内に視線を走らせ、自分の財布と携帯がベッドの上に転がっている事を確かめた。

省二郎は、自分の置かれている状況の全貌が判らなかった。

しかし、省二郎の鋭い頭脳は自分の回りで何かが起こり始めている事を告げ、しかもそれは緊急を要すると告げていた。

財布を手に取ると、中身が何もない。カード類もなければ、昨夜の西岡の名刺もない。

携帯はごく普通だ。着信履歴を見ると、昨夜遅く万里子から一回、そして今日会社から二回。メールは万里子から連絡が欲しいというのが一回、沢田博子から出社するのと言う問い合わせが一回。

省二郎は服を着替えてから旅行用のバッグを取り出し、着替えを放り込み、通帳と印鑑を持ち、パスポートをねじ込み、貸金庫の鍵をサイドポケットに押し込み、携帯を握り締めてソアラに戻った。

車を発進させながら、携帯で理香に連絡をしようとしたが理香の携帯が繋がらない。白壁商会に電話を入れて理香を呼んでもらおうとしたが、出社していないと言う。自宅も、誰も出ない。

至急連絡を、とメールを流す。

その間も理香のマンションに向かって車を走らす。二十分で着く。しかし一階のフロント部分からはセキュリティが掛かっていて、入れない。郵便などの受付を見ると昨日の夕刊と今日の朝刊が突っ込んだままになっている。

昨日の昼間からどこかへ行った？

省二郎の頭はフル回転している。

理香が危ない

理由も何も無い。動物だけが持つ危険察知能力のようなものが、省二郎の神経をびりびり刺激するのだ。

・ 和枝とは高校の同級生だと言った。白亜常葉女学園だった・

そのころ、当の理香は西岡と一緒に井原警部の前に座っているのだが、省二郎は知らない。

白壁商会に行くと、昨日の昼過ぎから理香は具合が悪くなって今日も休みだという。二〇分ほどいて、理香から連絡があったら自分に必ず電話を入れるよう命令した。次にはガソリンを入れる為にスタンドに戻りながら、学生時代の友人である黒田に電話を入れる。黒田は今、新潟県警に勤めている。一応キャリアと呼ばれる立場で、先日の新年会するとき警部だか警部補だとか言っていたようだ。

その黒田は

「お前か、久しぶりだな」

と言った後、省二郎からざっとした話を聞き

「警察へ行け」

と言って、しかし、と付け加えた。

「お前一人が行っても埒はあかんな。意味が無いとは言わんが、何だ、その理香さんかい、その人と一緒に行って事情を話せば内定が始まるが・・・しかし、それも余り期待出来ないなあ」

「期待出来ないって、人一人がいなくなっちゃったんだぜ」

「一日何人の人間が消えていると思っっているんだ。行方不明の人間のために警察は動かんよ」

「・・・」

「それよりお前、話の筋からするとお前がやばいぞ」

スタンドに着いたので電話を切った。そして、気が付いた。そういえば財布が空だ。カードも何もかも無い。

コーターンして銀行に向かう。

今度は、やはりアイスホッケー時代の仲間の柴垣に電話を入れるため、柴垣が勤める菱洋証券に電話を入れた。

「何だ、省助か。お前の株は上がっているだろう。忙しいんだ、後にしろ。・・・」

何、なんだって・・・」

柴垣は省二郎の言うことをちよつと聞いただけで

「判った。泊まりに来い」

と言い、省二郎が遅くなるかも知れない事を伝えたと

「何時でもかまわん。寝てたら叩き起こしてくれ。女房？　気にするな」

と言ってから、自分の携帯番号を言い、今度からはこの番号に連絡するよう言った。

銀行に着き、通帳を全て解約した。四百六十万円ほどある。そして貸金庫から、五千万万円が詰まったアタツシユケーヌを持ち出した。銀行から出てガソリンスタンドに向かいながら、万里子に連絡を入れる。

万里子は今日も怒っていた。

「またなの、この間もそうだったでしょう。近頃の省二郎さんて、おかしいわ。いつもその日になってからキャンセルなんだもの」
そう言ってから、小さな声で

「あやこ」

と言った。

「あやこ・・・？」

「糸偏の綾に、子供の子」

「なんだいそれ・・・」

と、途中まで言いかけてから

「ああ、綾子か・・・いい名前だ」

と、急いで付け加えた。

そういえば万里子は先日食事をしたとき、今度会う時まで私たちの子供の名前を考えるのと言っていたのだが、そんなこと省二郎

はすっかり忘れていた。

「土曜日には絶対よ。二カ月後には式を挙げなければならないんだから」

「ああ、お袋に行くって言うてあるからさ、じゃあ」

スタンドに着き、給油を始める。

洗車をするよう頼み、スタンドの脇で電話を続ける。

省二郎は有本会計事務所に電話を入れた。電話に出た沢田博子に有本叔父に代わるよう言う。

「お前、どうしたんだ。近頃のお前は、いつものお前らしくない」

精一叔父の一声は、叱責であつた。省二郎は素直に詫びた。

「自俣をお許し下さい。どうしても解決しなければならぬ問題が発生しました。一週間で片付けます。その間。休暇の許可が頂きたく」

「・・・」

精一叔父は長いあいだ沈黙したあと、言った。

「男は仕事が一番だ。しかし、それを超えたものが存在するという事を、私が知らぬわけではない。休暇は許可しよう」

「ありがとうございます」

「省二郎、何があつても信念だけは貫けよ。最後の勝負は、たいがいその一点で決まるものなのだ」

省二郎は感謝した。

省二郎が車に戻ると、洗車が終わって車内を掃除しているスタンド員が

「これどうします」

と言うて、後部座席の足元から寿司の「折り」を差し出した。

「・・・？」

手に取って見ると、「すし鉄」と書かれた包装紙に包まれている。販売した日付が貼ってあり、一月二十三日になっている。昨日だ。捨てた方が良くように思い、捨てた。

まだ何かあるのだろうかと思い、後部座席を見ると傘が置いてある。この傘はこの間の雨の日、コンビニに行く時に使ったものだ。いつも置いてあるのは後ろのトランクなので、元に戻すため後ろのトランクを開けた。トランクを半分ほど開けて、手が止まる。省二郎はそこにあるものをじっと見た。泥の付いた、スコップが転がっていた。

第1章 その5 環八

理香は不安だった。

一昨日の夜の西岡の出現以来、波状的に不安感が理香を襲い、理香はノイローゼ寸前と言う状態だった。あの後も何度か大分に電話を入れ、自分の知っている白壁が本当の白壁である事を確信した。西岡に、嘘は無かった。

「省二郎さんて、本当はどういう人なのだろう？」

一部始終を見ていた和枝は、

「理香、あなた危ないわよ」

と言い、護衛の心算なのか翌日には自分の勤め先を休んで、理香と一緒に会社まで来た。その直後に姿を現した省二郎を見たたん、理香は怯えが体中を駆け巡り、硬直してしまい早々に早引けをし、荷物をまとめて荻窪にある和枝のマンションに身を潜めた。

そして一日経った今日、昼すぎに電話をすると

「堀井専務が探しています」

と言うのだ。それも、ずいぶん

「しつっこくて」

と言うのだ。

理香は気絶しそうになる。

和枝に抱きかかえられるようにして、西岡との約束の時間に渋谷署

へ行き、西岡と並んで井原の前に座った時には

「助けて下さい」

と、理香は言っていたのだ。

和枝のマンションは一LDKの小さなマンションだが、ここなら絶対安全だと和枝が言い、西岡もそれが良いと賛成したため、理香はとにかくここに身を潜ませる事にした。井原警部も

「さあ、何とも言えませんが、気を付けるに越した事はないでしょうな」

と言っていた。

それでも理香は不安と恐ろしさで胸が、キュンと締め付けられる気がするのだ。しかし、慌ただしさと空恐ろしいようなこの二日間も過ぎようとしている夜九時過ぎ、和枝が夕食の後片付けをし理香が風呂に入っている時だった。

玄関のチャイムが鳴った。

和枝のマンションは一昔前のタイプで、インターホンが無いくらいセキュリティーがしっかりしていない。

和枝がドアを開けて誰かと話をしているようだったが、そのうち風呂の扉をノックして、顔だけ中へ入れ

「ねえ理香、刑事さんが来たけどどうしよう？後から来てもらう？」
と言った。

「刑事さん？」

「ええ、井原さんから行くように言われたんですって」

「ちよつと待ってもらって。私、すぐ出るから」

理香は手早く身体を拭き、少し考えてから和枝にガウンを持って来てもらい、パジャマの上からすっぽり羽織った。

居間に行くとも男が一人いて、理香を見ると頭を下げ、夜遅い訪問を詫びた。その上で

「井原警部から本と写真を預かって来るようにと言われてお伺いし

ました」

と言う。内偵が始まり、参考になる物を集めていると言う。確かに今日、井原警部に本なんかの事も話をした。ここにある事も話した。

理香は井原に連絡が取りたかったが、まずは西岡の携帯へ連絡をして相談をした。

西岡の意見は、それは渡さなきゃ拙いんじゃないか、と言うものだった。

理香は言われるままに鞆の中から本二冊と写真を取り出し、その男に渡した。男は受け取ると

「判りました。それでは確かにこの三点は、署の方で預かり保管をしておきます」

と言って、さっさと帰っていった。

後で井原に聞かれて理香は

「眼鏡を掛けていました」

と言う事になる。

「眼鏡？」

「ええ、金縁の・・・だつてすごく眼鏡が印象に残っているんです」

その眼鏡の男は和枝のマンションを出ると、道路に停めてあった車に乗った。

その車は白色の日産グロリアであり、プレートナンバーは

練馬 め33 ・ 6 x x

と、別な車の中で、まっさらな手帳に書き留めている男がいた。

省二郎、である。

省二郎は今日、あれから記憶を頼りに内神田三丁目の西岡の事務所と思われるビルへ行き、その後、白亜常葉女学園へ行って久松和枝の実家を調べ、ようやくここへ辿り着いたのだった。

七時前からここに着いていたのだが、マンションの前が繁華街にな

つているため長時間の駐車が出来ず、仕方なく裏へソアラを停めて車を降り、和枝の部屋の扉が見えるところでじっと見張っていた。寒かった。

九時半近く、その男が和枝の部屋の前に立つのを見届け、すぐ車に戻り、ソアラを表に回して男が荷物を小脇に抱えて出て来るのを確かめ、ナンバーを控えたわけである。

誰だ？

もうその時には男の乗ったグロリアは発進している。省二郎が一定の間隔を空けて後を追う。

誰だろう。和枝の個人的な知り合いか？

とにかく尾行ることにする。

二台の車は環八を南下する。八幡山を越えて少し行った時、グロリアは今まで走っていた右側車線を一番左側の車線に移り、停車する気配を見せた。

そのまま行ってしまう、という芸当が省二郎には出来なかった。

グロリアは気配を示しただけで、また直進し始めた。

省二郎はひやとしたが、そのまま進み始めたので、また後を追う。が、グロリアの男はその時点で尾行に気付いており、バックミラーに映る二・三台後ろのソアラを確実に捉えていた。

グロリアはスムーズに進み、信号を越えた。

二つ先の信号が、青から黄色へ変わる。

信号とグロリアの距離は、五十メートルはある。

急発進！

凄まじいタイヤの軋みと、それに続くクラクション。

省二郎は、一瞬の躊躇もしなかった。

ギアーシャフトをDからLへ落とし、アクセルを目いっぱい踏み込む。続くタイヤの悲鳴。

四千CC、V-8、DOHCのエンジンが唸りを上げてグロリアを追う。

彼我の距離、三十メートル。間に車が二台。

グロリアは右側車線と反対車線をまたぐ格好で前方に突き進んでいる。省二郎は反対に一番左側の車線をぎりぎりに走る。信号が黄色から赤になり、前方十字路の左右から車の群れが動き始めた。

省二郎もクラクションを鳴らし、ハンドルを右斜めに切ってグロリアを追尾する。

ライトが交差する。

十字路を出てくる車の鼻先をグロリアが突っ切り、ソアラが左から出て来る車にぶつかりそうになる。

省二郎はハンドルを右に大きく切り、対向車線に停車していた車の脇を、がりがりつと擦りながらソアラの体制を元に戻した。尻が大きくぶれる。

街路灯が左右を飛び過ぎ、ネオンが原型をとどめず、滲む。手にびっしり汗をかいているが、視線は一点に絞られている。

白色の、日産グロリアである。

けたたましいクラクションの音とタイヤの軋み。ゴムの焦げる臭い。前方にはグロリアしか走っていない。距離、十五メートル。グロリアに追いつがる。

反対車線から車の群れが近づいて来る。

グロリアはぎりぎりの所でその群れの前に飛び出し、突っ切り、向こう側反対車線の歩道に乗り上げた。

省二郎は行き過ぎてから、急ブレーキをかけスピターンをした。後輪が歩道の段差に激しくぶつかり、大きく跳ねる。

が、その時にはグロリアとソアラの間には車の群れが流れている。

「……！」

省二郎は車を降りて、グロリアに目をやった。

車の群れの向こうで、グロリアの窓が下がり、中から広い額に眼鏡を掛けた男が、無表情に省二郎を見ている。

見詰め合う、二人。

それもつかの間、グロリアは歩道をゆっくり走り、脇の小道に曲が

っていった。

省二郎はすぐさま次の行動に移った。

理香を押さえなければ

省二郎は車を来た方とは逆に道をたどって、荻窪の和枝のマンションに向かった。

その間にも、理香に電話を入れるがどうやっても繋がらない。

和枝のマンションに着き、表の窓を見ると明かりが点いている。時間は十一時。省二郎は大きく息を吸い込み、車を降りてマンションに向かった。

理香に何をどのように話したら良いのか？ 理香はここに居るだろうか？ あるいは理香は、何を、どのくらい知っているのか？

そればかりではない。理香と西岡は手を組んでいて、白壁の財産を奪おうとしているかも知れないのだ。

省二郎は考え事をしながら、ゆっくりエレベーターホールへ向かった。

その、ゆっくりが、命取りだった。

ホールまであと二十メートルと言うところで、ホールからポストンバッグ片手に提げ、もう片方の手でタマを抱えた理香が出てきたのだ。

「理香さん！」

省二郎は思わず叫んだ。

しかし、理香は信じられないものでも見るような表情をしていたが、突如、大きく目を開き

「キャーッ！」

と、金切り声を張り上げた。

省二郎は怯んだ。が、気を取り直し

「理香さん！」

と、もう一度言い、近づいた。

その時、ホールの横から和枝の巨体が走り出てきて

「理香、逃げて！」

と、大声を上げながら突進して来るではないか。避けようとしたが戦意が無いため出足が鈍り、七十数キロの体重をそのまま受ける事になった。

省二郎は転倒した。転倒したまま理香を見ると、ボストンバックを放り出して小走りに駐車場の方へ走って行く。

理香さんは運転免許証を持っていたのかな？

省二郎は場違いな、そんな事をふと思った。

和枝が理香を追うように走り去ってから、省二郎はようやく起き上がり、理香が捨てていったボストンバックと、一旦走り去ってまた戻ってきてバッグの回りで鳴いているタマを拾い上げ、ソアラに戻った。

どうなっているんだろう？

考えても、何も判らない。省二郎には、その糸口さへ掴めない状態なのだ。しかし、強靱な精神と肉体の持ち主である省二郎は、やる時はやる、と思っている。

今からやらねばならない事、それは、昼間訪ねた西岡の事務所の住所地にあったレッドストーンという雑居ビルに入居していた「千代田秘書サービス」を搜索する事である。

レッドストーンビルへ昼間行った時、そのビルには「株式会社ニシオカ」なるものは存在していなかった。

ビル名が間違っていないところを見ると、そのビルの階段の入り口に表示されている入居者名の「千代田秘書サービス」なる会社が、なんと言っても怪しい。

訪ねてみた。

そして省二郎の、ニシオカはこちらで受け付けているのか、と言う問いに

「お答え出来ません」

と、太った女が言ったのだ。

その事務所へ今から行く。

省二郎は車を走らせた。助手席で、タマが鳴いている。常套句で申し訳ないが、昼間の雑踏が嘘のように静かな午前一時過ぎのビル街であつた。

省二郎は一段とうるさく鳴き始めたタマを車に残し、ビルの中に入つて辺りを窺うようにしてから懐中電灯を点けた。

電源が切つてあるのかエレベーターは動かない。仕方なく、ゆつくりと音を立てないよう気遣いながら最上階、といつても六階だが、そこまで登つてビル内に誰もいない事を確かめ、三階の「千代田秘書サービス」まで戻つた。

省二郎の手には、一メートルの鉄のバールが二本握られている。

もう一度、省二郎は辺りを窺い、耳をそばだてる。

心臓が、高鳴る。

省二郎は息を大きく吸い込んでから、一本のバールをアルミ製のドアの底部に差し入れ、力任せに持ち上げた。

ギツギツギツビギーッ

と、ビル全体にアルミのねじ切れる音が響き渡る。

息をゆつくり吐いて、そのバールの先端が当たっている帆柱を梃子にして、左側に思い切り回し、ドアの擦じれで出来た隙間にもう一本のバールをこじ入れた。そして、一気に手前に引いた。

ロケット弾でも炸裂したかのような大音響がビル全体を包む。

間髪を入れず省二郎は立ち上がつて、ひん曲がつてしまつたドアを足で蹴つた。一度、二度、三度そして四度目でドアが、半開きの状態になつた。

緊張と激しい動きのため、汗が身体中から吹き出ている。

背中を二・三本の汗が流れている。

耳を澄ますが、ドアが抉じ開けられた大音響の余韻のほか、何も聞こえない。誰にも知られていないようだ。それに、今更知られてもどうする事も出来ない。

バールを離し、懐中電灯で照らしながら、ゆっくりと省二郎は事務所の中に入って行った。

ブルーサファイア

第2章 ブルーサファイア

断章 発見

大泉康夫はその日の事を終生忘れないであろう。

その日、つまり平成十四年一月二十五日、木曜日の事であるが、その日の朝6時、康夫は戸田村大門の自宅を出て、県道十八号線を東に向かって走っていた。

助手席には山本という東京の客を乗せ、荷台には鳥専門に調教をしたセターを一頭乗せて朝まだ明けきらぬ山道を走っているわけであったが、康夫は余り楽しい雰囲気ではなかった。

三日前に猟友会から連絡があり、康夫に東京の客を一人案内してやって欲しいという事で了解をしたが、やって来た客は場所を指定したのである。指定した、と言うのは調書に書かなかったが、康夫は全体の感じで、どう表現したらいいのか指定されたような、そんな具合になってしまったのだ。

警察にも、その点はくどく聞かれたが、とにかくその日の風向きなどを相談しているうちに、そこへ行く事になってしまったとしか言いようがない。

実際、相談している時は西側に行く事は余り賛成ではなかった。だから楽しくないのだが、理詰めで言われれば山本に反論は出来なかった。

不愉快だった。

しかし、警察に何故と訊かれる度、山本の言った理由を述べている内に、自分でもそれが本当になってしまった。

現実の時間帯の時は、運転もつい荒っぽくなり、助手席の山本に自分が不愉快である事をそれとなく知らしめた。

そんな男二人と一頭の猟犬を乗せたマツダの四WDは、途中の小道を左に折れ真城山の峠へ向かった。

朝早い伊豆の山並みは、東の空といわず辺り全体に、黒々とした稜線を浮かび上がらせている。

空気が冷たい。

十分ほど走った時、隣の男が目配せをした。と思った。これも何度も警察に訊かれたが、そんな全体の感じだった。確かに山本は、この林道へ車を乗り入れてしばらく行った時、康夫さんはこんな所まで知っているんですね、と言って感心していたが、その時は自分の意思で曲がったような気はしなかった。しかしこれも、調書にはそう書かなかった。文章に出来ない・・・雰囲気だった。何となく曲がった、としか言いようがないのである。

調教で吠える事を禁じられている次郎が、康夫の命令に反し、猛然と吠えて腐乱死体を掘り出し、足が出てきた時ほど、康夫の生涯に驚きの瞬間はない。

足がぐくぐく震え、必死になって車まで戻り、村に引き返す車の運転を、どうやってしていたのか記憶にない。後ろから恐ろしい物に追っかけられているような気がして、夢中だった。本当に恐かった。もう金輪際、山には行きたくない、と今は思っている。

二・三度掛けたが携帯は山の中で繋がらず、村の駐在所まで来て飛び込んで

「足が、足が」

と奥に向かって叫ぶ辺りから、記憶が定かになる。

八時前だった。

消防団が召集されて、現地を確保しに行くまでに一時間はかからなかった。しかしそれよりも、記憶は完全に定かになったが、回りのどこを捜しても、山本はいなかった。

静岡県警沼津署から、伊豆、真城山麓南西の山間で発見された変死体について、東京都渋谷区渋谷××× 飯野レジデンス512号室の堀井省二郎を、重要参考人として手配して頂きたいといった旨の連絡が入ってから、警視庁渋谷署の動きは早かった。

その件に関しては当署で現在捜査中の事件である旨の連絡を静岡県警に入れ、情報を警視庁に送るよう圧力を掛けた。

どちらが扱う事件か、綱引きである。

午後三時、渋谷署で臨時の捜査会議が多田警視の下に行われ、井原が二・三日前からの経緯を語った。

吉田刑事が言う。

「それだけの動機があつて、仏さんの横から堀井の財布が出てきたとなると、死体は白壁貢、やったのは堀井省二郎、と考えるのが今のところ常道でしょうなあ」

という単純で明快な判断が元になった訳ではなかったが、多田警視は捜査方針の重点が井原の情報にあるとし

「この事件は井原君、君が担当だな」

と言った。

そしてその後、臨時に井上刑事と藤原刑事の二人を井原の下に配属したため、井原の課の捜査員は井原を含めて七人になった。

この七人の内、現状事件を抱えていない、手のすいている者が中心の専従となり、この事件を解決していかなくてはならない訳であるが、まだ正式な捜査本部が設置された訳ではない。

正式な捜査本部設置となると本庁の警視が本部長となつて乗り込んで来ることも多い。

まずはこれから多田警視と井原が他班や本庁と折衝して、後数人を招集しながら今日中に本部を設ける事になるが、組織の対応より現実が先行しているため井原の班が実態としては活動を開始する。

井原は多田警視に

「判りました。それではー」

と言つて、吉田に安藤理香と西岡為三への連絡方法を伝え

「二人の内どちらか一人で構わない。一緒に沼津署へ飛んで身元の確認をするように」

と言ひ、続けて言つた。

「佐橋君と見坊君は、堀井の線だ。新橋の有本会計へ行つて、所長から詳しい話を訊くんだ」

「井上君は藤原君と一緒にだ。白壁商会へ行つてくれ」

井原が指示をする度に、一人、また一人と席を立ち行動に移つてゆく。

井原は、これでまた数週間徹夜に近い日が続くな、とうんざりしたが、どちらにしろこの事件の解決は早いだろうと思つた。

刑事と言ふ職業は、先の見通しがあればある程、うんざりするものである。

事件が単純であれば、捜査から起訴まで全てが一貫して事務的な流れになつてしまう。

今回の事件は

その部類だな

と、初期の段階で井原は思つた。

井原だけでなく、多田警視もそう考えていた節がある。

そんな感情の流れが第一線の刑事まで微妙に伝わり、それが、大きな陥穽になつていたのではないかと、後あと井原は臍を噛む思いをする訳であつた。

その頃、省二郎は下北沢の柴垣の家に身を潜めていた。

昨夜、グロリアにすんでのところで逃げられ、返す刀で和枝のマンションに行くと、またも今一步というところで理香に逃げられた。

理香へはメールを出したりして連絡を取ろうとするが、その後何の連絡もないので、省二郎は三鷹の義妹を通して連絡を図つた。

それでも連絡が取れない。省二郎に繋がる一切を遮断している。

省二郎は第三、第四と次なる攻撃に移る必要に迫られていた。しかし、と省二郎は思う。

しかし、俺の考えは間違っているのだろうか？ 身を潜める危険などないのかも知れない。しかし、と、また省二郎は思う。

白壁の失踪から西岡の出現。不可解な天麩羅屋での出来事。そしてなお不可解な理香の行動。それらを良く考えてみよ、何が浮かび上がる？

昨夜の荻窪のマンションでもそうだが、理香たちは電気を点けたまま逃げようとしていた。ああいう事は女が考える事とは思えない。誰かが、後ろで糸を引いている。

何かあるんだ。身を晒すのは危険だ。

省二郎がそんな事を考えてタマの頭を撫でていると

「失礼します」

と言つて襖が開き、面長な柴垣の奥さんが入って来た。

「居間の方にお茶が入っていますから、どうぞいらして下さい」

「ええ、ありがとう」

「お疲れでしょう。昨夜はあんなに遅かったのに、今朝は食事もしないで朝早くから――」

省二郎は昨夜三時近くにここへ着き、今朝はまた五時に起きて白壁商会へ向かったのだ。

しかし白壁商会へ行つて、省二郎は戸惑ってしまった。鍵が合わないのだ。

立场上、省二郎は合鍵を持っていたが、いつの間にか扉の鍵が変えられている。目に見えぬ敵の鮮やかな周到振りに、省二郎の矛先も鈍り勝ちになる。

しかし省二郎はその足でレンタカー屋へ走り、車を代え、江東区にあるオルフェへ向かった。

今日は木曜日である。

シャルルの契約日である以上、何らかの動きがあるに違いない。契約にはイタリアにあるシャルル本社の人間も立ち会う事になっているので、オルフェ本社で契約はなされるはずだ。

レンタカーはカローラレビンである。

敵はこの車の事を知らない。

そこでオルフェのすぐ横に停車させて身を潜めた。

しかし、三時になっても、四時になっても何の変化もない。

省二郎は見過ごしたのか？　と思った。

実は昨夜、理香が逃げる時タマを置き去りにしたため、何となくタマの身柄を預かる格好になっていて、ずっと連れ回している。そのタマが、喉が渴いたという動作をしきりにするので、車に買い溜めておいたコーラを与えたが見向きもしない。

根負けして途中、車を十五分ほど離れた。

あれが拙かったか？

省二郎は思い切ってオルフェの田尻部長に連絡を入れた。

すると、午前中に契約は終わっていると言い

「場所？　社長の家だよ。保証金？　ああ、振り込んでもらった二千万円は確認しましたから、安心して下さい。それよりも、身体の調子が悪いそうだが、もう直ったのかい？」

と言われてしまった。

待ち伏せしている間、省二郎は陸運局に電話をしてグロリアの持ち主を調べた。

陸運局の係官は

「電話では駄目です。一度こちらへ来て、該当車の登録証明をもらって下さい。ですが、四時で閉めますから――」

と言う事だった。

省二郎は田尻部長と話を終えた時点で、一旦今日は柴垣の所へ帰ろうと思った。

そして体勢を立て直し、もう一度最初からやり直そうと思った。万

里子からは相変わらず、会いたい、と言ってくるがそれどころではない。

マンションへ行くといっていたが・・・

だからまだ五時半前だったにも拘らず、どこへも寄らず下北沢の柴垣の家に帰宅した。

そしてタマの頭を撫でながら思案に耽っている時、柴垣の奥さんがふすまを開けた、という展開なのである。

居間へ行くと、子供が一人コタツに入ってテレビを見ている。

「たつくん、ご挨拶は？」

と呼ばれた今年四歳になった達雄は挨拶そっちのけで、猫のタマを見て目を輝かせた。

「小父さん、名前は？」

「タマだよ」

「タマ、おいで、タマ」

達雄はタマを膝に抱えて、頬ずりをして喜んでいる。

省二郎はお茶を飲みながらいろんな事を整理し、疑問点を洗い出し、これから自分が採らなければならない最善手を考えていた。

昨夜、和枝のマンションに現れた男は誰だろう？ 尾行に気付いてからのあの男の動きは、目を瞠らせるものがあつたが・・・

セルリアンタワーで西岡に会った時、自分はこの男をどこかで見たと思つたが、どこだろう？

省二郎はその事もずいぶん考えた。最初は「鬼押し出し」の写真の中の誰かかと思つたが、写真に並んだ顔なんて覚えてはいるはずもなかった。実際に見たら、写っているかも知れないが・・・しかし、そついう感じで知っているのとは違うが・・・どこかで会った事があるのだ。

理香はどこへ行つたのか？

省二郎は、結局、明日の自分の行動は

1 仙川の雑木林の現場に行く

2 練馬ナンバーの日産グロリアの持ち主を確かめる

3 四年前に白壁が借りていた、板橋の常盤台にある名東荘に行く以上の三つだと思った。

三番目の住所は紛失した手帳に控えた記憶を元にしてあるので、丁目までは良いが番地は判らない。

名東荘の賃借人名義は誰なのか？ 省二郎は理香と違い、白壁が彼の本名なのかどうか判らず、名義に拘っていた。

省二郎はコタツに入って、お茶を飲みながらそんな事を考えていた。

「小父さん、この猫、可愛いねえ」

と言った事で、ふと我に返り、そのまま省二郎はテレビのニュース画面に釘付けになった。

テレビニュースは、次のように伝えていた。

「今朝、伊豆真城山で狩猟中のハンターが、山の中に埋められている男性の死体を発見しました。その後の調べでこの男性の身元は、東京都世田谷区に住む白壁貢さんと判明しました。白壁貢さんは、今月十三日の夜から行方不明になっており、関係者の方から搜索の・・・」

テレビの画面は報道ヘリコプターから望遠カメラで撮っているものらしく、斜め上空から二十人ほどの捜査官を映し出していた。

白衣の捜査官も幾人か、垣間見える。

省二郎は、顔から血が引くのが、音を聞くようにして判った。

その瞬間は、生まれて初めて味わう、衝撃の知覚だった。

目の前が白濁したかとも思えるし、闇一色ともいえる、強烈な感覚。

「省二郎さん？」

と、問いかける柴垣の奥さんの言葉で、かろうじて踏み止まった、というところがあった。

「どうなさったんです？ お顔が真っ青ですわよ」

「・・・いや、いいんです」

「昨日から寝ていらつしやらないからですわ。ご遠慮なさらず、どうぞ寝て下さい。柴垣は九時過ぎないと帰宅しませんからー」

省二郎は抗う気など、全くなかった。

第2章 その2 家宅捜査

吉田刑事は仁丹を噛み潰しながら、松本刑事にぼやいた。

「うちの大将、ピリツとしねえなあ」

吉田と松本は「飯野レジデンス」から少し離れた路上の車の中で、堀井省二郎が現れるのを既に4時間近くも張っている。午後9時だった。

吉田は井原が捜査令状ひとつ請求するにも、何かしら逡巡し躊躇し勝ちなことを、ぴりつとしない、という表現で言っているのである。今朝、伊豆山中で発見された死体が白壁貢である事が確認され、しかも、死体の脇から堀井省二郎のオーストリッチの財布が出現しているのだ。中身も堀井の物なら、財布も有本会計から採取した指紋から堀井の物と推定されている。

そうであるなら、少なくとも、堀井の行方が判らない今、堀井の住居の家宅捜査令状は速やかに取らなければならない。

だから、吉田の言う、ぴりつとしないというのが、判らないでもない。

運転席の松本が堀井の手配写真を見ながら

「堀井の奴、電気を点けたままどこへ行きやあがつたんだ」

と、独り言のように言った。

その時、堀井の部屋に人の気配がした。

レースのカーテンだけがしてあったのに、布のカーテンが閉まったのだ。

マンションの入り口から入った人間は数人いたが、その中に堀井はいなかったのにどうした訳だ。

目線が集中し、緊張が走る。

「堀井の奴、帰ってきたんですか？」

「いや・・・あれは女だ」

「行きますか？」

「いや・・・待とう」

更に二時間が経過し、人通りが少なくなった。

十一時である。

そしてそれから五分もした時、堀井の部屋の電気が消えた。

吉田は松本に耳打ちをし、自分だけ車から降りた。

マンションから小柄な可愛い女が、えんじ色のコートに白いシヨルダーバッグを掛けて、出て来た。

三十メートルほどの間隔を置いて、吉田が後を追ひ、角を曲がって行った。

松本は無線でその事を本部に知らせる。

更に時が経つ。

そして又、更に時が流れ、その間松本は睡魔に襲われる度にくしゃくしゃのコートの襟を固く合わせ、寒さに震えながらシヨートホー
プを吸った。

たまに外へ出て身体を動かし、また車に戻る。

そんな事を繰り返し、明け方近くなった時、前方から2台に車が接近して来て、右斜めに停まった。

松本は煙草をもみ消し、車外に出て

「ご苦労さまです」

と、言った。

時計を見ると六時前である。

井原警部と佐橋刑事、そして去年配属になったばかりの見坊刑事が二人の検査官と一緒に険しい顔つきで歩いて来る。

「どうだ？」

と、井原は言い、その後の変化を尋ねてから

「吉田君には指示してある」

と言った。

その井原の手には、すでに堀井省二郎の部屋の合鍵が握られていた。室内には何が隠されているのか？ それは省二郎の部屋に向かつて歩いて行く四人の刑事にも、二人の検査官にも、そして省二郎自身にも判らない事だった。

第2章 その3 名東荘

省二郎は朝7時に、仙川の雑木林の中にいた。

二日前、車が停めてあったと同じ場所に車を停めて、改めて周囲を見回してみる。幹線道路からわずか二百メートルほど入っただけで鳥の鳴き声が静かに聞こえる。見上げると葉の落ちたケヤキにヒヨドリが四・五羽止まっている。

しかし辺りには空き缶やプラスチック容器が、うつすらと積もった霜をまとうて散らかっているだけで、ここへ自分を連れ込んだ人間の、それと思しき何ものも見当たらない。

仕方なく車に戻り、タマの頭を撫でて、柴垣との昨夜の会話を反芻する。

昨夜あれから二時間ほど眠り、九時半に柴垣に起こされた。

「お前どうしたんだ？ 心配事か？」

柴垣はスーツ姿のまま畳に座って、寝ている省二郎に言う。

「昨日からどうしたんだ？」

省二郎は重い頭を振り払って、布団の上に胡坐をかいだ。

達雄がタマを抱いて入って来て、タマを柴垣に紹介し始めると

「おうい、貴子」

と、大声で奥さんと呼び、誰も来てはいけないと、厳しい声でいった。

柴垣は大学時代のアイスホッケーの仲間である。

省二郎は左のウイングで、柴垣はキーパーだった。

省二郎はこういうわけか部員に人気があり、四年の時には主将に選ばれ、そのサブが柴垣だった。

その柴垣が畳の上で胡坐をかき、省二郎を見詰めている。

「俺が聞いているんだ。隠し事は無しだぜ」

省二郎は経緯を語った。

「で、お前は身の危険を感じているわけか？」

「まあ、そうだ。俺の考えは間違っていなかった、と思っている。

七時のテレビニュースで白壁の死体が発見されたと言っていたよ」

「何だって！」

と、柴垣は言葉を詰まらせ、後ろの襖を開けて

「貴子、夕刊を持って来てくれ」

と言った。

新聞には死体が発見されたという記事としては載っているが、名前も何も載っていない。印刷の時間に間に合わなかったであろう。

しばらく考えてから、柴垣は言った。

「お前の考えはどうなんだ？」

「事件の背後には西岡がいる。奴がこの事件の押さえた。そして今も何かを企んでいる。だから俺を仙川の雑木林に放置したのだ」

「西岡と理香がお前を嵌めた、という訳か？」

「そうとしか思えない。だって俺が人並み以上に酒を飲むなんて、理香から聞かなきゃ判らないはずだ」

「・・・」

「俺も最初からそう思っていたわけではない。しかし昨夜、理香は俺を見て逃げ出したんだぜ」

「じゃあ、白壁は理香と西岡に殺された、と考えているのか？」

「共謀かどうかは判らんが、二人の絡んだ事件だろうとは思っている」

「そこまで言うなら、黒に相談したらどうなんだ？ 確かあいつは

警察に勤めていたはずだろう」

「黒は警察へ行けと言っている。警察で、全てを話せと言っている。その点、俺もどうして良いか判らんが、白壁の消えた十三日から十六日の朝まで、俺のアリバイはない」

「ない？」

「よく考えたが、駄目だな。コンビニに二回行っただけだ」

「よし、俺が一度、黒に聞いてやる」

二人は夜遅くまで語り合い

「お前に万が一という事はあるか？」

と言う柴垣の問いに省二郎は答えた。

「可能性はあると思う。奴らは高いレベルで行動している。事務所もレンタルオフィスだし、昨夜の男でもそうだが、尾行を気遣っていた。俺は奴らの不意を衝いたつもりだ。それなのに、あの男は命を張って逃げた」

「・・・」

「何かあるんだ。白壁の死の裏には何かがある。それが何かは判らんが、命を張ってでもしなければならぬ、何かがあるんだ。あるいは隠さなければならぬ、何かがある・・・」

「・・・」

「そればかりか、あの直後に理香へ逃げるよう指示をしている。そうとしか思えないが、それほど用意周到に素早く反応するという事は、彼らに並々ならぬ目的と、それを遂行するだけの計画があつての事だと思う」

「彼らというのは西岡と眼鏡の男、そして理香という事になるのか？・・・久松もかな？」

「判らない。おそらく理香は利用されているだけだろう。理香は頭は悪くないが、これだけの事を計画するだけの頭脳はないし、何よりも実行するだけの度胸がないよ」

「という事は、二人ないし三人という事か？」

「それも判らない。とにかく非常にまとまった少人数のグループだ」それを聞くと柴垣は難しい顔をして座り直して、言った。

「お前に預かったアタツシウの中には五千万円の現金が入っている訳だが、あのお金はどうする心算だ」

「今はどうしたら良いのか、判らない。あのお金の事は理香も知らない。会社のお金なんだが、誰に渡して良いのか判断がつかないんだ」

柴垣は大きなため息をついて言った。

「お前に不測の事態が発生したら、俺はどうしたら良い？」

「・・・」

「どうして欲しいんだ？」

二人の男は視線を絡ませた。

省二郎は、言った。

「万里子を頼む」

省二郎は仙川に三十分位いて常盤台に向かった。

向かっている途中、まだ八時前だったけど運転している省二郎に万里子から電話が入った。

万里子は、激しく泣いていた。

「省二郎さん、省二郎さん・・・何処にいるの？」

「どうしたんだ?!」

「省二郎さん、先ほど刑事が来たの・・・それで、省二郎さんが何処にいるのか教えろって・・・わたし・・・知らないって言ったの」省二郎は車を路肩に停めて、ハンドルに倒れこんで聞いている。

万里子はしゃっくり上げて泣きながら、途切れ途切れに言った。

「そしたら、ぶたれて・・・今度は携帯番号を教えろって・・・わたしどうしていいか判らないから・・・教えちゃったの・・・ごめんなさい」

「万里子！今すぐそちらへ行くから」

「ううん。きつと刑事さんたちがいるから・・・省二郎さん、今日

の夜、会える」

「ああ、いつでも会えるよ」

「夜、九時に会いましょう。東急でね・・・必ず行くからね」

そして、電話は切れた。

凄いスピードで、追い詰められている。

逃げ切れるだろうか？

落ち着いて、やれる事だけをとにかくやろう。

名東荘の住所を常盤台の三丁目まで覚えていたので、近くで二度ほど尋ねてアパートに着いた。

西向き二階建ての貧相なアパートで、部屋数は八戸である。

大家を知るために住居人に聞こうと思うが、その前に理香が住んでいたと言う101号室を見てみた。

郵便箱が取り付けてあるのだが、そこに名前が書いてある。雨に滲んでいるが

浅井 修一

と読める。

省二郎の記憶を刺激するものがある。

白壁の残した古いスーツの、剥がしたネームも浅井だった

省二郎は辺りを窺い、三軒隣の104号室のドアをノックした。

顔を出したブルージーンズの青年は、二年前にこのアパートに来たが

「さあ。誰か住んでいるのかなあ？　いつもカーテンは閉めっぱなしだし・・・」

と言った。

省二郎が大家の住所を聞くと、青年はすぐ近くの東武東上線沿いにある八百屋を教えてくれた。

その八百屋はスーパーに毛の生えたような店構えだったが、店はまだ閉まっている。そこで裏へ回り、声を掛けると、中央市場への入場プレートの付いた帽子を被った親父が出てきた。

親父は気さくだった。省二郎の問いに

「浅井さんの事かい？」

と言って、不思議な事を言う。

五年前から、要するに平成九年二月から年間家賃前払いで貸していると言ひ、そればかりか浅井修一がそこを引き払った後も貸したままになつていて、月に一度自分が掃除をしにいくと言う。

「掃除たつてあんた、誰も住んでいないからさ」

ポステイングのチラシを捨てるのと、空気を入れ替えるだけだと言う。掃除代として一万円余分にもらつていふと言うのだ。

どういふ事だろう？ 浅井が借りて、白壁が住んでいた、というのか？

「部屋は何も無いわけですか？」

「何もつて訳じゃないがね、机と椅子、それに電話が一本あるよ」
その時、携帯が鳴つた。知らない番号である。

省二郎が耳に当てると、男の声がした。

「堀井さんですか？」

「・・・ええ」

「私は渋谷警察の吉田と言いますが・・・」

省二郎は、電源を切つた。

そしてまた親父に向かつて、契約用紙の控えでもあつたら見せて欲しい、と言うと、さすがに親父も嫌な顔をして、それは出来ないと言つた。

仕方なく省二郎は開店した八百屋で、車の中のタマのためにキャットフードを買おうとしたのだが、無いと言つので、煮干とパックの牛乳を買つて一旦名東荘に戻つた。

101号室の前で携帯の電源を入れ、試しに誰も出なかった都内の電話に掛けてみると、室内で微かに呼び出し音の音がする。

それを確かめてから、次の目的地である練馬区北町の自動車検査事務所に向かつた。

検査事務所はずいぶんとこつた返していて時間が掛かつた。二時間としてグロリアナンバー練馬ぬ×××の登録証明をもらつと、所

有者欄は浅井修一、その住所は名東荘と同じになっている。

白壁というあの男は、浅井修一というのが本名なのか？

時刻は二時半だった。

省二郎は練馬区役所へ車を飛ばし、浅井修一の住民票を挙げた。

もう浅井修一の住民票は名東荘に置いてないと思っていたが、案に相違して、住民票は平成九年二月からそこに置いたままになっている。

本籍 長野県北安曇郡奈川村××××

前住所 本籍に同じ

現住所 東京都練馬区常盤台三丁目××××

名前 浅井 修一

生年月日 昭和三十九年十月二十一日

等の事が記載されている。

省二郎はその住民票を眺め、反対車線から自分を見ていた眼鏡の男を思い出していた。

あの男なんだろうか？

省二郎は警察に追われていることで、何とこのか足元が地に着かない、現実感の希薄な、それでいて焦りの沸点というのか、そういう身体全体に鳥肌が立つような感覚が時間を置いては自分を襲ってくる、文字通り、襲ってくるのをどうしようもなかった。

落ち着くんだ

住民票を持って車に戻ると、タマが煮干の袋を破って食い散らかしており、強烈な煮干の臭いが車内に充満している。

タマをしつかりと叱ってからラジオを点けた。本当は朝から何度かラジオを聴きたかったのだが、気が散るので我慢をしていたのだ。十分もしない間に四時のニュースがあった。

ニュースはトップニュースとして雪印の牛肉偽装事件を伝えたあと白壁事件の事を次のように伝えていた。

<昨日、伊豆山中で発見されました男性の死体は、東京都世田谷区に住む会社経営、白壁貢さんと確認されました。しかし、事件の重要な鍵を握っていると思われる同社専務、堀井省二郎氏が五千万円持ったまま行方不明になっているところから、警視庁は同社の内紛に絡む殺人事件として堀井省二郎氏の行方を追っています>

省二郎は牙が自分に向けられて、襲い掛かって来るのを感じた。

もう遅いかもしれない

怒りと共に絶望感が身体全体に広がる。

時は去ったのだろうか？

省二郎は西岡が企んでいる事の全貌を知ったと思う。理由は判らないが、ターゲットが自分に向けられている事は、動物的な戦慄感が波状的に自分を襲って来るのを見ても察しが付く。針に貫かれた蝶の如きものである。逃げる術はないのかも知れない。

しかし省二郎の行動はまだ続く。

麻布にある都立中央図書館へ車を走らせた。

最初は雑誌、テレビニュースで十三日夜、白壁が見ていたと思われる「二十歳の主張」の番組の詳細を見てみた。

二冊の本を読んで、新成人になる人たちが討論をするという番組で「妻と私」「忍ぶ川」がその本だという。

「妻と私」は江藤淳という評論家、「忍ぶ川」は三浦哲郎という作家がそれぞれ書いたらしい。

次にテレビニュースになったであろうと思われる記事を捜すため、新聞を見た。

理香が言っていた二人組みの強盗はその後捕まっていたが、荒川区の住都公団コンクリート詰め女性変死体は犯人が捕まっていない。大きな記事であり未だに続報が続いている状況なので、現在までの流れの概略を記すと、借主、田所新二（39）は半年にわたり家賃を滞納し裁判所の呼び出しにも出頭せず、職員が赴いても頑として明け渡しを拒否していた。

年が改まり、一月十二日再度職員が訪ねた時には田所新二はどこか

へ出奔した後で、室内の浴槽からコンクリートに詰められた死後二・三年を経過した女性の変死体が出てきた。推定年齢は二十歳から五十歳までなのだが田所は一度も結婚した事がなく、女性の身元が判らない、というものである。

あとは何だ？

どうしても活字の大きな記事に目が行ってしまふ。雪印関連の記事が圧倒的に多い中、銀行の合併も目に付くが、小さな事件が余りにも多く、どれもが白壁と関係があるように思えてしまふ。

二十五日には東村山でホームレスが暴行死をしている。関係があるんだらうか？

しばらく拾い読みをして気になる事だけを手帳に書き留め、次に日本の緑化技術について調べた。

西岡の「緑化技術は日本が一番進んでいる」と言う言葉が、どうしても耳に付いて離れない。

しかし、日本の植樹の起源は縄文時代から続いていて、日本の国土の緑化は自然にだけ恵まれて存在しているわけではない、という事を知ったくらいだった。

省二郎は焦っている。

時間は淡々と、そして刻々と流れている。

次に新聞の九十九年度縮小版を借りようと思った。理香はその年の七月に急に白壁が結婚を取りやめたと言ったが、何かあるのだろうか？

カウンターで手続きをしようと思い時計を見ると八時を過ぎている。今日はここまでか・・・続きは明日にする事にした。

九時には万里子に会わなければならない。

第2章 その4 夜景

その夜の東京は、美しかった。

どうして今までこの美しさに気が付かなかったのだろうと戸惑うほど、東京は美しかった。

省二郎は万里子に尾行がない事を確かめてから、待ち合わせの店に行こうと思いエレベーターフロントの隅に隠れるようにしていたが、そういう行為自体が嫌になり、先に店で待っている事にした。

万里子は遅れて店に入ってきた。

ウエイトレスに案内されながら奥のテーブルの省二郎を見て、泣き出しそうな、それでいて笑うような、そんな複雑な表情を、万里子はした。

そして、エンジ色のコートをボーイに渡しながら肩をすくめて

「だって誰かが後ろからついて来るような気がするんですものー」と、立ったまま遅れて来た言い訳をした。

椅子に腰を下ろして、ショートカットの髪を後ろへ撫で付け、理由もなくはにかんで

「どう？・・・これ」

と、胸元の大きく開いたダークブルーのスーツに手をやった。胸に明るい赤色のバラのコサージュを飾っている。

「素敵だよ」

「これね。大宮のお友達が作ってくれたの・・・春物なの」と言っ舌を出し

「少し早いけど、いいよね」

と、言っ省二郎をじつと見た。

「・・・ああ、ほんと素敵だ」

ワインを飲んでの食事の最中も、万里子は大宮のお友達の事ばかり話した。

話が途切れると、万里子は不意に涙ぐんで、透けるような指を目に当てた。そして

「何でもないわ・・・」

と言っ

「レット・イツ・ビーね・・・聞こえるでしょう」

と、また涙ぐんだ。

省二郎は窓に広がる東京の夜景と、それと同じ硝子窓に映る万里子を、飽かず眺めた。

未来はそこにあるかのように、来年完成予定の六本木ヒルズが骨格だけを現して夜景の中央にある。

料理が運ばれ、二人だけの時間が、流れていく。

そして省二郎は、万里子のために買った婚約指輪を、ためらいながら、そつと取り出してテーブルの上に置いた。

ブルーサファイアは透き通った光を放って、何か唐突な未来を暗示しているようだった。

真つ赤なワインと青いサファイア。

二人とも、暗い未来の予感に責め立てられるように、お互いが、お互いだけの事を考えていた。

悲しくて、静かで、迫り来る圧倒的な未来に、たった二人だけで立ち向かっているかのような夜だった。

万里子はテーブルの上のブルーサファイアを見て

「ありがとう」

と、微笑んだ。

音楽が流れている。

セルリアンタワーのテレビ画面には省二郎の映像が映り、指名手配になった事を告げていたが、二人は口数少なく、ただ東京の夜景を眺め続けていた。

十二時になって渋谷駅の前で万里子と別れ、そこに聳え立っている

渋谷警察署を一時眺めてから、柴垣の家に帰った。

柴垣の家の近くのパーキングに車を停めて

「お前は貰い手が無いなあ」

と、タマを抱きながら言い、柴垣の家に向かった。

昨日は柴垣の子供の達雄がタマを欲しがったが、お母さんの貴子が

「駄目です」

と、きつぱり言っていたし、先ほどは万里子に

「ええ！この猫をー そりゃあ欲しいけど、一人暮らしよ。それにマンションじゃ禁止だし」

と、何となく預かってもらえる雰囲気ではなかった。

明日は千葉の巽ヶ丘へ行こうと思っている。

空を見上げると、星が幾つか瞬いている。省二郎は足を止めた。

星が光っているなあ

省二郎は、切羽詰ってしまった今、本当の意味で星を見ている気がする。星があることは知っているが、星を見る事の少ない生活を送っていた事に新鮮な驚きを感じる。

省二郎がそんな事を感じながらタマを抱きかかえて柴垣の家の門をくぐり、玄関の呼び鈴を押そうとしたその時、突如

「堀井だな」

と声が響き、十人ほどの人影が省二郎を囲んだ。

「・・・！」

顔から血が引くのが、またしても音が聞こえるように判る。身体全体が、一瞬の轟音で痺れたようになる。

玄関の明かりが点き、奥から貴子が刑事に腕を取られて一緒に出てきた。

「省二郎さん！」

省二郎の真ん前に、上官であろう、緑色のトックリセーターを着て、黒いコートを羽織った男が、白い紙をひらひらさせ

「堀井省二郎、白壁貢死体遺棄の容疑で逮捕する」

と言ってから、左右を見、顎をしゃくった。

手錠を掛けようとしてから、一人の刑事がその上官らしい男に

「猫を持ってますがー」と言つと

「猫？」

と、上官らしい男は言い、省二郎を見て

「お前のか？」

と尋ねた。

「・・・いや、拾った・・・」

「どうする？」

省二郎は玄関で立ち竦んでいる貴子に言った。

「もらって頂けますか？」

「・・・はい、判りました」

「助かります」

そして省二郎が手錠をはめられ、玄関に背を向けると背後で貴子の声がした。

「省二郎さん、主人に言伝でも？」

振り向いて省二郎が答える。

「ありがとう。でも、もうしてあります」

そして省二郎は、二度と振り返ることなく、未来へと歩いて行った。

憐憫の微笑（前書き）

追いかける省二郎と逃げる西岡たち。
白壁はなぜ死んだのだろう？
なぞは深まるばかりだ・・・

憐憫の微笑

吟の冬

焦燥と伸

あるいは狂った時計

断章 報告書

報告書

十三日

平成十四年二月二

夏樹エステート代表 西岡為

三 殿

先般、西那須事務所からお預かりした、黒色婦人夏物セーターについて、次の各項が判明しましたので、とりあえず中間報告をさせていただきます。

1 製造元

株式会社 アイ愛レディース

2 住所

札幌市中央区旭町一丁目××××

3 代表者

紺野 洋揺子 通称 紺 洋子

4 製造年月日

二〇〇二年（平成十四年）二月中旬より同年五月初旬まで

5 製造枚数

百六十五枚

6 販売地域

札幌、函館、旭川、千歳、苫小牧、岩見沢、小樽

7 各店舗名並びに各販売枚数

別紙参照

所見

この夏物婦人セーターは札幌市在住のデザイナー紺洋子氏のデザインズブランドとして上記期間販売されたものであり、数量も非常に限定されております。勢い、販売された店舗数も限られ全て合計しても一六軒にしかありません。地域的に見ても、札幌市を中心とした北海道の各都市に限られております。しかも商品の性質上買取商品になっておりますので、返品はありません。

引き続き個別の追跡調査に入りますが、当社が預かっている白壁明子氏の写真は、同人が高校生当時の物であり、現在ではすでに十数年を経ております。万全を期すためにも、少しでも新しい物がありましたら、至急送付下さい。

とにかく緊急を要する事でありますので強引な情報収集をしておりますが、ご要望のように、五日以内に白壁明子氏の所在を明らかに出来るか予断を許しません。

なおこの資料は紺野洋瑤子氏の全面的な協力を得て作成しています。が、協力を得るに当たって当方は並々ならぬ努力を致しました。詳しくは申し上げられませんが、紺野氏のプライベートに関する事もあり、直接の問い合わせはご容赦願います。

松男

堤MG事務所

代表 堤

第1章 憐憫の微笑

第1章 その1 会議

渋谷署の刑事課仮眠室には、二段ベッドが六台置いてある。以前は4台とロッカーが二台であったが、ロッカーを窓側に押し付けるようにして無理やりといった感じで二段ベッドを二台増やした。本当は三台もあれば充分だが五年前に東電のL事件と幼女誘拐事件が同時に起きた時の名残である。

井原はその時の事情を知らない。二年前に足立署から渋谷署に移って以来、仮眠室にくるたび

多いな

と思っただけである。

その井原が一番奥にあるベッドの上段で目を覚ましたのは、朝六時過ぎである。

目と同じ高さの位置にロッカーの天井部分があつて、バーチカルブラインドの隙間から射し込んでくる朝陽が埃を浮かび上がらせている。蠅が一匹、干からびて死んでいる。

堀井逮捕から四日目の朝である。が、逮捕が深夜であつたため実質的には三日目で、二十九日、月曜日の朝である。

単純な事件に見えたのが複雑な様相を帯び始めるのに、余り時間は掛からなかった。すでに事態は紛糾しているのだ。

井原は蠅の死骸を見ながら昨日の昼前、大分から上京して来た白壁の弟との会話を思い出していた。

「どんな様子でした？」

と、去年の帰省時の様子を尋ねる井原に、英二と名乗った白壁の弟は「どんなと言われましても、別段変わったところはありませんでしたよ。近くの毘沙門川で大きな鯉を釣り上げたりして、まあ普通の態度だったですねえ」

と、訛りの強い言葉で言つた。

「何か言つてませんでした？・・・こう、仕事の事で、何か・・・」

「仕事の事なんて何も」。こんな事になって初めて自営業だつて知つたくらいですからねえ。結婚するとは言つてたけど」

「結婚？」

「一緒に住んでいる人がいるから、結婚するって言ってましたね。理香さんって仰るんでしょう。昨日の葬式の時に会いましたけど、綺麗なかたですねえ。兄貴がうらやましいですよ」

井原と話をしていても英二の稽骨そうな物腰からは、彼が悲しんでいるのかどうか判別するのが難しかった。

井原がそんな事を反芻していると、仮眠室のドアが開いて佐橋が顔を見せた。

「課長、七時です」

「おお、すぐ行くよ」

「弁当用意してありますから、味噌汁が冷めない内に来て下さいよ」
「判った」

と言ってから、堀井はどうだ？ と尋ねた。

「どうって、何がです？」

「飯だよ。食べているかい？」

「いや、三日間何も食べていない様子ですね。昨日の日誌にもお茶ばかり飲むって書いてありましたよ」

「判った、すぐ行くよ」

佐橋が出て行った後も井原はすぐには起きなかった。今日九時から白壁貢殺人事件の第四回目の会議があるのだが、その事で井原の頭は重かった。

堀井省二郎の主張する、西岡為三犯人説に関してまだまだ署内は冷ややかだが、少しずつ微妙な気配が漂い始めているのを、井原は感じ取っている。

堀井の部屋から発見されたバルビツール酸系の睡眠薬が最終的な証拠となり、死体遺棄罪で指名手配された段階では、署内の誰もが堀井こそ白壁貢の殺害の犯人である事を疑っていなかった。そして代々木のレンタカー屋に預けてあった堀井の車から頭髮数本と少量の赤土が採取され、鑑識課よりの報告が昨日の早朝届いた時、事態は決定した。

紛れも無く頭髪はその長さ、形状、毛先の癖、性別、血液型、推定年齢からしてほぼ百パーセント被害者の物と思われ、土は現場の土と同一であったのである。

しかも死体の解剖の結果、死因は青酸カリによる中毒死であることが判明した。ただし胃内、及び血液中に多量の睡眠薬が残存しているところから、睡眠薬を飲ませて眠らせたあと青酸カリを飲ませたものと判断された。

堀井省二郎は、白壁貢殺害の単独犯である。と、昨日の午前中までは井原は勿論、全員が思っていた。ところが堀井の裏取りをしている佐橋が昨日の昼過ぎに帰って来て

「困った」

と、独り言のように言った。

「奴の言っている事に嘘はないなあ」

「どういう事なんだ？」

と、井原が聞き咎めて言うと

「課長には正式に報告しようと思っているんですが・・・考えがまとまらなくて」

と言う。

「・・・？」

「堀井が言っていたように間違いなく貸事務所でした」

「貸事務所が何か問題でもあるのか？」

「いやあ、堀井の裏を取っているだけなんです。確かに四日前、千代田秘書サービスが事務所荒らしにあっている事も確認しました。

被害届も出ておりますが、堀井の言っている事と状況も一致しますから、あれも堀井がやった事なんでしょう」

「だったら良いじゃないか」

「待って下さい課長、問題はそのあとなんです」

「あと」？

佐橋は腕組みをして頭を傾け、少し考えた。

「まず第一に報告しなければならぬ事は、課長、堀井が捜してい

た西岡の入会届けの件ですがー」

と言って机の上に二枚のコピーを広げた。

千代田秘書サービスへの入会の写しと、それに添付してある住民票の写しである。

井原は覗き込むようにして言った。

「これかい、堀井が捜しても無かった、と言うのは？」

「ええ、年代ものの二メートル近い金庫の中に入っていたんです。確かにあればボールでは開けられなかったでしょう」

「これがどうかしたのかい？」

「見て下さい。日付ですよ」

見ると両方とも一月二十二日になっている。

「・・・これが、何かあるのかい・・・」

と言いながら、井原はある事実に思い当たった。

「ああ、そうだ。二十二日といえば西岡がここへ来た日だ。月曜日で、僕が対応したんだ」

「ええ、その事は私も課長から聞きました。それとその夜、安藤理香にも会っていますね」

「・・・？」

つまり佐橋が指摘しているのは、一月二十二日の西岡為三の行動は

1 岩手県宮古市の市役所で住民票を取る

2 東京の千代田秘書サービスで入会の手続きをする

3 渋谷署で井原に会う

4 三軒茶屋で理香に会う

という具合になる。

「どうです課長」

「うーん」

と言って井原は黙り込んだ。

「西岡は今どうしている？」

「それが・・・昨日の朝から連絡が取れなくなっています。電源が切つてあるのか・・・それとも・・・」

井原は自分の机から西岡にもらった名刺を出し、佐橋に渡して言った。

「佐橋君、この名刺の裏に彼の今住んでいる所が控えてある。今日中にここを当たってくれ」

「判りました。今日は夕方理香に会って、例の堀井が言っている本などを持って行った人物について詳しく話を聞こうと思っているだけですから」

「あれも本当だったのか？」

「電話で理香に確認したのですが、何でも刑事が来て持って行った、と言っんですよ」

「刑事？」

と言ってから、待てよ、と思った。

「佐橋君、名刺だよ」

「え？」

「この名刺は当然、事務所を借りてから作ったんだろっねえ。その前には作れないわけだから・・・」

警察の捜査と言うものは、一般の人が考えるよりも的確で多岐にわたり、しかも素早い。そしてその豊富な資料から事件を立体的に再現するのに必要なものだけを、いわば事件の枝葉末節を削り、本道に必要なものだけを摘出して再構築をするわけである。公表されて一般の人が知るのは、膨大な事実とそれを背景にしたほんの一部なわけである。

この事件の場合、いつどこでどうやって、何故、白壁を殺害してかが本道であり、それに関する証拠、あるいは周囲の人間のそれに関する調書などが末節というわけである。

末節には沢田博子の調書もあれば、省二郎が主張す仙川のゴルフ場の前のケーキ屋の女将の調書もある。それらの中から、必要と思われるものだけを証拠として検察側に提出するわけである。

さて、九時半に始まった第四回の全体会議は三十分もすると煙草の煙でむせかえるようだった。

煙草を吸わない多田警視が悲鳴を上げるほどひどかった。

会議の議題は、まず死体遺棄罪でじつくり責めるべきか、一挙に殺人罪で起訴して激しく責めるべきかが議題となっている筈であったが、話は脇道にそれている。

堀井を直接調べている吉田の、堀井が否認を続けているため調書が進まないという報告が終わって、井上の、証拠品の堀井への入手経路もはかばかしくない、と言う報告が終わる頃から、会議は重い雰囲気包まれ始めた。

誰もが口数少なくなっていた。

こつという事件の初動の頃は本来議論百出になるのだが、今回は様で微妙な雰囲気だった。

そんな時、佐橋が口を開いた。

「もう一度、最初から事件を考えてみる必要があるんじゃないだろうか？」

吉田が仁丹を口に放り込んで、言った。

「何を考えるの？ 堀井が幾ら否認しようが証拠は動かし難い。きつちりとした証拠がある。われわれが考えなければいけないのは、堀井が一月十三日から十五日までの何時、何処で白壁を殺害したかなんだ。動機は判っている。殺害方法も、まあ判っている。となれば何時、何処でに問題を絞って考える必要があるのじゃないかね。佐橋君」

仁丹を噛み潰しながらショートホープを吸っている。

「はい、私もその通りだと思います。しかし、それと平行して白壁が失踪した前後の状況をもっと掘り下げる必要を感じています。不審な点が多すぎる。堀井が行ったという名東荘にも行ってきました。白壁は浅井と言う偽名・・・今のところ偽名と思われるのですが、それを使って五年前の平成九年二月より平成十年の七月までの

一年半あそこに住んでおりました。そのあとも、何に使用したのか家賃を年間一括で払い続け、電話も繋がったままです・・・何か、きな臭いものを感じるんです」

佐橋が言うように、八百屋の親父から聴取し、入居時に必要と言う事で保管してあった浅井修一の住民票を調べると、長野県安曇郡の浅井修一は確かに出生はしているが、行方不明になって十数年になるという人物だった。そこから、おそらく白壁は何らかの形で浅井修一の住民票というか、その存在を金で買ったと思われるのだった。以上のような事を佐橋が言うと、隣の席で庁内徽章を玩具にしていた井上が、そのままの姿勢で

「そうだなあ、私も何か腑に落ちないんだ。この事件には方向性が無いような気がして」
と言った。

「何だ、その方向性って？」

「どういふのかなあ、何と言って良いか判らんが、まあ、私が担当している証拠関係にしてみれば、犯人が使う道具と言う物は常に犯人と何らかの関連があるんだが、堀井と青酸カリってのは水と油のような気がするんだ・・・それと、なんていうか全体的なイメージの問題かなあ・・・しつくり来ないんだ」

吉田が、何馬鹿なこと言ってるんだという表情をさせて

「抽象的な事を言っただけでしょうがねえだろ」

と、いらいらした口調で言った。

「私も主任の言う事が正しいと思う。まず堀井を白状させてからの事だと思っています。電話履歴がなかったり、パソコンの履歴に証拠が見出せなくても、奴の行動と証拠を押さえれば」

と松本が言い出すと、見坊が追いかけるように言った。

「いや、佐橋さんが問題にしているのは、堀井の行動を洗っていたら、事件全体に不審な点がいっぱい出てきた。だからもう一度、事件の全体像を最初から考えてみよう、という事なんだ」

多田警視はみんなから少し離れて窓際に座っていて、窓を少し開け

て煙草から逃げるようにしている。冷たい空気が入ってくる。

「堀井の携帯の履歴には十二日夜から十六日朝まで発信がありませんし、事件に繋がる何もありません。車両ナンバーの追跡もやっておりますが、これも今のところ何もありません」

見坊が続けていると、それを遮るように

「佐橋君」

と、吉田はため息混じりに言った。

「君の報告書によるとだ、西岡の周辺の再調査が必要との事だが、何故だね。必要な調査は取ってあるんだろう？」

「そうです。そういう意味では必要がありません。しかし、西岡は事件発覚直前に出現し、堀井逮捕の翌日、一昨日の午前中の事です。二回目の調査をとったあと、午後四時ごろ堀井との整合性を問い合わせたのですが、連絡が取れませんでした。その状態が今日まで続いています。この間わずか六日間です」

「どうして変なの、要するに丸一日半連絡が取れていないだけだろう」

と、細い目を更に細くして言った。

「よしんば、例えその行動に不審な点があったとしても、白壁を殺す動機というものが西岡にない」

「怨恨かもしれませんよ」

と佐橋は若干投げやりな調子で言い、隣で軽く頷いている井上を見て、困ったという感じで続けた。

「いえ、私は西岡が犯人だなんて言っているわけじゃないんです。私が堀井の言っている事の裏取りをしていたら西岡が非常に重要な鍵を握っている人物として浮かび上がってきた。この西岡の行動が、これまた非常に不可解である。である以上、一度本格的に西岡を洗う必要があるんじゃないかと、そう思うわけです」

机の上をじつと見ている吉田の、隣に座っている松本が

「西岡の住居はどうなっています？ 住民票のない所に住んでいると聞きましたが・・・」

と、テーブルの向かい側に座っている佐橋に向かって聞くと、その隣の見坊が

「誰もいなかった」

と言った。そして井原に向かって

「昨夜遅くなつてまだ報告しておりませんが、鎌倉の住所地に行つたところ、建売の一軒家が建つておりました。所有者は西岡本人です。詳しくはのちほど報告しますが、隣の人の話ではここ一週間ほど姿を見ていないという事でした」

と言うと、井原は

「その件は、電話で佐橋君に聞く事は聞いているよ」

と言った。見坊は、あ、そうでしたかと言った表情でしきりに頭を掻いた。そして言った。

「ですから、堀井が言う逃亡説が本当かと思ひまして・・・」

その時、井上とコンビを組んでいる一番と年若い藤原が初めて口を開いた。

「例の睡眠薬なんですけど、製造番号からは横浜、及び横浜近郊の薬局へ昨年の十一月初旬から十二月半ばにかけて出荷された事が判明しています。九割近い確立で横浜市内だろうという事ですので、神奈川県警にも協力を仰いで薬局を回ってもらっていますが、未だに手掛かりがありません」

藤原の言っていることは説明が要る。

白壁の死因は青酸カリによるものであるが、具体的な殺害方法が判らなかつた。しかし科研からの報告書に多量のバルビツール酸系睡眠薬が体内から検出された事により、殺害方法は以下のようなと推察された。

つまり、何らかの方法で睡眠薬を飲ませ、昏睡状態にしてから青酸カリを飲ませた。

分析から睡眠薬のメーカーを割り出したところ日本国内で製造販売されたものである事が判り、堀井省二郎の室内から多量の同睡眠薬が発見された。

藤原の話はまだ続いている。

「堀井がこれをどこの薬局で手に入れたのか？ 手に入れるには医師の処方箋が必要なので・・・」

全員思いおもいの姿勢で聞いているが、多田警視は時間が気になるのか、時々窓際から室内前面中央に掲げてある時計を、身をよじって覗き見していた。

十一時十分前である。

藤原が話を終えると同時に、彼の背中に近いドアを誰かがノックした。そして半開きのドアから調査統計の婦警が顔をいれ

「よろしい？」

と言った。

全員の視線を浴びて婦警は少し躊躇したようだったが

「今朝課長より依頼のありました前科照合が終わりましたので・・・混んでいたものですから遅くなって申し訳ありません」

と、部屋に入りながら井原に言った。

多田警視が

「ちようどいい、十分ほど休憩にしよう」

と言ってから、井原に封筒を渡している婦警に

「君、すまないが皆のお茶をいれてくれないか」

と言い、井原の脇に来て、何やら耳打ちをして出て行った。

吉田と見坊も、こちらはトイレに行くのか後方のドアから出て行く。

重苦しい雰囲気から開放されたのか、室内がざわめき始めた。

井原は手渡された数枚の資料に目を落としていたが、やがて険しい顔つきでその資料を机に端に置き、頭を抱え込んだ。

吉田が帰って来て

「課長、どうしたんです？」

と聞くと、井原は何も言わずその資料を吉田に渡した。

それはコンピューターから打ち出された犯罪者名簿の写しと、所轄警察にある写真及び指紋、掌紋等の写しであった。

殺人被告事件

西岡 為三

事件番号 平3年^う1691号

刑期 五年六月

・
・
・

続いて本籍や当時の職業などが記載されており、そのあとに事件事実が三枚の用紙に書かれている。

次の一枚には受刑刑務所や出所期日が並んでゆき、最後に岩手県警から送付された顔写真が載っていた。

写真は少し見ずらいが、それでも井原の知っている西岡に間違いはない。調書に取ってある指紋と照合すれば、なおはつきりするであろう。

前科資料を回し読みしている間に多田警視が帰って来て、井原を見てから深く頷いた。何事か嬉しいことでもあったようである。しかし、皆の沈んだ様子を見て

「どうかしたのか？」

と言うと、井上が手にしていた資料を多田警視に渡した。

吉田が言う。

「よし、こうなったら佐橋君の言う西岡の線ももう少し追ってみましょうかー　しかし、人数が足りるかな？」

「いや人数はこのままでいく。西岡はあくまで傍系だ」

と井原が言うと、続いて井上がお茶をぐくりとのんで言った。

「しかしこうなると、西岡も一筋縄ではいかん男かも知れんなあ。白壁は睡眠薬で眠らされて殺害されたわけだが、堀井の言う事を信じるなら、奴も睡眠薬で眠らされたと主張している。両方とも睡眠薬だよ」

「本当に眠らされたのかな？」

「天麩羅屋のマスターはそんな事はなかったって言ってるしねえ。

二人でお銚子を十六本飲んだんだったな。酔っ払ったんだろう」

「そのあとの記憶がないんだって？」

「気が付いたら仙川の林の中って言うが、どうかねえ」

「あの女将さん、目が真つ赤だったと言ってましたよ」

急に騒がしくなったのをみて

「吉田君、君は伊豆の現場に行つて来たんだろう。どうだったね、現場を見れば君の事だ、何か感じたことがあったらどう？」

と多田警視が言った。

いつの間にか窓から陽が斜めに差し込んでいて、多田警視をすっぱり包んでいる。警視の襟章が光る。

「いや、捜査報告書にある通りです」

「何言ってる。隠し事なんかするなよ。何でも良いよ、君が感じた事をそのまま言えよ。言葉を選ぶ必要はないから」

吉田は多田警視にそう言われると、吸っていた煙草を灰皿にぎゅうつともみ消して、本当に困ったという顔をして言った。

「それじゃあ・・・というか、ま、感じたただけなんですけど・・・最初には共犯がいたんじゃないかと思いましたね」

全員が吉田の顔を見た。

「林道から車を降りて、あの現場まで五百メートル近くある。しかも道のない山の斜面で、日付からすると霽か雪が降った日だ。何もない日に行つた私でさえ泥だらけになって、汗びっしょりだった。独りでやれるだろうか？ 体重六十キ口弱の死体を担いで、スコッ

プを持って・・・常人にそんな事出来るか？」

そう言つて全員を見渡してから

「しかし、堀井に会つて思いましたよ。この男ならやれる・・・あのガタイだ」

吉田はそう言つてから煙草を取り出し、火を点けた。

「それと、もう一つ感じた・・・犯人は当然あの辺りの土地鑑があるはずなのだが、ロマンの判る奴に違いない」

「・・・？」

「埋葬の仕方や、手向けてあった花もそうだが、あの山のあの部分だけが平地になっていて、陽がちょうどいい加減で降り注ぐんだ。そして、遠く駿河湾が広がり、少し位置を変えれば富士が一望だ。理想的な墓場だよ。霊園分譲なら即日完売間違いなしだ」

「佐橋君は怨恨という言葉を使ったが、納得出来ないな。あれは、贖罪じゃあないかな。殺してすいませんという・・・」

「土地鑑といえば発見者の一人、山本という男はどうなったんですか？」

会議はまだまだ続きそうだった。

第1章 その2 瞑目

やがて昼過ぎに終わった会議は、とりあえず起訴を延ばして今の捜査方針を続行すると共に、西岡為三の身辺と、また西岡と白壁の関係を新たに詳しく調査をする必要があるという認識で一致した。

井原は席に戻ると、直ちに岩手県警宮古署に電話をいれ、西岡が起こした殺人事件の内容をよく知る者に直接話を聞いた。

事件は、概ね次ぎのようなものであった。

平成三年二月六日、岩手県宮古地方はその日も雪が降り続く陰鬱な日であったが、午後八時二十分ごろ宮古市保久田の一角でけたたましい悲鳴が上がった。

女の悲鳴であった。

布団商を営んでいる木村某が悲鳴を聞きつけ雪が降りしきる表に出てみると、筋向いに住む菊池隆司の妻、ひえが、顔面を血だらけにして雪の中を走って来るのが見えた。

十五分後、警官が菊池隆司宅の応接間で血糊の着いた日本刀の前に正座し、顎から血を流している西岡為三を発見し、現行犯逮捕した。傍らには首の左頸動脈を斬られた男が血の海の中、土色に濁った目

を見開き、絶命していた。

十四年前の当時、三十二歳になったばかりの西岡は県立宮古東高校の数学の教師であり、殺された川口智英は同県県議員、菊池隆司の私設秘書であった。

事件の背景は、概ね次のような事情に依っていた。

事件をさかのぼる事四年前に、西岡為三の母、勝代、所有の自宅裏山林を菊池隆司が買い取った。

勝代は先祖からの土地であり、為三とその弟の康裕にもしもの事があつた場合を考えて、金にするのは嫌だと断つたのだが、為三の奉職する高校にまで手を回すやり方に断わり切れなくなり売つたのである。

金銭的には相場より高く、その時点で何ら問題があつたわけではない。

三年後に、それが問題になった。

県道四十号線のバイパスが問題の土地を通る事になったのである。

それを知った時、為三は笑って

「うまくやるなあ」

と言っただけであつたが、その道が自宅母屋を横切るとなつて話は変わった。

為三は県庁に幾度か足を運んだのだが、話にどうも裏がありそうな感じで、担当者も言葉を濁す場面が多かつた。その話しぶりから菊池隆司に何らかの圧力を掛けられている事が推察された。

県議、菊池隆司は単なる県議ではなく、自宅は菊興会という自称右翼の事務所を兼ねている、という人物だつた。

為三の自宅に嫌がらせが相次ぎ、追い込まれて悲観した勝代がその年一月二十七日深夜、自宅に火を放つて焼身自殺を遂げたのである。

「頸動脈を斬つたとは、狙つてやったわけですね」

「いや、それですよ、裁判のとき一番の争点でした。為三は高校生

の頃から剣道を始めたようですが、大学時代は勿論、教師になつてからも全国大会に出場しておる位なんです。しかし、この事件はそんなんじゃないんですな」

「しかしどちらにせよ、殺人にしては刑期五年六月はおかしいですが、何か事情でもあったのでしょうか？」

「ですからね、事件事実の詳細に三人の裁判官の所見がありますでしょう？ 刑法の条文が連ねてあるだけで素人には判りにくいのですが、要は過剰防衛を適用されたのですな」

「・・・過剰防衛？」

「日本刀を持ち出したのがひいで、斬りつけて反対に斬られてしまったのが死んだ川口でしてね。切り口からすると揉めている間に斬られてしまったんでしょあ。執行猶予でもおかしくないような事件でしたよ」

「・・・控訴は？」

「しませんでしたな・・・変な言い方ですが、為三は立派でしたよ」

「私も現場に立ち会ったのですが、今でも現場で正座していた為三を思い出しますと鬼気迫るものがありますよ。こう背筋をぴしっと伸ばしましてね、血の海の中で、いや本当、恐ろしいほどの血の量でしたが、その中で傲然と瞑目しておりましたなあー」

第1章 その3 フリージア

会議のあった翌々日の一月三十一日、頑強に否認を続ける堀井省二郎に対して、担当検事である金津検事直接の取調べがあった。

被疑者である堀井省二郎を、刑事が留置場から検察庁へ連行する形で行われるわけであったが、取調べの担当である吉田は一緒に行かなかった。

吉田は先日 of 会議の方針に沿って行動するためには、佐橋や堀井の話の具合から別の目で常盤台の名東荘を調べてみようと、井原と佐

橋の了解を取って名東荘へ向かった。

松本とコンビを組むはずであったが朝の打ち合わせが終わったあとに、松本の姉が交通事故で入院し瀕死である、という父親からの電話が入ったため、吉田は一人である。

事前に連絡をしておいた為、大家である八百屋の親父は吉田を見て「待つておりました」

と、アパートの鍵をがちゃがちゃやりながら言った。

質問に関しての親父の答えは、佐橋の報告と何も変わらなかった。性格は気に食わないが、佐橋はやはり切れる、と吉田は思った。佐橋の報告書は隙のない報告書であった事を再確認しただけだった。問題の名東荘に行った。

吉田はまず外観を写真に撮り、次に玄関部分を写真に撮った。そして親父がドアを開けると、掃除道具が固まって置いてある。今度はそれを撮ろうとしたら

「それはうちの物ですよ」

と親父が言った。

室内は六畳一間と四畳半一間、それに二畳ほどの台所がついた二DKの間取りになっている。東側に当たる六畳間だけに腰窓がついており、貧相なカーテンが下がっていて、その右、窓際に本棚の付いた学習用机と、それに合わせた小さな椅子が置いてある。

四畳半の部屋の押入れは開け放たれており、何も無い。

そして机の上には、クリーム色の固定電話が一台。それも、単純な通話機能以外は何も付属機能のない電話機が置いてある。

室内蛍光灯が二機、ぶら下がっている。

トイレは段差のある和式。新しいタオルとトイレットペーパーが綺麗な形で付いている。風呂は据え置きの一入用ポリ浴槽。使用できるのか疑いたくなるようなバランス釜に簡易シャワー。

生活の臭いにする物は、台所にあるアルミ製の鍋が一個と、その横にあるマグカップと、それに差し込まれた歯ブラシが一本。

吉田はあちらこちらと写真を撮ってから、メモを取り出し携帯のボ

タンを押した。

机の上の電話が鳴る。

携帯を切ってから、吉田はハンカチを出して指紋が付かないようにして受話器を持ち上げてみた。

「ツー、ツー、ツー」

発信準備音が聞こえる。

受話器を戻してから、机の引き出しを見たり、落書きでもないかと丹念に見てみる。何もない。

もう一度各部屋を見てみる。畳の縁、隙間などにも注意を注ぐ。六畳間の部屋の畳の隙間に、何かがあった。指を入れて持ち上げ、取り出してみると爪楊枝だった。畳を元に戻す。

六畳間の真ん中に胡坐を組んで座った。

玄関から親父がぼかんとした顔をして見ている。

何なんだ？ 薄気味悪い

吉田はそうやって天井を見たりしながら神経を集中させる。

「・・・？」

吉田は立って台所に行った。

マグカップと歯ブラシ。

歯ブラシは何処にでもある市販の物だったが、マグカップは陶器製のなかなか良いものようだ。下地は薄い緑の木の葉模様になっていて、下辺にこげ茶で模様が一周して取り巻いている。

その模様は、縦に並べられた文字だった。マグカップを横にすると縦に文字として認識できるが、マグカップを立てていると縦の字が横になって並ぶため一見、唐草模様が取り巻いているように見える。またそれが製作者の意図であるため、文字もそれらしく角ばって一見しての判別は困難だ。

吉田はくるくる回して何が書いてあるのか、読んでみた。

カタカナで、フリージアとして電話番号と住所が書いてある。横浜市南区井土ヶ谷××××

メモ用紙に移してから、拡大してデジカメに納めた。

そして一呼吸置いて、その電話番号に掛けてみる。

呼び出し音が鳴ってしばらくして

「はい、フリージアです」

と声いうが聞こえた。

吉田は横浜の井土ヶ谷下町に着いてから、一方通行の道路に脚を取られて少し余分に時間を取られた。

午後3時である。

レストラン「フリージア」は高台の高級住宅街の一角にあった。横浜港が一望である。

緑に囲まれた300坪ほどの敷地に、建坪100坪ほどの平屋建てで、白い瀟洒な姿を見せていた。大きな赤い屋根が、スペイン瓦で葺かれている。

駐車場へ車を止めようとすると、真っ赤なツィーターベントツとかぴかぴかのジャガーとか、吉田の光沢のはげたカローラとはずいぶん違う種類の車が多い。

それでも吉田は堂々と真ん中に停めた。車はカローラでもナンバープレートは8ナンバーだ。

しかし店内に入る時には、私服の安物のブレザーを引っ掛けている吉田としては少し気が引けないでもない。

吉田はレストランといえばファミリースタランのイメージしか湧かない。それとはずいぶん違う。まず空間の大きさと調度品の格式の高さ、そして緑の多いこと。

吉田の生活には緑は余り関係ないが、そんな吉田でもここの植物の手入れの行き届いた様には気圧される

吉田は入り口に一番近い席に座った。ここからだ店内が程よく見渡せる。

店内は時間帯のせいなのか、客が疎らである。

「どつぞ」

と言って、青いワンピースの制服を着たウエイトレスが、お絞りと水をテーブルに置いた。そしてメニューを吉田に手渡す。

吉田はメニューを開いて、ギョツとした。間違いではないか、と思える金額が並んでいる。

コーヒーが二千円！

吉田は警察手帳を見せて話を聞くだけにしようかと、一瞬思ったが、井原に言って経費で落とそうと思い直した。吉田にしたって、メニューを見てから警察手帳を出すのには、ちょっとした抵抗がある。店内は左手全体がガラス張りで、港を行き交う船が美しい。空は風が強いのか、雲の流れが早い。全てを包むように、2月初旬の午後の光が静かである。

店内にはブラームスだかモーツアルトだが、吉田が知らない音楽が低く流れている。

吉田は自分が場違いな所に座っている事がよく判る。

しかし吉田は、コーヒーを口に運びながら、店の一番奥のテーブルから注意を逸らさない。

半分ほど陽が差し込んでいるテーブルの陰に、モスグリーンのカーデガンをゆったりと羽織った女がいる。女は、一人ではなく、黒いスーツ姿の男と一緒にいる。

吉田は商売柄、店の従業員がそのテーブルというか、女に対して、非常に気を使っているのが判る。

何気ない動作、目の配り、話をする時の身体の姿勢、それらは全てその女を意識している。

誰だ？

女は見たところ二十歳台半ばの、まだ女子大生といっても通用しそうな顔立ちだが、その表情が塑像のように硬い。その硬い表情を、肩まで垂らした黒髪が大きなウェーブを描いて引き立てさせている。対座している男が何やら用紙を見せて説明しているのだが、本人は海を見ながら、時折ティーカップを桜色の口紅が引いてある口で、掬うようにして飲んでいる。

すげえ美人だな

大きな植物の葉陰から、吉田は観察を続けた。捜査畑一筋の、吉田の神経が力リ力リと引つかかる。

誰だろう？

やがて話が終わったのか、黒いスーツ姿の男が立ち上がり、鞆を両手で前に揃えて女に頭を下げテールを離れた。

吉田の脇を通るとき、吉田はその男の顔を見た。丸顔で頭が禿げているが、人の良さが顔に出ている男だった。

更に十分ほどして女が立ち、やはりこちらに歩いて来る。帰る心算のようだ。そして吉田の脇を通り過ぎて行くと、かすかなローズ系の香水の残り香が吉田の鼻先を掠めた。

吉田は一呼吸おいて、店を出て行ったであろう女の後姿を見ようとドアに向かって振り向いた。

すると女はドアの所で、吉田が振り向くのが判っていたかのように吉田を見ており、その吉田に向かって、憐れむように微笑んだ。

吉田は、理由もなくカァーツと血が頭に上った。

「待て！」

と、叫びたくなるような、そんな何かを残したまま、女は身を翻して出て行った。

しばらくして血が鎮まってから、吉田は店の責任者に自分が刑事である事を告げ、型通りの質問をした。白壁の写真を見せたりもしたが、何の収穫もなかった。

吉田がデジカメで撮ったマグカップの受像部分を見せて、これを知っているかと聞くとその責任者は、それは二年前の開店祝いの来客に渡した物で、二千個用意した物の内の一個であろうと言う。

吉田はがっかりした。

「ところで、先ほどまであそこにいた女は誰だ？」

「奥様のことですか？」

「名前は？」

「九品寺裕子様と仰いますが・・・？」

「九品寺？・・・聞いたことがあるな」

「はい、このオーナーは九品寺孝蔵様のご長男である泰蔵様と仰
いまして・・・」

「ああ、それなら聞いた事がある」

横浜の九品寺といえ、明治初めから続くこの辺りの巨大資産家と
して、今でもマスコミに取り上げられる事がある。

「で、先ほどは男がいたようだが、あれは何？」

「奥様のお友達が土地を売りたいとかで、その相談だと思います」

不動産屋か

しかし、吉田はムカツとしている自分が判る。

貧乏人を馬鹿にしゃがって！

自分は五十二歳になるというのに、未だ賃貸マンションに家族四人
暮らしてある。吉田の人生で、不動産を買うとか売るとかの話なん
て、親が死んだ時くらいしか話題に上らなかった。それが、二十歳
そこそこで売るとか買うとかやっている。

馬鹿野郎！おととい来やがれ！

そうして吉田は何の収穫もなく、領収書だけを持って、夕方帰庁し
た。

一月最終日、三十一日の事だった。

第1章 その4 すし鉄

井原の家の近くにある西新井大師の達磨供養が終わって、今日は既
に二月五日月曜日である。明日は堀井省二郎の、第一回の拘留期限
が切れる日である。

金津検事の所へ堀井の再拘留の申請手続き書類を提出しなければな
らないが

吉田がやるだろう

と、佐橋は思っている。

午前中に雪をちらつかせた雲は、午後になって青空を垣間見せたが、四時を過ぎる頃からまた空一面にどんよりと張り出して雪をちらつかせている。

予報では雪という事だったが、積もるわけでもなく白い物をちらちらさせているこんな日が、一番寒く感じられる。

佐橋と見坊は狛江の寿司屋「すし鉄」のカウンターに座って、店の主人が来るのを待っている。

先日二日の金曜日にガソリンスタンドから発見されたスコップについて、スタンドの者から調書を取っていた時、この寿司屋が浮かんだのである。

最初から「すし鉄」という固有名詞が判ったわけではなく

「さあ、堀井さんが捨てたのはとにかく折詰めだったですよ。そうですねえ、あの大きさは恐らく一半でしょうね」

との店員の証言なのであった。

渋谷署から本庁を通じて都内全域の署へ捜査依頼が回され、各派出所などから写真を片手にした警官が付近の寿司屋を訪ね歩き「すし鉄」が特定された。が、店の主人は留守だった。

「北海道へしゃけ釣りに行ってるんです。日曜には帰って来るって言ってましたから、月曜日の夜には店に来ると思いますけど・・・」

という店員でもある息子がそう言うので、携帯で確認を取ったところ「月曜日のお昼には羽田に着くよ。まあどんなに遅くっても四時には店にいるから」

という事なので来店しているのだが、雪のため女満別空港の発進が遅れてしまってまだ店に姿が見えない。

大きな湯飲み茶碗にいれたお茶を一口ですすって

「堀井も頑強ですね」

と見坊が言う。

堀井省二郎は二日前から完全な黙秘状態になっている。

「そつだな」

そう答えながら、佐橋はまったく別の事を考えている。

西岡の事だった。

西岡は堀井が逮捕された二十七日の翌日と翌々日にわたって、二度の調書を取って以来連絡が途絶していた。しかも住居はもぬけの殻。怪しいと思い、佐橋は独断で法務省査証課へ調査依頼を出したのだが、その報告書が今朝届いた。

西岡為三は台湾へ出国していた。日付は堀井逮捕後六日経った二月一日になっている。

逃げたか？

佐橋は事件本部の捜査方針に反するのだが、どうしても西岡が気になって仕方がない。

佐橋は知らないのである。二月一日とは、吉田が横浜まで車を走らせた拳句、二千百円の領収書を井原に見せて渋い顔をされた翌日である事を・・・

佐橋はついでに日産グロリアの事を思う。

堀井の言うグロリアを調べたところ、持ち主は浅井修一、こと白壁貢であることが判明。しかし一月二十九日月曜日、何者かによって廃車手続きがなされていた。

「一日に何人対応すると思います。覚えていませんよ」

それが陸運局の若者の返事だった。

仕方なく廃車手続申請用紙を証拠物件として預かり、鑑識に指紋の検出を頼んであるが、そこから検出される指紋からは恐らく何も判らないだろうと佐橋は思っている。

「眼鏡の男って、誰なんだろう？」

と、佐橋は独り言のようにして見坊に向かってつぶやいた。

「理香の言う偽刑事ですかあ・・・判りませんねえ。写真集と詩集、それに鬼押出しの写真ですよ」

「不思議だ、白壁と西岡の接点がどうやっても現れない。西岡の調書には尼崎時代の友人という事になっているが、大阪府警からの報告では白壁は平成七年一月十五日に阪奈製鋼の尼崎社宅を出奔して

いる」

「七年前ですね」

「しかしその年三月に西岡は宮城刑務所を出所した。という事は、白壁は尼崎から尼崎に出奔したのか？」

「一月十七日が阪神の震災ですね」

「そして次に白壁は、五年前の平成九年二月に浅井修一という名前で名東荘を借りるわけだ・・・二年間の空白がある」

見坊がくすつと笑ったので佐橋が見坊を振り向くと、にやついた顔をしていた見坊が真顔に戻りながら

「空白の二年間ですか・・・」

と言ってから、また顔を綻ばせ

「いや、何か格好いいと思って・・・すみません」
と言う。

「・・・？」

佐橋は見坊の精神の在り方を少し考える。そして言った。

「浅井修一というのは実在の人物だぜ。長野の北安曇郡の出自だが、この人物についても不明だ」

「廃村になった村を出てから十五年、音信不通になってから十一年、板橋区に住民票が移ってから五年、そして今年で四十三歳になるんですよね」

「金縁眼鏡の男かとも思うが、理香が言う年齢とは十歳ほどの開きがある」

佐橋はこの事件に登場する人物を考えていると、時として薄気味悪くなるのだった。

「いつもこいつも、尻切れトンボのような奴ばかりだ糸を手繰っていくと、何処かでぶつとりとされる。」

「堀井は実在感があるなあ」

「はあー？」

「いや、何でもない」

「すし鉄」の主人が女将と一緒に店に現れたのは六時半だった。

「いやあ、ひでえ雪になっちまってー」

と佐橋に向かって言い訳のように言たあとで

「おい、店をもっと熱くしやがれ」

と店の奥に向かって大声を出した。そして佐橋の後ろの椅子に腰をかけた。癖の強い主人らしかった。

その主人が、西岡の写真を見せながらの佐橋の問いに

「声の低い、そうそう、顎に傷のある男だろう。日付もはっきり覚えてるよ」

と、もったいぶった物腰で言う。

一月二十三日の夜、十時過ぎだったと言う。

「よく覚えてるよ。店が満席でね、しょうがなく折りにして貰ったんでさあ」

堀井の写真を見せると、この方は覚えていないと言う。

「満席だったからね。傷の男が入り口のレジの所にいてさ、もう一人の黒っぽいスーツの男がその横の陰にいたんだ。顔も見たかも知れないけど、忙しくてさ、覚えていないよ」

しかし傷の男が何度か堀井さんと呼んでいて、それは記憶にあると言う。そればかりか、酔って苦しいと言ってネクタイを外した、と言う。

「ネクタイを？」

「ああ、イギリスの国旗みたいなネクタイだった」

顔は見なかったがネクタイは見たわけだ、と佐橋はうなずき、その後で、明日調書を作成したいので署のほうへ来てもらえるかと念を押し、淡々とその打ち合わせを終えた。

帰る間際に見坊が主人に尋ねた。

「店が満席になることは、よくある事なのかい？」

「十二月とかはありますがね、この時期の満席なんて初めてですね」

「初めて？」

「二十年近くなるけど、初めてだね。まあ、予約の団体客だったからね。名古屋のスポーツ用品店が閉店するんで、それのお礼だとか言ってたなあ。だから日付を覚えていたのさあね」

客のいない店内に点け放されているテレビの画面には、六年ぶりの大雪を伝えるテロップが流れている。

誰も気が付かないようだった。

第1章 その5 公判期日

二月七日に行われた白壁貢殺人事件の第八回会議は冒頭から意見が割れた。

今日は多田警視が会議に参加していなかったが、他班から応援に来ている蓮見刑事と北刑事が会議に参加している。蓮見は佐橋と同期で年齢も同じ三十四歳であるが、北は二人より六年先輩である。

「どうしろっていうんだ？」

というのが、全ての物証、証言は堀井が犯人である事を示している、という吉田を筆頭にした派であり

「調べようというんじゃないか」

というのが、西岡の言動、それと前後して起こっている不可解な出来事には作為の臭いがする、という意見の佐橋を中心としたグループである。

議長席に座っている井原は、最近以前にもまして尖鋭化してきたそんな両者の意見をぼんやり聞きながら、三日前の金津検事の一言を思い出していた。

「四月には定期異動があるなあ。この事件もそれまでには送検を完了しないとなあ、君」

金津検事は書き物をしながら何気ない素振りで言ったが、井原にはずしんと堪えるものがあつた。

多田警視の事である。

多田警視は今年五十六歳、定年まであと六年だがその温厚過ぎる性

格が警察官僚としては不利に働いて、出世の競争から途中下車させられた人である。実践部隊の長はここが最後であろうが、それを花道に今度の定期異動で本庁の部長に昇格し、警視正となる内示があった事を本人から先日それとなく耳打ちされた。最後の肩書きには違いないが、退官後の再就職の時にはそれがものをいう事もあるだろう。

そういう折の金津検事の一言である。

事件を複雑にするな、と、釘を刺されたわけであった。

さて、会議である。

普通、事件発生から一ト月、犯人逮捕から二週間もすれば捜査陣に基本的な面での意見対立は表面化しない。例えあったにしても、縦割りがはつきりしている警察内部では上司の判断に表向きであれ全員が従う。また、上司も意見対立が表面化するような愚は冒さない。表面化すれば、最終的には誰かが傷つくのだ。

その点、この事件に対して井原は明確な断を下していない。どこか流れのまま、という趣がある。だから今日の議題である被疑者への証拠物件の入手経路、という問題はそっちのけで吉田と佐橋の対立が火を噴いている。

「しかし佐橋君、君の方が調べたわけだろう」

と、十八歳年下の佐橋に吉田が言っているのは、白壁貢と浅井修一とが同一人物であった事の確認である。

名東荘と車を調べ始めた頃から、堀井が言う眼鏡の男であり理香が言う偽刑事の男が本当の浅井修一かと思われたのだが、交通課から届いた浅井修一の免許証の写しには、白壁の写真が貼られていたのである。

つまり、以前のある時期、白壁は二つの本名を使い分けていた事になる。資料によるとこういう他人の住民票、というか存在を買うつという形の絡んだ事件は昭和五十年代後半をピークに、緩やかに減少しているが根強い需要がある。

「白壁が浅井修一になりすましており、理香と暮らすのと前後してまた白壁に戻った、というのはその通りでしょう。しかし吉田さん、それが堀井犯人の決め手とはなりませんよ」

「当たり前だ！」

吉田は大きな声を出している。

「いいかい佐橋君、僕も一時は君と同じ意見になりかけた。堀井のいう事は真実かも知れないと思い、その裏を取るために横浜まで行った。しかし、堀井は嘘を言っている」

「じゃあ、西岡が五千万円を貸したと言っているのをどう思います」
「・・・」

「五千万円貸したが借用書はない、と言うんですよ。おかしいと思いませんか？」

「親しい仲間だったらそういう事もあるさ。いいかい、じゃあ理香も知らない五千万円の事を、何故西岡が知っていたんだ？貸金庫にある事まで知っていたんだぜ」

「堀井は自分が教えたと言っています」

「判った。こう言おう。西岡は五千万円を堀井が持っている事を知っていた。何処にあるんだと西岡に指摘されて、堀井は貸金庫に保管がしてある事を教えたんだな」

「・・・」

「自分が貸したから、知っていたんだ。」

「・・・では、電話の履歴はどう説明します。西岡の携帯は二十二日の日曜日に都内の中央区で購入されています。彼が出現する前日です。それ以前は白壁の携帯にも、堀井の携帯にも西岡との接点がないんです」

「・・・」

「堀井が覚えていた鎌倉の電話番号の履歴からも何も出てきません。あの電話は名東荘と同じで、この半年に限っては全く使われていないのです。岐阜の電話は、これも一応、理香や堀井が写真の裏に書いてあったと主張しますので調べたのですが、既に一年前に使用中

止になっていました。名義人は塚本という人物ですが、自分の名前が勝手に使われていたと言って驚いているようです。本当に使用していた人間は判っておりません」

「・・・」

「設置場所は鎌倉も岐阜も名東荘と同じで、安アパートです。賃借人は全て浅井修一名義。使用目的は不明ですが、何らかの連絡用に使用したと思われますが、詳しくは判りません」

「判った。しかしそれが、殺人事件とどういう関係があるというんだ！」

先刻から吉田と佐橋が議論と言うより、言い合いをし、他の刑事は苦虫を噛み潰したような顔で、各々テーブルに広げた手帳に覚書をしている。

「天麩羅屋を出た後は記憶がない、西岡に何か飲まされた、と堀井は言うが、じゃあすし鉄の事をどう説明する」

「親父も女将も服装や持っていた封筒は見た、が、顔ははっきり覚えがないと証言しています」

「背丈や服装から堀井に間違いがない、とも証言している」

「しかし大きな人間が小さい人間に変装は出来ませんが、反対なら出来ます」

「佐橋君、そこまで言ったら屁理屈だぞ！」

「・・・」

二人の喧嘩腰に近いやり取り聞いて、目の前でボールペンを弄んでいた井上が

「隠してあったスコップが出てきたら、堀井の奴、黙秘しちまったなあ。やはり吉田さんの言うように、ここまで来たら証拠固め一本に絞るのが筋だろう」

と言った。

二人の議論に水を差した格好だが、やはりそこは歳だった。

吉田が仁丹の箱を握り潰しながら

「佐橋君、堀井を犯人でないと考えるには、アリバイの面からも無

理があるだろう」

と言った。

堀井の動きは十二日の夜から十六日の朝までに確認の取れたものとしては、確かに二つしかない。十三日の夕方、近くのコンビニに顔を見せた後、同じ店に十五日の朝立ち寄った、という二つの事実だけであとは何処にも何の痕跡もない。間隔が空きすぎていて、アリバイがないのである。

その点については井原もくどいほどの念を入れようで、捜査を指揮した。しかしアリバイはなく、反対に堀井の兄や婚約者から

「電話をしても出ませんでした。メールの返事もありませんでした」という証言を得ている。

堀井はアメリカの公認会計士資格を取るための勉強をしていたと言いつ、そのために一切連絡を絶とうと携帯やパソコンは事務所に置いてきた、固定電話はコードを外していた、と言いつが言い訳の感は拭えない。

重苦しい雰囲気の中でみんなが黙り込んでいると、吸いかけの煙草を灰皿に置いて藤原が思い切った口調で言った。

「私、少し意見があるんですが宜しいでしょうか？」

そして誰も返事をせず、全員が自分を見ているのを確認すると、立ち上がって言い始めた。

「課長から聞いたんですが、去年の八月に、盆の時ですが、白壁が郷里に帰った時、弟に結婚しようと思つていると言つたそうです。」

私はそこに重大な問題点があると思うんです」

全員、とんでもない事を言い始めた藤原に顔を向けている。

「なにか？」

と井原が水を向けると、藤原は顔を赤くしながら続けた。

「ええー」あのう、尼崎東署から転送されて来た白壁の戸籍を見ますと、明子という配偶者がいる事になっています。平成七年一月以降行方不明だそうです、白壁が結婚しようと思つた、という事はすなわち安藤理香を籍に入れる、式を挙げるのではなく入籍させる、

という事だと思つのです。すでに一緒に住んでいるわけですし理香の親族とも行き来していますから、そういう事になります」

全員、それがどうしたんだ、と言う顔をして聞いている。

「しかし、戸籍には明子がいる。という事は明子を除籍しなくてはならない。つまり、白壁は八月に大分に帰省して、その帰りに戸籍の手続きのためにも、あるいは挨拶のためにも明子の実家の岡山か、少なくとも尼崎に寄つたはずです」

今度は全員、ほうーという顔をした。

「それが何故重大な問題なんだい？」

「はい、白壁の弟である英二は、白壁が帰省した時は普通の状態だった、と言いましたが、理香は大分から帰つて来てから白壁の状態が一変し、沈みがちで暗い洞穴を見ているような感じになった、と言っています」

「・・・？」

「何かあつたんじゃないでしょうか？ 岡山か尼崎で・・・」
全員、それぞれ藤原の言う事を反芻しているのか、手が止まっている。

しかし、しばらくして吉田がうんざりした口調で

「何かあつたかも知れん。課長の許可をもらつて調べてみるんだな」と言つた。そして話題をはぐらかすように井原に向かつて

「課長、金津検事から公判に必要な書類を早く届けるよう、昨夜催促がありましたね。検事の腹では公判の期日が決まっているんじゃないませんかね」

と言つた。

「・・・そうだろうね」

井原は吉田がきつちりと先の状況を掴んでいることに驚いた。しかしそういう事に目敏い吉田がやりきれない。

「公判検事は松田検事の予定だそうですから、松田検事の公判予定を見れば期日が大体判りますね」

吉田は、検事の腹が固まつている以上、それに合わせた捜査をしな

ければならない事を言っているのである。

「吉田君、そういう事は僕が考えるから、君は捜査の方をしつかり頼むよ」

井原は吉田を一瞥してから冷えたお茶をがぶりと飲んで、藤原に自身自身の判断で尼崎と岡山の捜査をするように言ってから

「井上君、スコップと睡剤、それに青酸カリの入手経路の解明は期待できそうかい？」

と尋ねた。

「ええ、みなさんにお渡ししてあるプリントを見て頂くと判りますますが、眠剤の方はパッケージに打たれている番号で追跡はある程度可能なんです。先日も神奈川県警から調剤薬局を回った結果報告が来ておりましたが、横浜市内の何処かであろうというだけです。しかし・・・」

その時吉田の眉がぴくりと動いた。

横浜？

フリージアにいた女が吉田の神経を刺激する。

俺とした事が！

吉田は鮮やかに自分を翻弄して歩き去った、背の高い女を思い出すと未だに頭に血が上り、臍を噛む思いがする。あの時、何故、一言自分は待てと言えなかったのか？ あの洗練された優雅な身ごなしに、自分の内の何かが何かに臆したのだ。

不甲斐ない！

吉田はポケットから新しい仁丹を取り出して、口に放り込んだ。

「・・・ですから三年間に都合二万七千個のK型というんですか、この型のスコップが生産され日本国内で販売されたわけです。地域や期間によって塗料や握り部分の材質などが変わっていますから、組み合わせによって地域の特定がある程度出来ると思われます。二・三日の間には塗料会社から報告が届きますから・・・」

井上の声がぼそぼそ聞こえている。

その日の夕刻、原宿駅前あるビルの二階レストランで一組の男女が向かい合っていた。

暮れなずむ明治神宮の森が、窓から見えている。
夕焼けの景色の中、ビルのシルエットが美しい。

「今日も駄目だっただろう？」

と、柴垣が言った。

「ええ」

と、万里子が頷く。

「山浦弁護士がね、まだ当分接見禁止の見込みだと言ってたからね。証拠隠滅の恐れがあるんそうだ。馬鹿馬鹿しい」

「ええ、私も聞いてはいるんですけど・・・」

「だったら諦めるんだな。解除になれば、山浦弁護士の方から何か言ってくるよ。それにね万理ちゃん、あそこは熱意とか誠意とかじやあ動いてくれないんだ。そういうものは通じない。万理ちゃんだつてぶたれたつて言っただじゃない」

「・・・わたし、ぶたれたつて言っただんですけど、本当は頬を触られただけなんです」

「ぶつような仕草で触ったんだろう？　そういうのはやはりぶつて言っただよ。精神的なショックは一緒だ」

と言ってから

「くそっ」

と呟くと

「大変でしたわね」

と万里子が言った。

省二郎が逮捕された翌日、出張先の新潟から急ぎ帰宅すると、柴垣を待っていたのは二人の刑事だった。佐橋、と名乗った上官らしい刑事は柴垣に任意同行を求め、渋谷署の取調室の机に座るや

「お前、お金は何処へやった！」

と、机を叩いて言った。

「お金・・・知りませんよ」

そのまま留置場に二日間止められ、最後は省二郎と自分しか知らない事実を突きつけられて

「堀井がお前を庇って自供しているんだ。これ以上知らないと言うなら覚悟しろ。共犯として起訴し徹底的に叩くぞ！」

と、蛇の目のような顔をした佐橋に怒鳴られたのだった。

柴垣は省二郎が喋ってしまったという事は、もう隠す必要がない事なのだろうと思った。

結局、五千万円の現金はスイミングクラブのロッカーに隠してあったアタツシケースの中である事を、省二郎の自供通り追認した。

「何故隠していた？」

「何故？ 犯人に盗られないようにしていたんじゃないか！」

「じゃあ犯人は誰だ？」

「西岡たちだ」

「・・・たちって誰だ」

「それが判つてたら隠すなんて事するか！ お前たちこそ西岡を早く捕まえろ！」

そんなやり取りの後で放免された。

万里子は言う。

「でもテレビや新聞なんかに柴垣さんの名前が出ていたでしょう。友人の柴垣敏雄さん宅に潜んでいたとかって」 大丈夫ですの？」

「まあ、大丈夫だろう。家内はああ見えても芯は強いからね。僕の名前が載っている新聞記事を赤枠で囲って集めてるくらいだからね。それに、来月は転勤だ」

「・・・転勤」

今日の万里子はグレーの厚手のセーターに、小柄な身体を蓑虫のように包んでいる。流行なのか、セーターがずいぶん大きい。

「転勤というと聞こえは良いけど、本当は左遷なんでしょう？」

「おお、はつきり言うねえ。まあ左遷とまではいかないけど、会社も世間体があるしね。それに会社も僕を辞めさせたくはないよ。契約件数も売上高もこの二年間トップだからな。将来の営業部長だぜ、万理ちゃん」

柴垣はこんなところで淋しい気炎を上げた。

「どちらへ？」

「仙台か札幌だろうな。急な事なんでまだ決まっていけないんだ」

柴垣はそう言つて時計を見、まだ時間が充分あるのを確かめた。

「僕はもう一杯コーヒーをもらうけど、万理ちゃんは？」

「わたし、チョコレートパフェ頂こうかな」

万里子は冷たい風の吹いている窓の外に目をやった。明治神宮の森全体が、うねるようにして揺れている。

柴垣がコーヒーに砂糖を入れるため、左手でシュガースティックを取ろうと手を伸ばした時、万里子はその手の甲にバンドエイドが二本も貼られているのを見つけた。

怪訝な顔をする万里子に

「これかい？」

と柴垣は言つて視線を落とし

「馬鹿な猫なんだ」

と首を振った。

「・・・？」

「何でもない」

と柴垣が笑つと、万里子が言った。

「わたし、先日省二郎さんのお母さんにお会いしたんです」

「知ってるよ。お袋さんから聞いたんだ。大雪の降った日だろう」

「ええ、省二郎さんに差し入れの本を持って行った時に、ばったりと」

「本？ あいつが本なんて読むか？」

「ひどい、そりゃあ読めますよ・・・現代数学っていう本でしたけど、回転群と球関数とか、モジュラーが何とかなんて書いてありま

したよ」

「・・・そういうものは、本とは言わないんだ。まあ本の話はいいけど・・・お袋さん、驚いていたよ。女友達がいたなんて知らなかったって」

「・・・」

「罪な奴だ、こんな時にこんな事になるなんてー」

「・・・でも、仕方ないから・・・」

と、万里子は何気なさ装っているのか、運ばれて来たチョコレートパフェの生クリームを、スプーンで掬って美味しそうに口に運んだ。

「仕方ないでは済まないよ」

「・・・」

「何ヶ月になるんだっけ？」

「もう三ヶ月なんです」

「どうするか、いつかは決めなくちゃならない訳だから、遅いか早いかの違いだけと言えばそうなんだけど・・・」

「・・・」

柴垣は黙ったままコーヒーを飲んだ。

万里子も何も言わずチョコレートパフェを食べた。

しばらくすると柴垣が呟いた。

「僕がなあ・・・」

「えっ」

「いやね、僕が新潟に出張したもんだから、黒に電話を入れたんだ。省介が困っているって。まさか黒が省介の居場所を警視庁に連絡するとは思っていなかったんだ」

「でも、黒田さんだって警察官なんだし、相談されて困ったんじゃないありません？指名手配されている人間の居場所を知っていて、報告しなかったという事が後で判ったらー　それも、殺人犯ですものね」

「まあ、懲戒免職だろうね」

「でしょう」

「僕が迂闊だった。学生時代の友人というのは仲間意識が強くてね。甘えちゃったんだな」

柴垣は一息にコーヒを飲み干した。

「省介が身の回りの全ての連絡を断って僕の所にいた、というのが今の僕にはよく判るよ。あいつが相手にしていた人間たちは犯罪のプロじゃないかなー 鍛え抜かれた・・・」

「・・・」

「省介は言ってたよ、高いレベルで攻撃して来るって。もし本当に西岡たちが省介を陥れたとするなら、君も僕も危ない」

「・・・」

「彼らは省介に罪をなすり付けて事足りりとしているだろうか？・・・そうとは思えない。彼らはきつと君にも僕にも監視の目を光らせているはずだ。下手な動きをすれば、きつと何か悪い事が起こるに違いない。きつとだ」

「・・・」

「彼らとの戦いは始まったばかりなんだ・・・だけど、万理ちゃん は心配しないでいい。僕が守るからね、約束なんだ」

そのあと柴垣は有本会計事務所の現状を話し

「驚いたね、人柄なんだろうなあ。クライアントは心配する人ばかりで、止める人はいないそうだ」

「だけど、差し出がましいとは思ったが」

「僕の得意先の人に事情を説明して、何件か紹介したよ」

と言った。そして時計を見て立ち上がる。

「さ、万理ちゃん、行こうか」

「ええ・・・」

万里子は中腰になりながら、躊躇いを見せた。

「大丈夫かい？」

「ええ、ごめんなさい。自分から言っておきながら・・・」

「心配するなよ。腕の確かな医者なんだから。高校の時から友人

なんだ」

と言って、すたすたとレジの方へ歩いていく。万里子もそれに続く。外に出ると風が強かった。寒い。

万里子は人ごみの中を、柴垣の影に隠れるようにして歩いた。二度、三度と門を曲がると人影が途切れがちになった。

私が決めた事なんだ。私から柴垣さんに頼んだ事なんだ。しようのない事なんだ。ここまで来て、他にどんな方法があるというのだろうか？

万里子は歩きながら涙が出てくるのを感じる。

このまま放っておけない。もう三ヶ月だし、これ以上許される時間の余裕はない。誰にも責任のない事なんだ

万里子は涙を拭う。

だけど、省二郎さんは何て言うだろう？ 許してくれるだろうか？

柴垣が立ち止まると、柴垣の肩越しに「飯田産婦人科病院」と赤で書かれた看板がライトに照らし出されている。

「万理ちゃん・・・」

と、柴垣が自分を見ている。

万里子は柴垣の胸に顔を沈めて、ひっそりと泣いた。

泣きながら

「わたし・・・わたし・・・」

と、呟いた。

第1章 その6 西新井太師

万里子が泣いているその時刻、八時半になろうとしていた時だが、佐橋はコートの襟を立てて西新井町にある井原の家の玄関前に立っていた。

今日の会議のあと、井原は疲れたと言って仕事途中で帰ってしまっ

た。別に無断で帰ったわけでもなく、またそういう事が今までに絶無かと言えばそうでもないので、二十四時間体制のような今の状態では問題のある行動ともいえない。

しかし「玉」を抱えている現時点では、見方によっては非常識に映る可能性はある。

佐橋は驚く井原の妻の多加美に案内されて、応接室の椅子に座った。多加美はストーブに火をつけ、すぐ暖かくなるでしょうと言って出て行った。

石油ストーブの臭いが立ち込める。

佐橋は個人用の携帯を取り出して家にメールを送った。遅くなるかも知れない。息を大きく吸い込んで壁に掲げてある扁額を見た。

雁書不届 陽射斜也

揮毫が多田正一となっている。

俺は何をしに来たんだろう

一瞬そんな思いが頭を横切る。

佐橋が曖昧な心を持って余していると

「入るぞ」

と言って、井原が姿を見せた。

このところずっと愛用している濃いグリーンのトックリセーターを着ている。

「どうした？」

「課長、お休みのところ、本当に申し訳ありません」

「それが判っているなら来るなよ」

と井原は笑いながら言って背を伸ばし、ドアを少し開けて

「多加美、お茶と煙草を持ってきてくれ」

と奥に向かって言ってから、脚を組んだ。

「課長、私どうしても申し上げたい事があるんです」

「署では言えないような事なのかね」

「いや、そういう訳ではないんですが・・・」

佐橋はそう言って目を伏せ、何か考え事をしているようだった。

沈黙が長い――

口を切ったのは井原だった。

「君の言わんとする事は判る気がする」

「・・・そうでしょうか？」

「西岡の線を何故追わないか、という事じゃあないのかな」

「はあ、それはそうなんですが・・・」

と、佐橋が歯切れの悪い言い方をしているとドアが開き、何もありませんが、というような事を言って、多加美がミルクティーとケーキを並べた。

多加美が出て行くのを確認してから、佐橋は井原の目を見て改まった口調で言った。

「課長、私は課長を信頼しております」

「どうしたんだね？」

「今回の捜査に関して、課長の真意が知りたいんです」

「・・・」

「いつもの課長のような指揮振りが感得出来ません。課長は以前、捜査方法にクレームをつけた吉田先輩にこう言いました。私は優柔不断ではない、と・・・」

「・・・」

「決断を下すまでは足元も見る。後ろも振り向けば横も見る。しかし決断を下してからは見えない、と・・・」

「それがどうかしたかね。今でも私はそれで良いと思っているし、権力を付託された警察官とは、そうであらねばならないと常々思っている。また、そうしている心算だが」

「私はあの言葉を聞いてから思い当たる事が多々あり、それを恃みとして捜査に当たっております。・・・しかし課長」

佐橋はそう言ってから、身を乗り出すようにして言った。

「今回の事件に対して、課長は決断を下しておりません。はっきりと言葉に出して方向を示した事ありません。私の思い過ごしとは思えませんが・・・何故でしょうか？」

井原は忸怩たるものを感じる。

「んん・・・私からどんな言葉を引き出そうとしているのかね」

「いえ、私は課長を信頼しております。私は課長の真意が知りたいんです」

「真意と君は言うが、私が何か隠し事をしていても思っているのかい。もし何か裏に意味があるような事をしていると皆に思われているなら、私の不徳とする事だ。素直に反省しなければならんな」

「課長、多田警視が今期の移動で本庁へ栄転するとは本当のことですか？」

「君は何を言っているんだ」

「署内のうわさです。警視は退職の花道として警視正になるという事です。同期の人たちに比べて出世が遅すぎるので、今回が最後のチャンスだそうです」

「ま、何処から出たうわさか知らんが、うわさはうわさだし例えそうであれ、また左遷であつてもだ、こと捜査に関しての影響はないよ」

「うわさには続きがあります」

「・・・」

「白壁貢殺人事件は最初、本庁の遠藤警視が受け持つ事になっていった。しかし、これは極めて単純な事件であり、しかも犯人が事件発生の段階でほぼ判っていた。であるから栄転する多田警視に華を添えようという事になった。ところがマスコミにも派手に報道した後から、捜査の方針次第では雲行きが怪しくなり兼ねなくなった」

「佐橋君！うわさの内は良い。しかし私に向かって堂々と言えば、それはもううわさではなくなる！」

井原は声を荒げた。

「それが判らん君でもあるまい。それにだ、うわさに事藉りて自分の意見を言うという事は、場合によっては卑怯だという事を覚えておけ」

「・・・」

「私は君を買っている。今の課で一番信頼が措けるのは君だと思っている。それは君も感じているだろう。しかし、それに甘えるというのはいかがでしょうか。君も大人ならば純粹培養したような捜査などというものは、余ほどの舜晔を望む以外あるとは思っていない。現に捜査の第一線にいるんだ。被疑者に対しては逮捕した以上、必要以上の呵責な取調べが行われているのを常に見ているはずだ」

「……」

佐橋はしばし瞑目していたが、井原の言葉を遮るように

「課長」

と、静かに言った。

「何だね」

「一月二十二日の事を覚えておられますか？」

「二十二日……」

「はい、西岡が初めて課長の前に姿を現した日です」

「……」

ティーカップを口に運ぼうとしていた井原の手が、ぴたりと止まる。あの日は西岡が超人的な動きをした日です。証拠として採用されとは思えない、あの日に関する資料、調書だけでも二十通は超えております。が、当然ながら課長の口述調書はありません」

「……」

井原は黙って足を組み替え、ティーカップを元に戻し、新しいマイルドセブンに火を点けた。

「何が言いたい」

井原は佐橋の顔に目を当てた。

「それは課長が一番知っておられると思いますが……」

佐橋も負けずに井原の顔を見詰めた。

二人の間に、冷たい火花が弾ける。

井原は不意に視線を落とし、ため息を二度ほどしてから

「さすが、君だな」

と言った。

「いつから気付いていた？」

「一月二十二日の西岡の行動を追っている時です。西岡は課

長に初対面の時、既に安藤理香と様ざまな話を話し合っている、という具合に話をしたと、当初課長はそう言っていた記憶があります。白壁が行方不明になっているのは殺されたからではないか？ という事を安藤理香と話し合っていると言ったのに、安藤理香は当日の夜八時過ぎに初めて西岡から電話があつた、と言っているわけです。それまでは西岡ののに字も知らなかったと――」

「・・・」

「明らかに西岡が絵を描いています。事実を作為したのです。二十二日の日、西岡は二十日の日に堀井から様ざまな事を聞き出して、それを織り交ぜて課長に話をしたのです。堀井から聞いた事を、さも安藤理香から聞いたようにして課長に話をしたんです」

「そうか、君がそこまで腹を割るなら、私も私の持っている基本的な認識を言おう。しかし、お互いここだけの事にして他言は無用だ。いいね」

「一切口外しません。信頼して頂いて結構です」

井原は大きく息を吸った。そして言った。

「まずこの事件は、思っている以上に複雑だ」

「・・・」

「この事件を考えるに当たって重要なことは、この事件には二つの流れがあるのではないか、という事だ。判りやすく言えば、二つの事件が絡み合っているのではないか、という事だ」

「二つのですか？」

「そう、私の考えでは、一つは堀井が犯人であるところの白壁殺害事件。そしてもう一つは・・・」

「もう一つ・・・？」

「これから起こる事件」

「えっ」

佐橋はフォークから危つく落ちそうになったケーキを手で受ける仕

草をした。

「そうとしか思えないじゃないか」

「・・・」

「しかし私たちが今やらねばならない事は白壁事件の解決だ。それ一本に絞らなければならない、と私は思っている。もう一本の流れは現段階では無視するより方法がないだろう。なんと言ってもまだ事件は起きていないのだからね」

「その、これから起きる事件とはどのような物でしょう？」

「判らないが、推測は出来る。私は問題はお金だと思っている」

「 お金」

「そう、お金だよ。白壁が残した現金は判っているだけで二億円近い。会社という含みを入れれば三億だろう。しかし、問題はそのお金じゃない」

井原は冷めたミルクティーにスプーンを入れてかき混ぜている。

「問題になるのは、隠されたお金じゃないかなあ」

「隠されたお金 ？」

「白壁は浅井に成り済まして何をやっていたんだろう？何かをしたんだ。そしてその何かを知っているのは、西岡と偽刑事の男だ。あるいはその他に一人二人いるかも知れないが、どちらにしろそのグループが存在するとすれば、彼らしか知らないお金が何処かにあるんだ。そのお金が必ず近い将来火を噴く」

「では白壁は彼らに・・・」

「いや、そう考えてはいけない！」

と、井原は強く打ち消し

「佐橋君、君は警察学校で何を習った。百の心証より一つの物証だよ。だからこそ二つの流れがあると思えないんだ。私も君の考えている事を幾度も考えた。しかしあの証拠物件の出方、種類は、作画的には出来ない」

井原はそう言いながら、ふと西岡と初対面の時、離人症のような奇妙な違和感があったが、あれは自分が西岡を量る以上に自分が西岡

に天秤に掛けられていたのだと思った。自分の内面の軽重を、動静を、西岡は不気味なほどの冷静さで見ていたのだ。

佐橋が喋っている。

「という事は、捜査に齟齬が生じても無視しろという事ですか？」

「とまでは言わん。がだ、その辺りの兼ね合いが必要な事件ではないかと思っている」

「・・・」

「先ほど君が指摘した二十二日の事でも、私はずっと気にしている。しかしその事を公表したところで何の解決にもならない」

「そうでしょうか？」

「今の状況では逆立ちしたって堀井の有罪は動かない。西岡に関する全ての調書を不採用にしたって、堀井の有罪は固い。もし、堀井の有罪が動く何かが、決定的ともでは言わなくとも、今の物的証拠に対抗できる何かがあれば、私も西岡を全力で追いたい」

「課長、ありがとうございます」

佐橋は突然そう言って頭を下げた。

「私も心証としては堀井はシロではないかと思った事もある。しかしここまで事態が切迫して来ている。有罪に出来ないならともかく、今更捜査方針を変えるわけにも行くまい」

伊原は苦渋を顔に浮かせて言った。

「私も吉田先輩の堀井の尋問に一度立ち会いましたが、堀井の態度は立派です。堀井の友人の柴垣、これは私が尋問しましたが、私の追及に対して柴垣は微動だに自分の心を動かしませんでした。ああいった連中はこういう強殺というような犯罪とは無縁の存在のような気がします」

そう言うってから何かを決断したのか

「課長、二日間休暇を下さい」

と言った。

青いワンピース（前書き）

ついに佐橋は休暇を取って白壁の過去を追う事になのだが・・・

青いワンピース

第2章 青いワンピース

第2章 その1 六甲嵐

平均時速二百十七キロで走るのぞみに、東京駅を朝六時十六分発の始発に乗った佐橋は七時五十七分には名古屋の駅の辺りだった。その名古屋の朝のいつもの出勤風景を佐橋は見ている。

一昨日、井原から二日間の休暇を与えられ、今、尼崎へ向かっているわけであった。

目的は白壁の過去に当然出てくるであろう西岡との接点である。それと見坊が見抜いたように昨年の八月に尼崎か岡山に姿を現したのではないか、というその事実である。

調べた限りでは白壁は尼崎にも岡山にもその姿を現していない。が、藤原がした捜査とは、捜査依頼を岡山の西大寺署と尼崎の西署に送付して、その返答をもらった、というだけの事なのである。当然、依頼を受けた署は通り一辺の事しかしていない。

そんな事もあって、佐橋は自分が行く必要を感じていたのだが、本部の捜査方針とは相容れないものがあり、休暇という非常手段に出たのである。

それにしてもよく許可を出してくれたものだと思う。井原は井原の立場で悩んでいる、という事をその一事でも痛切に判る気がする。列車に揺られながら佐橋は堀井の事を思う。

佐橋は西岡の先手、先手と立ち回った動きに一驚したが、堀井の行動には更に驚いた。堀井の裏取りをしていると、理由はどうあれ、西岡の動きを事前に読み、問題点を確実に捉えて動いた形跡がある。佐橋は堀井の、その的確さに驚いたが、もし西岡が犯人ならば堀井の行動は恐怖の対象であつたらう。

身柄を拘束されるという突発事がなければ、ことごとく西岡の痛点を衝いていた堀井の行動はどういう結末を迎えていたのだろう。

初動を西岡に握られ、主動を回復出来なかっただけ堀井の負けか

しかしこの場合、主動を握るとは即ち仕掛けた側という事になるわけだが、そうすると

堀井は西岡に謀られたわけか？

つつい、そういう考えに陥ってしまう佐橋であった。

阪奈製鋼の尼崎工場は、堺にある本社工場に次ぐ規模を誇るだけあって、受付のある正門から事務所ビルまで百メートル近くも離れていた。

応接室に通されてしばらくすると、四十半ばの男が入って来て、自分が昨日電話で話した課長の水野です、と挨拶した。

「私では判らない事が多いでしょう」

だからこの間の刑事さんに会ってもらった佐野が来るから、彼から話を聞いてくれ、という事だった。佐野と聞いて、佐橋は先日送られてきた尼崎西署の調査報告書を思い出す。あの書類では、当時の白壁の上司だという事だった。

水野は要領よく、如才なく話した。

そして佐橋にお茶を勧め、先日も同じような用件で刑事が来たが、今回は白壁の私生活も知りたいという事なので、佐野が白壁の元同僚も連れて来るはずだと、やはり要領よく話した。

少し話が途切れると、窓から見える六甲山を指して「中腹に白い建物が見えるでしょう。あれが当社の保養所なんです」と言ったりした。

しかし佐橋には六甲山を覆っている白い雪が鮮やかな印象をしているだけで、自慢の保養所が何処なのか判らなかった。

六甲山を見ていると、後ろの方でドアが開く音がして、振り返ると二人の男が帽子を手に持って、頭を下げて入って来た。

ネクタイをした水野課長と違って、ポロシャツの上に作業衣を着けた姿であったが、上場企業の社員にふさわしい物腰で

「私が班長の佐野で、こちらが白壁君と同僚だった谷君です」と言った。

佐橋は机の上に白壁と西岡の写真を並べ、白壁が殺害された事を述べてから

「当時の彼の事が知りたいのですが・・・」
と言った。

二人は写真に目をやっていたが、ほとんど同時に顔を上げてから佐野が、私が知っているのは先日の刑事さんに話した通り、白壁君が夫婦で突然いなくなってしまったという事だけです。しかし、家庭的な事でしたら同じ家族寮に住んでいた谷君が詳しいでしょうと、谷の顔を見た。

谷は写真の一枚を指して

「これは白壁君や」

と言い、もう一人は知らないと言った。それから

「白壁君はややこしい事に巻き込まれてもって、もうわややったんですわ。ほんま、ああなったら可哀相なもんや」

と、語り始めたのだった。

平成六年十二月半ば、久方ぶりに雪の降った日であった。白壁が仕事を終えて帰宅すると、結婚して一年半になる妻の明子が、電気も点けずぽつんと六畳の居間に正座していた。

蒼い顔をしている明子に

「どうしたんだ？」

と声を掛けると、明子はわっと泣いた。

明子が言うには、今日勤め先の美容院を所用のために昼に終えて、国道二号線を右折し武庫之荘方面に向かっていた時、折からの雪のため車がスリップし、前で信号待ちをしていた車に追突したのである。

明子の車はカムリのセダンであつたが、相手の車は年式の古いスカイラインであり、改造車だった。中から降りてきた相手はまだ二十歳にもならないような少年が三人であつたが、どう見ても剃りを入れた暴走族風な少年たちである。

明子は瞬時、困惑した。

「姉ちゃん、氣いつけえや」

と言つたリーダー格の少年は自分の名を洞貝清仁と名乗り、明子の住所と電話番号を控えてから、修理費用はあとで請求するからと言つてそのまま行つてしまつた。

追突といつても大した事故ではなく、バンパーにも傷が付かないような、そんな軽微なものであつたので、ほつと胸をなで下ろし明子は明子で帰宅した。

四時ごろ洞貝から電話が入つた。

「あの後な、身体の具合が変なもんやから病院へ来たんや。そしたらな、三人とも入院せなあかんのやてー」

普通こういう事態になつた場合は最終的には金銭で解決する。具体的には保険会社が損害金を払い、加害者は被害者に対して幾らかの慰謝料を支払うという形で解決を見るわけである。

しかし白壁夫婦の場合、金銭の解決は難渋を極めた。今年十八になつたばかりの洞貝は揉め事自体を楽しんでいるところがあり、鬱屈した精神構造の持ち主であつた。

そればかりではない。洞貝は「瑠琵亜」という暴走族グループのリーダーであり、後で判つた事であるが暴力団「村井組」の構成員でもあつた。その暴走族のメンバーが、面白半分には昼夜の区別なく白壁の社宅の回りを走り回り、何度も白壁の家に押し寄せた。

最初白壁は警察に事情を話し、助けを求めた。

しかし警察は彼らに注意をしてもそれ以上の事はしなかつた。見解としては、事件は発生していないのだ。

そのうち事故から十日ほど経過した時であつたが、明子が連れ去られそうになる事が起きた。連れ去られては一大事である。

白壁は明子を岡山の実家に帰した。

それが裏目に出た。

明子は昭和四十五年三月二十三日生まれで、事件の起こった年は二十三歳の終わりに近い歳であったが、背丈は百六十四センチ、均斉の取れた肢体に少し小さめの端正な顔を持ち世慣れないためかいつも堅い印象を与えていた。そしてはにかんだような笑顔を作ると左側に笑窪が出来、白目の美しい女だった。

実家には両親と兄夫婦、そして大学に通う三つ違いの妹がいた。

明子が実家に帰り、年が明けて二週間ほどした夜、何の連絡もなく突如として明子が帰宅し、白壁に

「逃げよう」

と言った。

洞貝はどこでどう調べたのか、明子を岡山の実家まで追いかけて、事故で入院していたという弟分である十六歳の金森誠三こと、金誠三と共に

「示談の話をしよう」

と、明子を電話で呼び出したのである。

「何をされたんだ」

と言う白壁に、明子は弱々しく首を振るばかりだった。

「警察へー」

と言う言葉にも弱々しく首を振り

「逃げよう・・・」

と繰り返した。

警察の今までの対応振り・・・事件じゃないからねえ、と何度いわれた事か。しかし、事件は起きてしまった。どうする・・・

白壁がどうしたら良いのかと思っていると、明子が後ろから抱きつき

「ねえ、逃げよう」

と泣きながら繰り返す。

そう言っただけで繰り返している明子の右腕が不自然に垂れている事を白壁は見逃さなかった。

白壁がブラウスの腕をめくろうとすると、明子は

「いや！いや！」

と、激しく抵抗した。

見ると注射痕が二つ。

白壁はそれを悲しく見詰めながら、どうして良いものかと思った。

明子の言っている事が判らないでもないのだ。相手は分別の出来ない子供と呼んでいいような連中が十人はいるのだ。怒りに任せた解決は出来るだろうが、その時は自分の破滅も覚悟しなくてはならない。それを本能的な自己防御として、事件が起きる事を楽しみにしている子供たちー。

明子は声なく泣きじゃくり

「あなた・・・あなた・・・」

と、闇に向かって語るがごとく呟き、白壁に両手を差し伸べた。

白壁は明子と共に失踪した。

平成七年一月十五日、阪神大震災の前々日の事である。

折からの低気圧のため、六甲嵐が一段と吹きすさぶ冬の日の事だった。

「その後白壁夫妻がどうなったのかは判りませんか？」

と佐橋が尋ねると、谷は困った顔をして

「刑事さん、チンコロしたんとちゃうんですよ」

と言い、実は白壁が逃げる時、退職金とか他にも煩雑な用件が残っており、それを当時隣に住んでいた谷が代行したのだという。

「すると谷さんは白壁夫婦が何処に逃げたか知っていたわけですね？」

「いいえ、私も家内も白壁君の銀行の口座しか知らなかったんです。けれどー」

半年もした時に、家内に連絡があったという。

「すると・・・」

「荷物を送って欲しい、という事でした。荷物ちゅうても、クリー

ニングに出してあった服ですけど・・・」

それと符帳を合わせるようにして洞貝が現れたという。

「隠せんやないですか。あんな連中やし、白壁君がどないな目にお
うたか考えてみて下さい」

と言って苦り切った顔をして、作業服の胸ポケットから紙切れを取り出し

「昨日班長に、明日警視庁の方がみえるからって言われてー」
と所在なく言った。

白壁と西岡の写真が並べてある横に、紙切れが置かれた。紙切れには

名古屋市熱田区沢上町二丁目××××

コーポ波石 205号室

と、白壁夫婦が潜んだであろう住所が写されている。

谷は紙切れを見ている佐橋に

「ですけど」

荷物を送ってしばらくしたら刑事が来たと言った。

「刑事」？

「ええ、洞貝が来て一月くらい経っていましたか、夜、社宅に訪ね
てきました」

何処の？ と尋ねる佐橋に、覚えていないが

「みんな同じ事聞くんですわ」

やはり名古屋の住所を教えたと言う。

そのやり取りを聞いていた佐野が

「そういう事なら二年くらい前に白壁君の事を教えてくれと言って、
興信所の方が来た事がありますよ」

と言う。

「興信所？ 二年前？」

その後三十分ほど話をしたが、それ以上の収穫はないようだった。

佐橋は礼を言って阪奈製鋼を後にし、そのまま阪急の塚口駅から大
阪に向かい、名古屋を目指した。

二時過ぎに名古屋に着き、地下鉄に乗り換えて金山駅で降りてから十分ほど歩くと、コーポ波石にたどり着いた。きっかり三時だった。青い屋根を持つ二階建てのアパートだった。住人に大家の住所を聞く、隣の大きな家がそうだと言う。

佐橋は言われたように大きな門灯のある家の門をくぐり、波石悟郎と書かれた家の呼び鈴を押した。庭が広く、少し早いけどどこからか沈丁花の匂いがしている。

対応に出た二十二・三歳の娘に用件を伝えると、五十歳半ばの白髪の主人が額をぴしゃぴしゃやりながら出てきて

「どうぞ」

と、佐橋を応接室に案内した。

「白壁さんなあ」

と、佐橋が並べた二枚の写真を見ながら、あの年の八月終わりにやはり同じ事を聞きに刑事が来たと言う。

「けれども部屋だけ見て帰りましたよ」

「と言うと？」

「居なくなってしまったんです」

部屋を貸して半年もした七月半ば、荷物もそのままにして消えてしまい、自分は本当に迷惑をしたのだと言い、その荷物がまだ少し残っていると云った。

佐橋は波石の言い方に少し引かかる物を感じた。

「少し残っているとは？」

波石は癖なのか、額を手でぴしゃぴしゃやりながら

「いやあ、始末に困ってね、電化製品なんかは家で使っている物もあるから・・・」

と言った。

波石は白壁が居なくなってしまった後、勝手に荷物を処分した事を気にしているようだった。

「残っている物で結構ですから、ちょっと見せて下さい」

と佐橋が言つと、傍らで話を聞いていた娘が、奥から白壁と書かれ

た蜜柑のダンボール箱を持って来て

「これです」

と、佐橋の前に置いた。

開けてみると中には持ち主を失くした白壁夫婦の衣類が詰まっております、他に残ってる物は

「植木だけです」

と言う。

「植木　？」

「白壁さんが居なくなってしまったのは七月の中頃でしたか。家賃を払ってくれませんので、保証金の三か月分を家賃に繰り入れましてね、残っている家財は十月に処分しました。その時に窓辺においてある鉢に、萩の花が咲いていたんです。不思議な気がしましたよ、誰も居なくなってしまった部屋に花だけが咲いているなんて――」

そして、門灯の脇に植え替えてあるのがそれだと言う。

ダンボール箱を開けてみると、男物のスラックスが二本と、淡いブルーのワンピースがひとつ出てきた。

実は白壁が消えてすぐ尼崎からこれが送られて来たため、何となくこれだけ保管してあるのだと言う。

佐橋が、白壁に関して他に判る物がないだろうか、と尋ねると、波石は娘に

「帳面持って来てくれ」

と言った。

娘は何も言わずにまた奥へ消えて行き、しばらくして戻って来て

「はい」

と言って、市販のノートを波石に渡した。

帳面と言っていたが、それは波石が書き込んだ居住者名簿であった。細かい几帳面な字が並んでいる中に、白壁貢、明子と書いた欄があって、そこに鱈目な前住所や本籍が書いてある。そして勤務先の欄に「金龍」として電話番号も載っている。

波石に断わってノートを借り、自分の手帳に写してから電話をかけ

てみた。すると、白壁はうちで働いていた、と言つ返事である。それからちよつと待つてくれと言ひ、店の主人らしき男に代わつた。その男は、あなたが刑事さんなら是非話したい事があると言つて「伏見の錦通りに面しているからすぐ判りますから」という事だつた。

佐橋は波石の家を辞し、地下鉄で今度は伏見へ向かつた。地下鉄に揺られながら、佐橋は白壁夫婦のことを思う。「追われる」という初めての恐怖の経験の中で、夫婦は一生懸命に知恵を絞つたのである。嘘の前住所や本籍を書きながらなお本名を名乗るといふアンバランスが、その辺りの事情を偲ばせる。どこまで徹底して良いのかと、逡巡している夫婦だけの姿が、佐橋は判る気がした。恐らく、一年か二年、ほとぼりの冷めるまでという気持ちがあつたのであろう。

地下鉄を降りてから、ネオンが瞬き始めている繁華街の中に、広東料理「金龍」

と赤く光る文字を見つけ、佐橋は店の中に入った。店は客でこつた返している。

金龍の主人は姫野と名乗り、ここでは話しは出来ないからと言って近くの喫茶店に佐橋を誘ひ、この時間帯が一日で二番目に忙しいかと笑つた。

姫野は佐橋が聞きもしないのに、積極的に語つた。

「誰かに話をしたかつたんです」

と言つて、姫野は平成七年六月の出来事を語つたのだつた。

平成七年六月中旬、その日は白壁の早番の日であつた。

午後四時に店を上がつた白壁が、鼻血を出し、唇を切つて店に戻つたのは六時過ぎであつた。胸の辺りを血で染めて、車で戻つて来たのである。白壁は店に戻ると刃渡り四十センチもある菜切り包丁を片手に

「ちきしょう！」

と言って、皆の止めるのも振り切り、表に停めてあったカムリに乗って何処かへ行ってしまった。

「とにかく凄い形相でしたよ」

店では理由も判らないまま、二日三日と経ち、心配でアパートへ様子を見に行こうとしていた矢先の四日目の昼、白壁は蒼白い顔で店へ戻ってきた。正午を少し過ぎた時刻で、店内は客で混雑し始めていたが、通用口に現れた白壁は四日前と同じ服装で、やはり胸元に血痕がこびり付いていた。

しかしそればかりではなく、左太ももには新しい怪我らしく、ズボンにまだ乾ききらない血が滑っている。

「・・・どうしたんだ！」

「ちきしょう・・・」

白壁は涙を流し、呻いて土間に座り込んだ。

早速病院へ連れて行くと、入院が必要だという。このままでは歩行が不自由になるという。白壁はそのまま入院した。医者は鎮静剤を打ったからもう眠るでしょうが、しかし明日には手術をしないといけません、と言った。

が、その翌朝、白壁のベッドは空になっていたのである。

「どこへ行ってしまったのでしょうか。何があっただんでしょう？ 私は、あれは事件に巻き込まれたのではないかと思うんですよ」

「その後、何の連絡もないのでしょうか？」

姫野は波石と同じように、八月だか九月だかその辺りに刑事が来たと言い、佐橋が何処の刑事だったのかと尋ねると、刑事の名前は覚えていないが、署は

「姫路のシカマ、だったですよ」

と言って、自分の名前と似ているから覚えていると言った。そして、その後白壁はどうなったのか、というような事を頻りに聞いた。

佐橋はその日は名古屋に泊まり、翌朝早く名古屋を発って午前十時半に兵庫県警飾磨警察署へ行き、当該の事件があるかどうか尋ねた。「平成七年ちゅうたら震災の年やな、それで・・・七月か八月やて」と言つて事件記録を調べていた瘦せぎすの事務官は、しばらくページをめくってから

「ああこれや、白壁つて書いたあるわ」

と、八月十二日付けの事件記録を佐橋に見せた。

訴人欄は金井章介、被訴人欄は金森誠三と書かれているが、事件概要等は空白になっている。そして担当検事名が訴人欄と同じ金井章介となつておりその横に裁判官などの名前が記載されている。そして担当刑事の名前は用紙の裏に遠慮勝ちに書いてあった。刑事の名前は、宮下卓郎となっている。

「この事件が知りたいのなら裁判所に行つてもしやあないなあ。宮下君に会つて話を聞くより仕方ないやろ」と言つた。

「傷害事件となつてるけど・・・なんせ不起訴やからねえ。詳しくうは判らんなあ」

そして書類のあちこち見えていて

「これは・・・放火と薬物事件も絡んどるようやな・・・被疑者不明になつとる・・・小さな事件だけを立件したんやなあ」と真剣な顔付きをした。

「・・・その宮下さんは何処におります？」

「ちよつと待つてや」

事務官はそう言つて近くにある電話機を取り上げ、二・三電話をした。仲間への電話なのか、笑つたりして長い電話だった。

所在なくカレンダーなどを眺めていると、受話器の下部分を押さえながら佐橋に向かつて

「今はな、加古川署やて。お客さん抱えてるから今日は署に一日おる言つてゐるわ。どないする？」

と言っ。

佐橋は、すいませんと断わり、受話器を受け取って電話の相手である宮下に、今から会いたいと伝えた。

電話の向こうで宮下は事務官から何か聞いているのか、佐橋には何の用事かも聞かず、なるべく早く来てくれと言った。

加古川署に着くと正午だった。

宮下は見たところ五十年配にみえたが、佐橋の来訪を知ると

「おお、待つとたで」

と腰の低い言い方をした。

「明日お客さん、送検しんならんねん。時間は二時間がぎりぎりやけど、ええか？」

と言っ

「込み入ったるさかい、ここでは話もされへん。ちようど昼時やし」と、佐橋をすぐ近くのファミリーストランへ誘った。そして席に座るや、白壁の事をどうして知りたいのかと聞き、佐橋がその理由を手短に話すと

「ああ・・・白壁は死んだか・・・」

と言っ、遠いところを見るような顔付きをした。そして昼食ランチをフォーク一本で食べながら、佐橋が出した白壁と西岡の写真を見て

「ん、これは白壁やな。もう一人のこれかあ、知らんな」

と言っ

「あらあ、ごつい事件やでー ほんまなら十人はぶち込めた事件や」

と、宮下は話し始めた。

佐橋は宮下が短く刈った胡麻塩頭をがりがりやるので、ふけが落ちるのではないかと、そんな事を気にしながら聞いた。

六月二十九日夕方五時、飾磨警察署へ一人の男が姿を現した。白壁

貢と名乗ったその男は脚を引きずりながら、姫路の町の何処かに自分の女房が監禁されている、助けて欲しいと言った。対応に出た宮下が話を聞くと、十日ほど前に名古屋で誘拐された女房が今はこの町にいる事が判ったのだと言う。そして何故もつと早く警察に来なかつたのだと言う宮下に

「三日前にも京都の宇治署に行つたんだ」

と言つて、とにかく早く助けて欲しいと、そればかりを繰り返した。宮下としては宇治署がどんな動きをしているのか判らず、事件の管轄が宇治署になっているなら尚更、迂闊な動きは取れない。

しかし目の前の男の必死さは放つておけない。

ある程度の事を聞いてから、宮下はとにかく宇治署に連絡を入れた。すると

「そうや、確かに三日前にこちらに来てるけど、その前に愛知県警の中署にも行つてるんや」

と言う。そして

「愛知の方もな、連絡がないし、といってこちらから連絡も取れんて言つて困つてたで」

宮下はその一言で大方の予想が付いた。

おそらく、事件が宙に浮いているのである。

第一に攫った女を暴走族の二人組みが、あちらこちらと連れ回している事。

第二に追つかける白壁がその時々各警察署へ駆け込んでいる事。

第三に全ての時間の間隔が短い事。

宮下は白壁から詳しく状況を聞こうと取調室に案内したが、白壁は気が気ではないのか、途中で何度も立ち上がったとはとにかく探しに行くこと宮下を困らせた。

経緯としては

1 名古屋のアパートへ帰ると自分の女房が洞貝と金森に連れ出される場所であつた。

2 探し回つた末に一宮のラブホテルで洞貝たちの車を見つけた。

3 ドアを蹴破って喧嘩になったが、反対に打ちのめされた。

4 撲られた時の言葉から、京都のラブホテルを探した。

5 京都の宇治で見つけて今度は包丁で切りつけたが、また反対に脚を刺された。

6 姫路の金森のアパートで車を見つけ、窓ガラスを割って入ったが裏から逃げられた

それがまだ三時間ほど前だと言う。

宮下は何とかしなければと思い、防犯の人間に助けを求めた。ところが色んな刑事が出入りしている間に、白壁は消えてしまった。

宮下の音頭でとにかく緊急の、とりあえずの捜査体制が敷かれたのが夜八時過ぎだった。

まだ本格稼動するには時間が足りないし、白壁本人が居なくなってしまうている。

ところが十時前、その本人である白壁から電話が入った。

「居場所が判りました」

と、息せき切って言って余部のマンションの名前を告げ、待つように、と言う宮下の声を振り切るように電話は切れた。

宮下は手の空いている三人の警察官と現場に急行する。

現場は、大混乱であった。

火事である。

そして火事場のすぐ横にはシートにくるんだ明子を抱きかかえて、白痴のように表情を失くしたその明子に、頼ずりをして哭いている白壁の姿があった。

「佐橋はん、出火したんは明子が監禁されとったマンションや。マンションゆつてもアパートに毛が生えたようなもんやが、しかしや、三軒が類焼、焼け出された世帯が十一世帯や。幸い怪我人はおらんが、火事と別な所でな、金森が瀕死の重傷で見つかったのや」

「やはり白壁が？」

「判らん。判らんちゅうのはや、翌朝病院から消えてもったんや」

「金森がですか？」

「ちやうよ、白壁や。集中治療室に入れられていた明子を持ち出して行方知れずやでー」

「集中治療室？」

「ヤク漬けやー シャブとちやうでえ」

「・・・」

「まあヤクもシャブもごちゃごちゃやったらしいけど、攫って来たハナからばんばん打つと言うこつちや。病院の先生もな、よう生きとった言うてな」

「・・・」

「そればかりやない、足の裏が焼けとった」

「・・・逃げられないようにしていた訳ですか？」

「それが、違うんや。当時洞貝は暴走族の頭を張つとたやろ、十五から十八歳位の子供たちと明子を輪姦してな、遊んどったんや」

「それが足の裏の火傷と何か関係が・・・？」

「明子はヤク打たれてめろめろになつてゐる訳や。抵抗できる状態やない。そこをみんなで好き勝手に犯して責め立てるわけやが、普段の何倍も敏感になつた身体が勝手にびんびん反応するだけや。そいでな、犯してる時に他の奴が煙草の火を足の裏に押し付けるんや」

「・・・？」

「洞貝はな、きゅうつと締まってええ気持ちやねん、て、笑つてたわ」

「・・・」

「気違いやで」

「しかしそれにしても不起訴とはー」

「あかん。儂が言うてる事は洞貝が言うてる事をそのまま言うてるだけの事や。証拠はみんな燃えてもうたし、白壁は行方不明やで・・・」

「・・・」

「しかし・・・」

「被害者の特定も出来んのや。白壁明子ちゅう証拠は何処にもない

ねん。科学捜査もみんなやったし、儼かて二ヶ月間走り回った。しかし、あかん。検事は起訴できん言うんや。病院のカルテかて白壁明子という名で作られたわけやない。放火かて白壁と思うよ、しかし何も残ってないねん」

「・・・」

「被害者も被疑者も不特定では起訴は難しいんや。金森の怪我の件だけを取りあえず起訴して、事件を延ばそうと思ったんやけど・・・不起訴やし・・・」

「・・・」

「普通、ヤクザかてそこまでせん。いや、ヤクザやからそこまでせんのやろうけど、洞貝はな、やりたい事やって何であかんのやって」。子供やろ、程度というもんがないねん」

最後に佐橋は金森が重傷を負っていたのは何故かを聞いた。

「鍵や」

白壁は金森が部屋の鍵を持っていると思ったらしいと言う。

「マンションがな、金森の親父の物なんや。それで奪おうとしたのやろう。車で川に突き落としたわけや。川、言うても今日はコンクリートの塊やで」

顔面に陥没裂傷を負って半年入院していたと言い、その後の金森の容姿を

「お化けになってもうた」

と表現した。

しかし、金森は鍵を持っていなかった。そこで白壁は灯油を六十リットルとガソリンを二十リットル買って来て火を点けたわけだ、と言う。

「洞貝も無茶やが白壁も無茶や」

「・・・今、洞貝はどうしてます？」

「消えた。あの事件から二年も経っていたかな？ 五年前やな、お袋さんから捜索願いが出て判ったんや」

「金森は？」

「金沢や」

「金沢？」

「あれもばりばりの組員になって、三年前に恐喝と傷害で挙げられたんや。あと二・三年で出てくるのやないかな」

「・・・」

「携帯でもあつたらなあ。あの事件も変わつてたやろうが、まだあの時はポケベルの時代やったし・・・白壁も洞貝を追っかけている時に警察と連絡が取れなかったんや・・・明子は、死んだんやるか・・・」

宮下は悔いが残る事件なのであろう、予定の二時間を大幅に遅れても席を立ちそうになかった。

窓から見える空地に、背の高い枯れ草が固まって朽ちており、その穂先を冷え切った風が重そうに吹いている。

佐橋はいつも軽妙な語り口で人気のあつたタレント弁護士が「人生なんていい加減なもんや」という書置きを残して自殺した苦衷が判る気がした。あれは、妻の浮気だった。誰でもが例外者に違いないのだ。人と接する笑顔の裏に、焦燥にやつれた姿が漂っているのが大人の顔なのかも知れない。

佐橋は六時に会う約束になっている明子の兄の事が気になっていた。

第2章 その3 白いハンカチ

岡山駅を降りると、風が一層強く吹き募っていた。

佐橋はタクシーに乗って西大寺にある明子の実家に向かった。六時を回って真つ暗であつたが、タクシーの運転手は誰にも道を聞くことなく明子の実家の前に停めた。その事を疑問に思っている佐橋に気がついたのか

「西大寺浜の加野って言えば、あんた、昔の名士だよ。死んだ先代

は議員さんだったはずだ・・・俺のような古い人間は知っているよ」と、お釣りを渡しながら言った。

昔ながらの長屋門をくぐると広い農家のような庭があり、その向こうに真新しい母屋が見える。犬に吠えられながら庭を横切り玄関に立つと、白いエプロンを掛けた女性が、何処にいたのか佐橋の後ろから小走りに駆けて来て

「お待ちしておりました」

と、佐橋を明子の兄である加野民雄の待つ客間へ案内した。

枯山水の掛け軸を背にした民雄は、無口であった。

「この間の刑事さんにも言うたが、明子の事で話すことは何もありません。警視庁かて何かで一緒です」

と、のっけから言い、後は口をつぐんで滅多に喋らなかった。

そして、白壁と西岡の写真を一瞥して、白壁は知っているがもう一人は知らない、と明確に答えた。

佐橋は民雄の態度から推して、警察沙汰になっているような妹を持った事を民雄は不運に思っているらしく、明子を決して赦していないようであった。

「明子にはもう七年も会うとらんです・・・会いたいとも思いません」

と、民雄は取り付くしきも無いような口調で言う。

佐橋は話の接ぎ穂を失った。

何となく対決しているような具合になり、無口な二人がそれぞれ腕を組んでいると

「民雄、刑事さんがお見えになったんか？」

とう声と一緒に八十歳近いと思われる父親が姿を現した。そして挨拶をしてから

「明子の事じゃあ、と聞きましたが明子のおる所が判りましたか？」
といい、佐橋がそれはまだ判らないと答え、白壁の死んだ事や来訪の目的などを差し障りのない範囲で話すと、父親は片手をぶるぶる震わせて言った。

「白壁ん奴あ赦せんのだじゃ」

自分は白壁を憎んでいる、死んだから良いというものではない、というような事を繰り返し話した。そしてこちらは民雄と違い、明子のことは自分では何とも出来ないもので世間様に宜しくお願いしたいと言った。

小一時間、気詰まりな会話を終え、古い明子の写真などを見せてもらってから帰ろうと靴を履いている時、先ほどから何となく気になっていた匂いの事が口について出た。

「線香かー」

それは波の下で漂っていた小魚が、不意に波の上に躍り出た姿に似ていた。

そう言えば宮下刑事が、明子は死んだんじゃないかと言っていたが・・・

佐橋は靴べらを渡そうとしている民雄の奥さんに

「あれは・・・？」

と聞くと、答えは佐橋の推測とは全く違うものだった。

今日が三年前に死んだ義母の命日だと言う。

佐橋が墓のある場所を聞くと「信覚寺」という名前を出し、町外れにある場所を言って訝し気な顔をする。

明子はこの家には帰って来れまい

これは確信である。

しかし、母親の死を知ったなら・・・

明子は一度は墓参りをしているのではないか。親類と連絡が取りずらくなっても、友人とか何らかの方法で身内の動静を知っていると考えるのが普通だ。自分の人生の利害関係の埒外の誰かと連絡は取っているはずだ。

聞けば歩いて二十分くらいだと言う。

広々とした田んぼが続く広域農道を烈風に吹かれて二十分も歩くと、確かに信覚寺であると思われる屋根が黒々と寒天に姿を現した。

信覚寺は吉野川の堤防の傍らにあった。

対応に出た青年に用件を伝えると、しばらくして素足の住職が現れ、上げれ、と言う。

青年が座布団を持ってきたり、扇風機のような赤外線ストーブを用意したり、お茶と受け菓子などを出したりした後、指図していた住職が立って見ている佐橋にようやく座れと言う。佐橋は身体が冷え切っていたので有難かった。

人心地ついて大きな座敷で住職と向き合くと、住職は、今までビールを飲んでいたので顔が赤いかも知れんがと、おかしな断わり方をして

「あんた、ほんまに刑事さんやったら警察手帳お持ちやろ、見せて貰えまいか」

と言つて、佐橋が取り出した警察手帳を差し上げと覗き込んで考えている様子であったが、やがて、口止めされているんだが、と言つた。

「典子さんに口止めされているやだが、あんたなら良いやろう・・・いや、あんたになら言つた方がええ気がする」

と頷いて、去年の夏、明子さんに会つたよと言つた。

「あれは墓参りにおいでたんやと思うが・・・あれは明子さんやと思うよ。何せ、儂を見よつたら逃げるようにして去んでもうたしな」しかし子供の頃からよく知っているからまず間違いはないだろう、と言つて

「余ほど儂に会つのが嫌やつてんなあ。黒いセーターを忘れて行きよつた」

「・・・黒いセーター」

それを明子の妹の典子に渡したと言つた。

佐橋はすぐさまその場で携帯を取り出し、民雄に典子の住所を尋ねた。民雄は不承不承典子の住所を言つてから

「あんた、もう明子の事は放つといて下さい」

と言つて一方的に電話を切つた。

倉敷にある典子の婚家に着いたのは、十一時だった。

吹きすさんでいた風に、雪が混じり始めている。

本普請の民雄の家も大きかったが、住宅街の真ん中にある鉄骨三階建ての典子の家は更に大きかった。道路沿いに間置石が三十メートルほど続き、その端に玄関に続く階段がある。その階段を上がりながら、佐橋は思う。

これで明日の会議は絶対間に合わない

井原の不機嫌な顔が浮かぶ。

二十六歳だという典子を見て、まず佐橋は、先ほど見た明子の写真に似ていることに驚いた。目鼻の筋が通っていて、くつりとした目。一昔前の美人の顔やな、と宮下刑事は言っていたがそのようだ。

「寒うございましたでしょう」

そう言つて典子は佐橋と、主人である坂口一郎の前に熱いコーヒーを置いた。そして自分の前にはお茶を入れた湯飲みを置く。

「何ですか、典子に聞きたい事があるとかー」

そう言う坂口はムートンの掛けてあるソファに腰を下ろしている。年齢は佐橋と変わらないが、声が割れている。学生時代にスポーツをやっていたのであろう。

「ええ、白壁明子さんの事を少しお聞きしたいのですがー」

と言つて簡潔に要点を述べると

「どうなんだい？」

と、坂口はガウンの裾を叩いてから典子に向かって言った。坂口はパジャマの上からガウンを羽織っているのだが佐橋に対して全く臆したところがない。育ちのようだった。

電話を受けてから化粧をしたのか、典子の口紅に光沢がある。

典子は少し困惑した様子を示したが、頭を軽く下げ

「ごめんなさい、あなた」

と言った。

実家のごたごたを婚家に持ち込むのに遠慮があるようである。

「いいよ、気にしなくてもー　やはり何かあったのかい？」

短い言葉の端々や動作に、坂口の典子に対する思いやりが読み取れる。

典子は佐橋に向かって言った。

「去年の夏、義兄さんここへ来ました」

「やはり、ここへ来ましたか」

「義兄さん、可哀想に、ここへしか来る所がないんです。父も兄もあんなんでしょう。顔、出せませんもん」

坂口は頷いている。

去年の八月十三日の午後一時ごろ、外出先から帰ってくると炎天下の中、白壁が家の前の木陰になった階段に座って、白いハンカチで汗を拭いており、典子を見て懐かしそうに笑顔を見せたと言う。

典子は、その時なにか言っておりませんでしたか、と言う佐橋の問いに、どう答えたら良いのかとずい分迷っている風であったが、結局

「　何も」

と言った。

「別にこれといって話らしい話はありませんでしたが」

新婚旅行の話を懐かしそうにしたと言う。

「新婚旅行？」

「ええ、姉さんたち凄く反対を押し切って結婚したでしょう。家柄が違つて、そりゃあ大変でしたの。だから四国へ行った新婚旅行だけが楽しい思い出だっー」

そう言つて坂口を見て微笑んでから

「僕は明子を守つてやる事が出来なかつたって、そう言つてました」と言つた。

佐橋は別な角度から尋ねた。

「明子さんが今何処にいるのか知っていますか？」

「全然　義兄さんにもそんな事を聞かれましたけど、私には連絡が一切ありません。私が知っているのは尼崎に住んでいた当時の事だけで、その後の事となると全く判りません。私も大学生でした

しー」

そう言つて坂口を見ると、坂口が

「典子には一度話した事があるんだが」

と言つて、コーヒーを飲んで続けた。

「いや、刑事さん、私から言つのも変ですが、私の両親も家にこだわる人間なんです。そこで二年前に典子と一緒にする時に仲人に頼んでその辺りを詳しく調べたらしいんです。どこその興信所に頼んだらしいんです。資料は貰っていませんが尼崎でヤクザに絡まれて何処かへ行つてしまった。その後の事は判らない、という事でしたよ。そうだよ、典子」

坂口がそう言つと、典子はため息をつき

「あなた、本当にごめんなさい。隠そうと思つていた訳じゃないんですが、私にも判らなくて・・・」

と言つて、実は失踪してから半年ほどして刑事が岡山の実家に来た事があると言つ。

「姫路で何かあつたらしいんですけど、私たちには何かあつたのか判りませんもん」

そう言つて佐橋を見て

「刑事さんは何があつたのか知ってますの？」
と聞いた。

「・・・いや、知りません」

と、とつさに佐橋は答え、反対に質問をした。

「去年の盆にお墓参りに行きましたね？」

「ええ・・・その時セーターを預かつたんです・・・」

と言つて口ごもる。

先ほどから佐橋はその話の辺りになると、典子が何か言いにくそうにしているのを感じていた。坂口も同じ思いだったのであろう。

「典子、何も無理に話す事はないよ。話さなければならぬ義務なんてないんだから・・・そうでしょう、刑事さん」

と坂口が言つと、典子が

「いいえ」

と強く言った。

「隠す事なんて何もないんです。そんな事じゃなくて・・・話すという事は、何か義兄さんたちの大事な秘密を話すような気がするんです。だから私、どう話して良いのか判らなくて・・・」

典子の後ろにある出窓が、温度差のためかびっしりと水滴を付けている。窓の向こうに白い影が流れているのは、雪だろう。そしてその脇にある鉢植えの春蘭が微かに揺れている。

「義兄さんにあのセーター見せたんです」

態度が一変したという。

「義兄さん、私に何か話があつて訪ねて来たと思うんです。おそらく市役所かどこかでここを調べて来たと思うんですけど、あの時の話振りでは・・・別れを言い到此へ来たような感じでした。私に別れを言うという事は、きっと、姉さんとの間の事で、何かあつたと思います」

「・・・何かあつた？」

「心に変化が起きたんだと思います。義兄さん、詳しい事は何も言いませんが、姉さんの事、探していたと思うんです。何処かで、何らかの理由で、姉さんが行方不明になつてしまった・・・それを、六年間ずっと探していたと思うんです」

「・・・」

「私はあの二人の事、判る気がするんです。あなたにもお話したように、あの二人の出会いが私の原因だつたでしょう」

典子がそう言つて坂口を見ると、坂口が言った。

「典子と白壁さんとは尼崎の病院で一緒だったのですよ」

「ええ、私が高校の修学旅行の帰りに急性盲腸炎になつて、尼崎の病院で手術を受けたんですけど、同じ日に盲腸の手術をしたのが義兄さんだつたんです。大阪の美容師学校にいた姉さんが私の付き添いになつたんですけど、それがきっかけで急に親しくなつて・・・」

「ですから、初めから義兄さんたちの事を見てたでしょう。私、判る気がするんです。六年間、姉さんを探したけれど見つからない。どうやって探しても見つけれない。だからもう姉さんとは縁を切るう、それが姉さんの為にもみんなの為にも良いんだって、そう決心して私の所へ来たと思うんです。きっと、そうだと思います」

可哀想な義兄さん・・・」

典子はそう言つて涙をぼろぼろこぼし、話を続けようとした。

坂口がハンカチを渡す。

「それが、義兄さん・・・セーターを見せたら・・・義兄さん・・・」

号泣したという。

「出来ん。やつぱり出来ん・・・俺には出来ん・・・俺は・・・明子を守つてやれなかった」

そう言つてセーターを掻き抱き、泣き続けた、という。

「何が出来ないのか、私には判るようで、判りません。でも」

男の人つてこうやって泣くもんだなあ、と変に感動しましたと言つた。

その夜、倉敷の駅前のホテルで、佐橋は寝付かれぬ夜を過ごした。

明子は何処にいるんだろう？

白壁の過去を追うという当初の目的は達成したかのように思えたが、本来の目的である西岡との接点はどこにもない。

そればかりか、過去を追えば追うほど西岡が遠ざかり、明子の存在が眼前に立ち塞がる。

病院から逃げ出した白壁夫婦のその後に残された未来は、どのようなものだったのだろうか。

淡いブルーのワンピースに身を包み、泣いている明子　それが、佐橋の神経をいたく刺激した。

平成十四年六月四日、葉桜の木漏陽が降り注ぐ千葉刑務所へ、省二

郎は入所した。

刑期、無期。呼称番号1103番という符丁になった省二郎に残されているものは、何ひとつもないように思われたが、ただひとつ残されているものがあつた。

それは黒暗暗たる闇に閉ざされていたが、未来である事には違ひなかつた。

冬の章 完

青いワンピース（後書き）

これで「喪失の青空」の冬の章は終わりです。
ここから本当に面白い、喧騒の夏が始まります。

長い読み物ですが、どうぞお付き合い下さい。きっと面白いと思います。

愛情とは何か、が、テーマなのですが、今までの部分はその条件作りの舞台に過ぎません。

さて「形骸を断ず」とは何を意味するのでしょうか？
喧騒の夏、始まりです。

堀田

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9116c/>

喪失の青空 冬

2010年10月11日15時30分発行